

バディファイトif～臥炎キヨウヤに弟がいたら～

楠木東弥

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

久しぶりにバディファイトをやつたら普通に面白くて書いた（小並感）

ソフィアをヒロインにしてえなあと思いい良い感じの立ち位置のやつがいないかと模索したら、キョウヤの弟ポジがあるやんけ！となつてこの小説が完成。

ソフィアヒロイン流れ流れ……ついでに原作ルートを辿った作品も流れ流れ……。

あ、後高評価と感想くれたら狂喜乱舞して更新頻度が上がります（）

目 次

第一章 封印されし外道竜編

第一話 初つ端からバディファイトをしない作品があるんだつて
よ

第2話 凍てつく星辰とかいうチート大魔法。相手は死ぬ！
7

第3話 ようこそ妖精溢れるレジエンドワールドへ

第4話 どうしてこうなつた？デュアルファイト開始！

第5話 恐れよ！これが学校の怪談なり！

第6話 決着！デュアルファイト！

第7話 復活!? 災厄の外道竜！

第8話 対決！世界を喰らう獣！

第9話 決着！全てを貫け！ドリル・ラム・バンカー！！

第二章 A B C カツプ開催編

第10話 なんの変哲もない日常を（適当）

第11話 対決！荒神ロウガ！

第12話 耐え抜け！これがAの力だ！

第13話 まだ勝負は終わつてねええええええええ！！

第14話 必殺！ガルガンチュア・パニッシャー！！

第15話！ 誕生！少年バディポリス！

第16話 共闘！少年バディポリス達の試練！

第17話 闘技場にて

第18話 凸凹バディ結成！ロウガとの再会！

第19話 獣VS星！新なる切り札！

第20話 相見えるは最恐の模倣兵器

第21話 刮目せよ！必殺技のオンパレード！

158

第22話 魂を一つに！『ドラゴニック・パニッシュヤー!!』

166

番外編 第23話 兄弟の会話

172

前篇 デイザスター会議

180

中篇 対決！荒神ロウガVS山崎ダビデ！

186

後篇 決着

193

世界はまた一步、カオスへと相成りて
欲せよ悪鬼。壊せよ邪竜。世界を喰らうはヤミゲドウ

199

第三章 新たなる舞台、スタードラゴンワールド

第24話 積み重なる課題

210

第25話 デッキビルド

216

第26話 いざ新世界へ

221

第一章 封印されし外道竜編

第一話 初つ端からバディファイトをしない作品があるんだつてよ

「悠斗、僕はこの世界を壊そうと思つてる」

ふと、そんな声がどこからか聞こえてきた。

ゆっくりとまぶたを開けると、正面には見覚えのある人物がいる。

世界的にも有名な臥炎財閥の御曹司、臥炎キヨウヤだ。

しかし小さい、今の15歳とは思えないほど小さいが、相変わらずその表情からは何を考えているのかわからない。

ああ、またこの夢か……。

夢はほとんど場合夢と認識できないが、この夢は見過ぎてすぐに夢と認識できる。

数年前、僕は兄である臥炎キヨウヤにそんなことを言われたのだ。

兄さんは臥炎財閥の後継者として休む暇がないので、話す機会は必然的に兄さんの事務室、それも夜と限られてくる。

しかし、世界を壊す、か。

何回聞いても全く理解できない。

こんな思想を持つ人間が臥炎財閥を継いでいいのかと思う反面、権力を持つた人はこうなるのかという納得がある。

「世界を壊すだなんて、兄さんもおかしなことを言うんだな。ゲームの魔王みたいだ」

僕の意思とは無関係に、当時の僕がそんな事を言う。

体は動かしたくても動かせないし、言葉だつて自然と出てくる。

「魔王……フフ、あながち間違いでもないだろうね。少なくとも、僕の計画を悪と断ずる人にとって僕は間違いなく悪だ」

当時の僕は、兄さんの言つていることがこれっぽっちも理解できなかつた。

まあ、小学生に世界を壊すなんて言つて理解できるわけがないけど。

「と、話が逸れたね。悠斗、君にも世界を壊す手伝いをしてもらいたいんだ」

「そんなのしたくない」

「まあ、悠斗じやまだ僕の理想を理解できないだろうね」

その言葉に、夢の僕がムツとしたのがわかった。

まあ、わずか1歳しか変わらない兄さんに馬鹿にされたらわからな
いでもない。

だけど、14歳になつた今でもその理想とやらは理解できないよ、
兄さん。

「この世界を覗るんだ。そうすれば、僕の言つていることがわかる」「…………ああそう…………ん？」

と、そこで気付いた。

いつの間にか、僕自身の声が出ていることに。

この夢の時のような高い声じやなくて、低い声で兄さんに言葉を投
げかける。

「喋れる……」「んなことは初めてだな……。と、兄さん。兄さんはま
だ世界を壊すなんて願望を抱いてるのか？」

「心配しなくても、この思いは全く風化してないよ。いや、することは
ない。この願望は僕が存在する意味なんだよ、悠斗」

兄さんも低い声になつてている。

これは夢なのに、まるで今の兄さんと会話してゐみたいだ。

そして兄さんの背後には、兄さんのバディ、アジ・ダハーカの三つ
首が浮いている。

邪悪な気配を纏つていて、赤黒い竜のシルエットに鋭く光る眼が不
気味だ。

「じゃあやつぱり、僕の願望も変わらない」

「フフ、悠斗もいづれ、僕の計画を理解する時が来る。その時が樂しみ
だよ。悠斗がいれば百人力だ」

心配しなくとも、僕が兄さんの計画を理解する時はこない。
だからただ首を洗つて待つていろ、僕が兄さんを止めるから。
と、そこで視界と意識がブラックアウトした。

◆◇◆◇

『お……ろ……マ……ターよ』

また、誰かの声がする。

寝起きはあまり気分が良くないので、その声を煩わしく思いながら顔を上げる。

しかし久しぶりに見たなあ、兄さん関係の夢なんて。

『やつた起きたか、マスター』

「ああ、おはよう。まだ昼休みだろう？ 疲れてるからまだ寝ていたいんだが」

僕の机に座っているバディ、エーヴィヒカイトにそう愚痴を漏らす。

エーヴィヒカイトは薄い琥珀色の胴体にライトグリーン色の近未来的な線が走っていて、さらにその背後には一対の砲のようなものが浮かんでいる。

今はSD化してるので問題ないが、SD化を解けば巨大なサイズ3のモンスターに早変わりだ。

しかし最低なことに、視覚情報が大変うるさい。

スタードラゴンワールドが混じっているので仕方ないと言えば仕方ないのだが、もう少しなんとかならなかつたものだろうか。

……いや待てよ、僕の使用するワールドはスタードラゴンワールドじゃないから、ワールドを変えられる可能性がある。

『我はこの姿が究極にして完璧なのだ。悪戯に手を加えれば、改悪は免れんだろうよ』

「知ってるよ。やるならとつくなやつてるさ。それと、ナチュラルに心を読むなよ」

『マスターとは4年が経過している。それくらいは容易いものよ』

ああそう。

さて、エーヴィヒカイト^{ハイ}の略称と話したおかげで完全に目が覚めた。

次の授業の準備をしようとした席を立つたところで、このクラスの異変に気付く。

「……おいヴィー。何があつた」

『私は知らんよ。マスターが寝ている間にこうなつておつた。しかしマスター、お主は本当に睡眠が好きだな。あれほどの騒ぎで目が覚めんとは』

……まあ、確かに僕はあまり目覚めがよくないが、昨日は忙しかつたんだから仕方ないだろう。

しかしクラスの人間が全員いなくなるとは、本当に何があつた。

緊急避難訓練？ 流石に起こされる。

いや、クラスの人間がいなくなつたことはどうでもいい。

「ソフィアは？」

『同じく知らん』

「……ちゃんと見てろと言つたはずだが」

『本人が言うたのだ。着いてこなくて良い、マスターを見ていろとな。つと、噂をすればなんとやら。帰つて來たぞ』

ヴィーに合わせてクラスの出入り口に視線を移すと、水色と青を基調とした服に身を包んだソフィアがいた。

いつもはドライな無表情を浮かべているのだが、今はわずかに息が乱れていて銀髪が数本立つてしまつていて。

それに気付いたのか、手で直しながら近付いて来た。

「起きていたのですね、悠斗様」

「ああ。で、何があつた？」

自分で言うのもなんだが、ソフィアが僕に何も言わず側を離れるのは異常だ。

一体何があつたのだろうか。

「ここ相棒学園に、また新たなバディモンスターが発生しました」

「……本当か？」

「ダ—」

つい1週間前も、こここの生徒がバディモンスターを引き当てたばかりだろう、いくらなんでも早すぎる。

その生徒はバディモンスターを引き当てたことを秘匿にしたから話題にはならなかつたが、臥炎財閥の情報網にかかるばその程度の情

報はすぐ手に入る。

「やっぱりこの学校はおかしいな。で、バディモンスターの情報は？」
「武装騎竜です。この世界に適応していなかつたので能力はわかりませんでした。申し訳ございません」

「いや、それだけわかれば十分だ。ありがとう、ソフィア」「光栄です、悠斗様」

ソフィアは嬉しそうに僅かに口角を上げてそう言つた。

表情豊かとなつたソフィアの微笑みは万人を魅了するものがあり、僕も例外ではなく彼女から目を逸らせないと、思考が逸れた。

バディモンスターが武装騎竜とわかれば、あとは能力を視るだけだ。

タイミングとしては放課後がベストだな。

「悠斗様」

「ん？」

「放課後、件のバディモンスターの持ち主、未門牙王と竜炎寺タスクの対戦が行われます」

竜炎寺タスクというと……ああ、最年少バディポリスか。
彼のバディモンスター、ジャックナイフドラゴンは僕のデツキとは相性がよくないからすっかり忘れていた。

世界に一枚だけのオリジナルカード、ガルガンチュアパニッシャーも僕のフラッグでは使えないから興味がなかつた。
けれど、彼の実力は相当なものだと聞く。

「……折角だ。観戦していこうか」

「ダ一。席を取つておきます」

「ん？ そんなに人気なのか、その対戦」

「はい。竜炎寺タスクが公式に対戦するのは初めてだそうです」「……ああ、それは注目されるわけだ」

竜炎寺タスクは『ガルガンチュア・パニッシャー』を持つていることもあり、世界的に有名な存在だ。

しかし、そのプレイスタイルやデッキはバディポリスの尽力もあり

明らかにされていない。

注目されるのも当然だろう。

「……色々と都合が良いな。ああ、タイミングが良すぎる」

龍炎寺タスク、そして未門牙王。

彼らの実力が同時に知れるのは、大変都合が良い。思わず口角が上がるのも、仕方がないことだろう。

「未門牙王。彼のどこに向かう」

「ダードー……悠斗様、その手は」

ソフィアが疑問を呈した通り、僕の手は彼女に差し出されている。その行動原理がわからないのだろう。

「いや、嬉しくてな。幸福は共有したくなるものだろう?」

「……では。失礼します」

そんな改まつた言い方をする必要もないだろうに、と思いながら、ソフィアの小さな手が僕の手に乗せられる。

恥ずかしさを誤魔化すように目を逸らし、けれど白い肌がわずかに赤く染まるのはバレバレで、握っている手からは僕を受け入れてくれているのがわかる。

かくいう僕も、先程より上がった口角を隠せない。

ああ、幸せだ。この瞬間のために生きているのだと、再確認させてくれる。

ソフィアとの確かな幸福を感じながら、僕らは誰もいない教室を出た。

『クッククック。相変わらず、見ていて微笑ましいものよ』

そんなヴィーからの念話を聞き流しながら。

第2話　凍てつく星辰とかいうチート大魔法。相手は死ぬ！

放課後、相棒学園のファイティングステージ。

未門牙王と竜炎寺タスクの対戦が終わり、僕とソフィアは未門牙王のバディモンスターの考察を深めていた。

＝＝＝＝＝

『ドラムバンカー・ドラゴン』

ワールド：ドラゴンワールド

属性：『武装騎竜』

サイズ：2

打撃力：2／攻撃力：70000／防御力：50000

コールコスト：ゲージ1を払う。

能力：2回攻撃

＝＝＝＝＝

これが未門牙王のバディか。

こう言つてはなんだが、強くも弱くもない。

単体で猛威を震えるほどの能力がないし、僕のデッキとのシナジーもない。

けれど、2回攻撃を持つているのとコールコストが軽いのは中々良い。

未門牙王も使っていたが、

「牙王フォーメーションと僕のデッキじや運用方法が異なるからな……チューニングしておこう。明日か明後日、未門牙王と戦いたいし」

し

『いや、なぜそうなる』

「これから計画を口にすると、ヴィーからそんな言葉が返ってきた。た。

ふむ……少し長くなるが説明しよう。

「未門牙王はフューチャーフォースを解放できる素質がある。つまり

り、兄さんの対抗手段になり得る』

『ふむ、つまりこちら側に引き入れるという事か。確かに仲間を増やすのに反対はないが、なぜこの者なのだ。キヨウヤの側近レベルの強さを持つ者などいくらでもおろう。そいつらを金で雇えば良い』
「バーカ。金で雇ったやつなんて信用できるか。第一、そんな大金使つたら兄さんにバレる』

『理解できているようで何よりだ』

「……お前、そういうところあるよな』

バディファイターというのは世界的にも有名な自営業。
有名な者、強い者というのはかなり金を持っている。

そんな者たちが馬鹿正直に金を欲してるとも思えないし、欲してたとしても請求される金は丸がいくつも並ぶはず。

雇うファイターの質を落とせばいいのかもしれないが、それでは側近よりも弱くなってしまう。

結局、正義感が強く成長性がある奴を育てるしかないのでだ。

成長性ではタスクも牙王と同等には感じたが、接触が難しいので却下。

あいつ普段学校来ないからなあ。

『しかし、育てるも何もマスターが強くなれば』

「ああ、僕だってちゃんと強くなってるよ。でも、流石に相性差はどうしようもないだろ』

僕の視線の先にいる人物、ソフイアを見て言つた。

グレムリンならこの絶望的な相性も何とかなるのだろうか……いや、それはないものねだりだな。

「じゃあやるぞー！」

「ダー」

「〔ディザスター・フォース、発動〕

瞬間、僕とソフィアを中心に空間が震えた。

紫の波動が空間を侵食していき、ファイティングステージを結界のようなもので覆う。

この結界内ではモンスターは完全にカードに縛られ、リアルファイ

トやファイターを傷つけることがない。

そしてファイターは、攻撃を食らつてもライフの消費という形で実際に傷を負わなくなる。

わざわざファイティングステージの設備を使う必要がないのでお手軽だ。

まあ、デイザスターーフオースの制御装置であるダークコアデッキケースを作ったのは兄さんなので、使うことに躊躇いがないわけではない。

しかしダークコアデッキケースがなければデイザスターーフオースを発動することが出来ないのもまた事実。

兄さんの手のひらで踊らされている感じがするが、リスクを呑んで使う価値は十二分にある。

「夜空よ止まれ、歴史よ凍れ。ダークルミナイズ、冬のダイヤ」

「来たれドラゴン、舞えよ竜。ダークルミナイズ、ドラゴンズヴァーバー

ズイン」

ちなみにヴァーズインというのは狂氣、狂うという意味のドイツ語だ。

ツヴァイはドイツ語で2という意味を持つので、どうせなら掛け声もドイツ語にしようという流れである。

ドラゴンはドラツヘとなつてしまふので変換はしてない。

「オープン・ザ・フラツグ」

「ドラゴン・ツヴァイ。バディは【超越竜王エーヴィヒカイト】

=====

ドラゴン・ツヴァイ

君は属性に「竜」か「ドラゴン」を含むモンスターを使える。

君の最初の手札は4枚、ゲージは2枚、ライフは20となる！

=====

=====

【超越竜王エーヴィヒカイト】

ワールド：エンシェントワールド／スタードラゴンワールド

属性：《ドラゴンロード》《ネオドラゴン》

サイズ：3

打撃力：2

攻撃力：8000

防御力：6000

コールコスト：ゲージ2を払い、君のデッキの上から1枚をこのカードのソウルに入れる。

起動：ライフ2を払う。払つたら君のデッキの上から3枚をオーブンし、その中のモンスター1枚までをコールコストを払つてコールする。

そのカードは場を離れるまでサイズ0になり、残りのカードはデッキの一番下に戻す。

この能力は1ターンに一度しか使えない。

能力：ソウルガード

『時空をも超越する竜。それは最早、神と同義ではないだろうか』

＝＝＝＝＝＝＝

レジエンドワールド

君はレジエンドワールドとジエネリックのカードを使える。

＝＝＝＝＝＝

【星神アストライオス】

ワールド：レジエンドワールド

属性：オリエンピア／星

サイズ：1

打撃力：2

攻撃力：7000

防御力：1000

コールコスト：ゲージ2を払う。

？？：君のレフトとライトの星属性のモンスターは破壊されず、手札に戻らない。

??：ゲージ1払い、手札の星属性のカードを1枚捨てる。そうすれば、次の相手の攻撃を無効化する。

この能力は1ターンに一度しか使えない。

『集え、星の子らよ。新たな神話を創造せよ』

＝＝＝＝＝＝＝

星神アストライオス。

あのモンスターはディザスター・フォースで無理矢理バディにしているだけなので、ヴィーとは違つて魂と呼べるものは存在しない。レジエンドワールドは竜やドラゴンがあまり存在しないので行く頻度が少なく、まだソフィアのデッキにシナジーするモンスターを見つけられていないのだ。

と、話が逸れた。ソフィアが先行だ。

「チャージ、アンドドロー。ゲージ1を払つてレフトに【謎多き占い師 ソフィア】をコール」

＝＝＝＝＝＝＝

【謎多き占い師 ソフィア】

ワールド：レジエンドワールド／ダンジョンワールド

属性：《冒険者》／《星》

サイズ：1

打撃力：2

攻撃力：4000

防御力：1000

コールコスト：ゲージ1を払う。

??：このカードが登場した時、デッキから設置を持つ魔法1枚までを手札に加え、デッキをシャッフルする。

この能力は1ターンに一回だけ発動する。

『勘違いしないで。貴方たちと行動を共にするのは、あの方を探すのに都合がいいから』

＝＝＝＝＝＝＝

あのモンスターは名前にソフィアとある通り、ソフィアにとても似た容姿をしている。

頭や背後に太陽を模した飾りがあつたり、水晶玉を胸の前で浮かせているという違いがあるが、銀髪や無表情な顔、青を基調とした服を着ている部分などは同じだ。

この世界の人間と似通つたモンスターが存在するのにはダンジョンワールドのある秘密が関わつてくるのだが……今語る必要もないか。

「テツキから黄道の輝きを手札に加え、そのまま設置」

=====

『黄道の輝き』

ワールド：レジエンドワールド

属性：『星』／『強化』

使用コスト：ゲージ1払い、手札の星一枚を捨てる。

？：君の場の『星』のモンスター全ての打撃力+1。

黄道の輝きは君の場に一枚だけ設置できる。

能力：設置

『集え、黄道の下に』

=====

「さらにキャスト、レジエンドエナジー。ゲージ+4枚」

これでソフィアのゲージが5枚になつてしまつた。

レジエンドエナジーは簡単に言うと、ハイパー・エナジーのレジエンドワールド版だ。

条件はもう少し厳しいとはいえ、汎用性が高い事に違いはない。

ドラゴンツヴァイは魔法を入れることが出来ないので、ゲージの使い方にはより一層注意を払う必要があるというのに。

「私でアタック」

「受ける」

これでライフが17に減つた。

魔法を入れれない＝攻撃を防ぐ手段がないというのは、こういう時にも響いてくる。

★ソフィア 手札4枚／ゲージ5枚／ライフ10／センター：なし／レフト：謎多き占い師 ソフィア／ライト：なし／設置：黄道の輝

き

さて、僕のターンだ。

ソフィアの切り札を切られる前に、決着をつける。

彼女とのファイトはそうするしか勝ち目はないのだが、運頼りなのがいただけない。

「ドロー、チャージアンドドロー。魔竜の眷属 ゴライオウの能力発動。手札のゴライオウを捨ててゲージ+2」

よし、これで準備完了だ。

「ゲージ2を払い、レフトにバディコール。【超越竜王 エーヴィヒカイト】！」

『ふむ、早速我的出番か』

瞬間、僕の後ろにいたSDヴィーが元の大きさに戻つてレフトに現れた。

淡い朱色の外殻を纏い、四足の足から伸びる長い尻尾はケンタウロスを思わせ、彼の頭上には光輪のようなものが展開されている。

周囲に浮かぶ計六門の砲身、身体中に走る赤や緑といった色とりどりのラインにより、スタードラゴンワールドらしい近未来を思わせる。

「エーヴィヒカイトの能力発動、ライフ2を払つてデッキの上から3枚をオープン。その中の【海王騎竜 グランバスⅧ世】をコールコストを払つてコール』

＝＝＝＝＝

【海王騎竜 グランバスⅧ世】

ワールド：ドラゴンワールド

属性：《黒龍》／《武装騎竜》／《白竜》

サイズ：3

打撃力：2

攻撃力：7000

防御力6000

コールコスト：君のデッキの上から1枚をこのカードのソウルに入れ、ゲージ3を払う。

??：このカードが攻撃した時、君のライフを+1。

能力：2回攻撃／ソウルガード／移動

『私はグランバスⅧ世！この名と紋章、しかと胸に刻むが良い！』

=====

グランバスは白と赤を基調とした全身鎧に、三叉槍と盾を装備したモンスターだ。

他に特筆すべき点はない。

「グランバスでソフィアにアタック。能力でライフ+1」

「2回攻撃。そしてライフ回復」

「受ける」

「さらにエーヴィヒカイトでアタック」

「受ける」

「これでソフィアのライフは4にまで削れた。

このまま行けば、次のターンでほぼ確実に勝てるだろう。

このまま行けば、の話だが。

「ターンエンド」

★悠斗 手札2枚／ゲージ0枚／ライフ：18／センター：なし／
レフト：超越竜王 エーヴィヒカイト／ライト：海王騎竜 グランバ
スⅧ世

「私のターン。ドロー、チャージアンドドロードロー」

瞬間、僕はソフィアの口角が僅かに上がったのを見逃さなかつた。

……ゲームセット、僕の負けか。

「ライトに【双子の星守り ジェミオス】をコール」

=====

双子の星守り ジェミオス

ワールド：レジエンドワールド

属性：《星》

サイズ：2

打撃力：2

攻撃力：5000

防御力：3000

コールコスト：ゲージ1を払う。

能力：2回攻撃

『君たちの運命は、もう動き出している』

＝＝＝＝＝＝＝

ジエミオスは白髪とピンクの髪の、黄を基調とした鎧に身を包んだ貴族のような格好をしている。

ちなみに、仮面を付けてるので素顔は窺い知れない。

サイズ2相当のステータスだが、【黄道】で打撃力+1されているので十分な脅威となっている。

「キャスト」

「……やっぱ持ってるよなあ」

もしかしたら、という淡い期待を打ち碎かれた瞬間だ。

これで本当に、僕の負けは確定してしまった。

【大魔法　凍てつく星辰】

ソフィアのデッキの核となるカード名が唱えられると、彼女の背後に一席の玉座が現れた。

氷でできた椅子に、それに続くようにかけられているレッドカード。

さらにファイティングステージの上空には真っ暗な闇に満天の星々が彩られ、神々しい雰囲気に溢れている。

＝＝＝＝＝＝＝

【大魔法　凍てつく星辰】

ワールド：レジエンド

属性：《星》

使用コスト：ゲージ2を払い、手札の《星》1枚をする。

？？君のレフトとライトに《星》がいるなら、相手の場とソウルにあるカード全ての能力を無効化する。

？？君の場のカード全ては手札に戻されず、能力を無効化されない！

？？【大運命　凍てつく星辰】は君の場に1枚だけ『設置』できる。

＝＝＝＝＝＝＝

各ワールドには、滅多に存在しない大魔法と呼ばれるものがある。凍てつく星辰もその1つで、その能力は強力極まりない。

ちなみに、ソフィアのデッキと相性差が絶望的と言つたのは、あのカードが原因だ。

能力無効化を無効化するカードは少なく、ドラゴンツヴァイではその対策はほぼ不可能。

【グランバス】がサイズ3に戻らないのは唯一の良い点だ。

「私とジエミオスで連携攻撃」

「……受ける」

これでライフは残り12。

ソフィアの奴、僕が防御カードを持つてないからってそんな安易に連携攻撃するなんて……。

「ジエミオスは2回攻撃」

「ライフで」

これで終わりと思ったが、そこまで甘くなつたらしい。

「ファイナルフェイズ、【アストライオス 風と星の生誕祭】を必殺コール」

|||||||

【アストライオス 風と星の生誕祭】

ワールド：レジエンドワールド

属性：『星』／『オリンピア』

サイズ：2

打撃力：2

攻撃力：8000

防御力：6000

コールコスト：ゲージ2を払い、君の場の『星』のモンスター1枚をドロップゾーンに置く。

??君のレフトとライトの『星』は破壊されない。

??君のメインフェイズ開始時、紙のレフトとライトに『星』がいるなら、カード1枚を引き、君のライフを+1。

『星の巨人と暁の女神の間に、いくつかの星と風と星が生まれた』

|||||||

ジエミオスがドロップゾーンに置かれ、ライトにアストライオスが置かれた。

蒼い巨人と暁色の女神の間に、風を纏つた星神アストライオスがいる。

必殺モンスターと呼ばれる、今の世間では認知されていない存在。レジエンドワールドの深層にいたので、認知されていないのも納得できる。

かくいう僕とソフィアも、未だアストライオスを含め数体しか発見できていない。

「アストライオスでアタック」

これでライフは6。

【黄道の輝き】があまりにも痛い。

「ターンエンド」

★ソフィア 手札1枚／ゲージ1枚／ライフ4／センター：なし／
レフト：謎多き占い師 ソフィア／ライト：アストライオス 風と星

の生誕祭／設置：大魔法 凍てつく星辰。黄道の輝き

「ドロー、チャージアンドドロー。レフトにドラムバンカー・ドラゴンをコール」

『何？待てマスター、その必要は——』

ヴィーの悲鳴が聞こえたような気がするが、無視してドロップゾーンに送る。

ちなみに凍てつく星辰の効果でドラムの2回攻撃は無効化されているので、はつきり言つてヴィーより攻撃力で劣るドラムをコールする意味は皆無だ。

『ならばなぜ我をドロップゾーンに送った？』

「コールしておかないとこのファイトの意味がないだろう？」
せめてコールはしどう、的なノリだ。

「ドラムでアタック！」

よし、これでソフィアのライフは2。

これでグランバスの攻撃が決まれば……！

「グランバスでアタック！」

「キャスト、グレムリンの嘲笑」

連携攻撃ではなかつた攻撃を防がれ、凍てつく星辰のせいでグランバスはもう攻撃出来ない。

……まあ、正直読めていた。

「ターンエンドだ」

この後、【アストライオス】の攻撃で敗北した。

第3話 ようこそ妖精溢れるレジエンドワールドへ

「よつ、と」

一瞬の浮遊感の後、景色が一瞬にして様変わりした。

先ほどまではマンションの一室にいたはずなのに、目の前に広がるのは異世界、レジエンドワールドだ。

幻想的……と一言で表すのは簡単だが、目の前に広がる景色を完全に言語化出来る存在はいるのだろうか。

上空にはいくつもの空島があり、そこから青や緑、そんな青々しい色をした滝が凄まじい勢いで下に落ちていき虹を作り出している。

さらにその雄大な空には、『ワイダーサカー』属性の【大海魔 ケートス】が文字通り泳いでいた。

100メートルを超える巨体がどうやつて空を泳いでいるのか、その原理は未だ解明されていない。

鯨にいくつかの触手が生えているような見た目で、レジエンドワールドでは神獣として崇められている地域もある。

そして、今僕が立っているのは周りよりも20メートルほど高い崖なので地面だつて一望することが可能だ。

何メートルも伸びる巨大な木に囲まれたエリア。

あそここの更に奥に行けば、レジエンドワールドとマジックワールドの境目に存在する樹、世界樹が見えるだろう。

さらに木に囲まれたエリアの中心に存在する、巨大すぎる湖。

ここからでも、湖が光っているように見える。

その光の正体は『妖精』と呼ばれる存在であり、基本的にあの湖を拠点としている『妖精』が多い。

これだけでも十分すぎるのだが、まだまだある。

はあ、とため息を吐きながら後ろを振り向くと、ヴィーの創り出したゲートが青く光り、

「あつ……」

「なつ!」

何者かが落下してきた。

ヴィーはレジエンドワールドにゲートを創った回数が少なく、位置情報を完全に掴めていないので高度1メートルほど高くゲートを創つてしまつたのだ。

よつて何者——ソフィアは哀れにも尻餅をついて落下した。

……僕の腹の上で。

「もつ、申し訳ございません悠斗様！如何なる罰も甘んじて——」「いや重い重い。僕もソフィアも怪我してないんだから何の問題もないだろ？」

「…………ダ一…………」

立ち上がつたソフィアは罪悪感に苛まれた、そんな苦々しい表情で了承した。

なんとなく、ソフィアの気持ちがわかる。

何か悪いことをしたのに、誤魔化されれば罪悪感ともいえる感情はたとすれば良い気分にはならないだろう。

「いや、やつぱり問題がある」

「そ、それは」

「今度、一緒にソフィアのバディを探しに行くぞ。これが罰だ」

そう罰を下すと、ソフィアはポカンとした顔となつた。

そんなレアな表情を脳内フィルムに保存していると、次の瞬間、ソフィアは嬉しそうにわずかに口角を上げ、「ダ一」

再び了承した。

うん、これで良かつた……と思う。

元々無口なソフィアの気持ちを理解するのは難しく、どうすればいいのかわからない、という場合も少なくない。

と、ソフィアに気を取られていて後ろの光景を忘れていた。

僕とソフィアが立つてゐる崖は、元々戦争の激しい場所であつたらしい。

そんな場所のもちろん、生きモンスター達の遺産と呼ぶべきも

のがこれでもかとある。

主に剣や槍、ハンマーなどの武器が地面に突き刺さっているのだ。

これは『英雄』と呼ばれる存在が使っていた武器で、日本の神話に登場するような武器もチラホラと見受けられる。

これらの武器をカード化すれば強力なものになりそうだが、その殆どが既に朽ちておりそれは出来そうにない。

まあ、『英雄』属性のカードが主軸ではないソフィアと、そもそも武器を使えない僕ではカード化出来たところで宝の持ち腐れとなりそうだ。

『マスターよ。そろそろ行かぬのか?』

と、既にゲートを消しているヴィーに急かされその場を出発する。ディザスター・フォースを発動し、僕とソフィアの髪が伸びて闇のオーラを纏う。

よし、これで準備は良いな。

崖から垂直落下して森に入ろうと思つたが、そこで気付く。

「……なあソフィア、その服で大丈夫なのか?」

ソフィアの服装は昼と変わらず、水色のワンピースに青い上着、袖にフリフリが付いたものだ。

ワンピースは膝まで伸びているが、それでも落下したらどうなるかなど自明だろう。

というか、ソフィアがレジエンドワールドに来て落下した時に気付くべきだった。

「ダ一。下に短パンを履いていますので」

「そうか。……うん、それなら問題ない」

よくよく見れば、ワンピースの下にわずかに黒い生地が見える。

良かつた、ちゃんと対策されてたか。

……ヤバイ、なんとなく気まずい。

「じゃ、じゃあ行くか」

「ダ一」

ソフィアと手を繋ぎ、崖から身を投げ出す。

側から見ると自殺にしか見えないが、ディザスター・フォースを使用

しているので問題なく着地できる。

ちなみにソフィアと手を繋いでいる理由だが、落下中に『何か』が起きてはぐれないようにするためだ。

ソフィアの手は予想以上に柔らかくて小さく、実に役得である。

そして問題なく着地し、全身にわずかに衝撃が走る。

そんな僕たちに怯えたのか、【森の王 ズラトロク】が数匹逃げ出した。

「つ、 悠斗様！」

そして次の瞬間、ソフィアが僕たちを覆うようにディザスター・フォースの膜を張ると、膜に色とりどりの光弾が数発着弾した。だが膜にはヒビ一つ無く、ソフィアのディザスター・フォースの出力、そして練度が高いことを伺わせる。

で、光弾を打ってきた犯人だが、

「あつ、 悠斗！」

「悠斗だ！」

「久しいな、 悠斗」

「ほんとだー、 やつたあー」

「ねえねえお土産はー？ お腹空いたー」

『妖精』属性を持つモンスターである。

ピンクの髪を2つに束ね、透き通るような一対の羽と薄いワンピースが特徴の【風の精 シルフ】や、薄黄緑の羽と金髪、さらに紫を基調とした貴族が着るような服に身を包んだ【妖精王 オベロン】、緑のローブで顔を隠した2人の小人、【妖精界の靴職人 レプラコーン】、シルフの髪が緑になり、伸びた姿の【大地の精 ノーム】。

『妖精』は警戒心が強く、滅多に人前には出ないのでここまで『妖精』が揃うのは珍しいと聞く。

「お前たち、 何故悠斗様を攻撃した」

視線を横に向けると、あからさまに不機嫌な顔をしたソフィアが『妖精』たちに問い合わせている。

ここまで怒ることはないと思うが、それほど思つてくれているとい

うのは嬉しい。

しかし、確かに疑問だな。

『妖精』は森を荒らす存在以外には基本的に温厚な性格だ。

間違つても、挨拶代わりに光弾を撃つとは思えない。

「最近ねー、変な奴らがいるのー」

と、シルフが代表して答えてくれた。

「変なやつ？ なんだそれ。……ていうか、言っちゃなんだがモンスターは大概変なやつだぞ」

「ええー！？ それって私もー！？」

「いや、シルフは変じやないな。普通の『妖精』だ」

「わーい！ 悠斗に褒められたー！」

別に褒めてはいない、という言葉を呑み込む。

『おい、我はどうなのだ？ 変なモンスターか？』

『むしろお前が変なモンスター筆頭だよ』

『……そんなすぐ肯定することはなかろう。スタードラゴンワールドでは私は普通な方なのだぞ』

ヤバイ、スタードラゴンワールドに対する興味がかなり下がった。ヴィーより変なモンスターが蔓延る世界か……。

『悠斗様の質問に答える。変なモンスターというのはなんだ』

「うわーん、そふいあが虐めるよおー」

「いくら悠斗が好きだからってねー」

「「ねー」

「う、うるさい！ 私は悠斗様が好きなのでは無く、尊敬しているだけだ！」

と、ソフィアは頬を染めながら、珍しく大声で断言した。

……僕のことが好きじやないのか。

いや、別に残念じやない。

この想いが片思いなのが残念だとか、そんなことは一切思つてい。

しかし、ソフィアでもこんなに『妖精』に翻弄させられるんだなー。

「ふむ、ここは私が話を進めよう」

「あー、ずるいよおべろん様ー！」

「お前たちでは話が長くなるだけだろう」

と、オベロンが変なモンスターについての情報を教えてくれた。

「まず、黒い角が生えている」

「角……デンジャーワールドのモンスターみたいな？」

「ああ、その認識で間違つていない。次に、そのモンスターの角は常に放電している」

「放電……そういうモンスターの可能性は？」

「ない、と断言しよう。少なくとも私はあのように奇怪なモンスターは見たことがない」

数百年生きている【妖精王】が言うのだ。

間違つてないのだろう。

「他には？」

「理性がない。すまない、私が知る限りこのぐらいだ」

「なるほど、な……」

放電する黒い角が生えていて、理性のない複数のモンスター。
これだけじゃ、候補が絞れない。

やはり実物を見ない限りはなんとも言えないな。

「フツフツフ。お主、『百鬼』の情報を集めとるようじやの？」

「誰だ？」

どこからか小さい少女の声が聞こえ、その声の発信源である大樹に視線を寄せる。

僕の記憶の中には、少なくともこんな声と口調のモンスターはいない。

そんな考察をしていると、大樹の枝から1人の存在がジャンプしてオベロンの横に並んだ。

識らないモンスター、黒い髪に灰色のメッシュと癖毛、白いシャツに赤いスカートとサスペンダー、さはに赤いマントに身を包んだその少女は、

「この我が教えてやつても良いぞ？ レジエンドワールド1の大妖怪、

トイレの華子さんがの！」

僕の識る中でもトップクラスに変わった名前を、大声で叫んだ。

第4話　どうしてこうなつた？デュアルファイト開始！

「この我が教えてやつても良いぞ？レジエンドワールド1の大妖怪、トイレの華子さんがの！」

なんなんだこのモンスターは。

トイレの華子さん、そんなふざけた名前のモンスターを目の当たりにして、僕はそんな呆れた感情を漏らした。

しかしそれは仕方ないだろう。

「む？お主、そんな目で我を見るでない。照れるではないか」

「……ああ」

どうやら残念属性も付いているらしく、またも落胆する。マジか、いや、マジかあ……。

取り敢えず華子さんから視線を逸らし、皆の反応を確認する。

オベロン含める《妖精》たちはどうやら華子さんの存在を知つているらしく、驚いた様子はない。

しかしヴィーは奇異な視線で、ソフィアは僅かに嫌悪を含めた目で華子さんを見ている。

「なあオベロン、このモンスターは一体……」

「この方は華子さんと言う」

「ふざけてるのか？」

「いや、本当にそういう名称なのだ。名前の変更は不可能。悠斗も知つてているだろう？」

「いやまあ、知つてるけどさ……」

「これは流石に……と思つてしまふ。

「お主、そんなに信じられぬか？」

「理解はしてる。けど納得は出来ない。そんな感じだな」

そう伝えると、華子さんは顎に手を当てて俯いてしまった。

何かしてしまつたか、と異様に静かな時間の中で考えていると、突然華子さんは人差し指を立てた。

「そうじゃ！ そんなに信じられぬなら我とファイトをすれば良い！ のうオベロン、お主もそう思わんか？」

「え、ああはい、私もそう思います」

どうしてこんな事に……と思うが、別にファイトする事自体に反対はない。

僕のデツキの最終目標は兄さんを倒すだが、それだけではない。あらゆる相手に勝つ、それが全ファイターの考える理想だ。

僕もその例に漏れず、どんな相手にも……相性最悪なソフティアにだつて勝ちたい。

華子さんのデツキも相性最悪かもしだれないが、その時はその時だ。「悠斗とやら。お主はどうじゃ？ レジエンドワールドに来たのじやから、実力もそれなりにあろう？」

「……ああ、あるぞ。……あなたに勝てる程度にはな」

「――ほう」

次の瞬間、華子さんの気配が変わったのがわかつた。

無意識のうちにデイザスター・フォースの出力を強め、嫌な汗が流れる。

……これは、やつてしまつたかもしれない。

「言うではないか、わっぽ童」

僕と華子さんの睨み合いが始まる直前、雰囲気に似合わぬ氣の抜けた声が響いた。

「ねーねー」

そんな声を出したのは、シルフ。

掌に乗せれる程度の大きさで華子さんの周囲を飛び回り、提案をした。

「なんじゃ？」

「私も悠斗とふあいとしたく！」

「なぬ？ ジヤ、ジヤが、これから我がこの童と」

「しつたくいく！」

「ぬ、ぬう……」

一瞬前まで殺意に似た圧を飛ばしていた人物とは思えないほど、華

子さんは困惑していた。

こんなに表情がコロコロ変わるというのは恐ろしいと思う反面、長年生きている存在はこんなものなのだろう、という納得がある。しかし、それにしても幼すぎる気もするが……。

「ど、どうすればよいのじゃ？ オベロンよ」

「ふむ……そうですね。ではデュアルファイトで決着をつける、というのはどうでしょう？」

デュアルファイト。

一対一の普通のファイトとは違い、二対二のファイトでプレイヤー同士の連携が勝つための鍵となる、割とマイナーなファイトだ。

そして華子さんとシルフがパートナーということは、

「僕とソフィア、つてことか」

「そのようです」

マズいな。

【大魔法　凍てつく星辰】は、味方である僕の場まで凍らせてしまう。ソフィアの冬のダイヤは、ある意味最もデュアルファイトに向かないデツキと言える。

だからどうしようかと視線を送ると、

「問題ありません、悠斗様。もう一つデツキを持つていますので」

「おお、ナイスだソフィア。よし、こっちも問題ないぞ」

「わかりました。変に森を荒らされても困るので、この崖の上に移動しましょうか」

オベロンの提案で、ファイト場所は先ほど飛び降りた崖の上となつた。

……折角下りたのに、また登るのか……。



「では始めようかの。皆の衆、楽しい楽しい悪戯の時間じゃ！ ルミナイズ、学校の怪談！」

「さあみんな！ 私と一緒に遊ぼうよー！ ルミナイズ、妖精郷！」

「来たれドラゴン、舞えよ竜！ ダークルミナイズ、ドラゴンズヴァーザイン！」

「夜空よ動け、歴史よ戻れ。ダークルミナイズ、再生世界」
上から華子さん、シルフ、僕、ソフィアだ。

しかし、学校の怪談と再生世界か……全く想像がつかないな。

「「「オープン・ザ・フラツグ！」」

「「レジエンドワールド」「」

「ドラゴン・ツヴァイ」

順番は僕、華子さん、ソフィア、シルフという流れだ。

「チャージアンドドロー」

さて、初手から超越竜王 エーヴィヒカイトが手札にあるのは僥倖だが、まだ出さない。

ここで出したところで破壊される危険性が高いし、チャージカードがないので能力は使えないからな。

「センターに竜騎士 エドワードをコール！」

＝＝＝＝＝＝＝

竜騎士 エドワード

属性：竜騎士

サイズ：3

打撃力：2／攻撃力：70000／防御力：5000

コールコスト：ゲージ2を払う。

■このカードが登場した時、相手の場のモンスター1枚を破壊する。

■このカードが攻撃した時、君の手札1枚をゲージに置いて良い。
置いたらカード1枚を引く。

『控えよ。私は龍騎太子なるぞ』

＝＝＝＝＝＝＝

僕のセンターゾーンに魔法陣が現れ、高速で回転しながら一体のモンスターを召喚する。

蒼く輝く、白銀の竜に跨つた一人の竜騎士。

エドワード本人の素顔も、白い画面に隠されているため窺い知れない。

『そのまま華子さんにアタック！』

「受けよう！ぐつ……！」

効果でドローしたカードは超武装騎竜 ガルガニックフェザードラゴンか……。

次のターンにチャージカードが来ないと割とキツくなるぞ。

★悠斗：ライフ20／手札3枚／ゲージ2枚／センター：竜騎士エドワード

「我のターン！ドロー、チャージアンドドロー！レフトに一旦木綿ペーパーをコール」

＝＝＝＝＝＝＝

一旦木綿 ペーパー

ワールド：レジエンドワールド

サイズ：2

属性：【妖精】「トイレ」「妖怪】

打撃力2／攻撃力4000／防御力5000

■このカードが登場した時、君のデッキから『トイレ』一枚を手札に加え、デッキをシャッフルする。

『華子様、どちらにおられるのですか？』

＝＝＝＝＝＝

「私はデッキから新生！トイレの華子さんを手札に加える」

おおう……マジでそういう名称のカードがあつたのか……。

ぱつと見弱そしだが、何か強力な能力があるかもしれないから油断は出来ない。

「さらに校舎3階—手前から3番目のトイレ—を装備！」

＝＝＝＝＝＝

校舎3階—手前から3番目のトイレ—

アイテム

ワールド：レジエンドワールド

属性：【妖精】「トイレ」「妖怪】

打撃力2／攻撃力0／防御力8000

装備コスト：ゲージ2を払い、君のデッキの上から3枚をこのカード

ドのソウルに入れる。

■君が攻撃された時、このカードのソウル一枚をドロップゾーンに置く。

対抗：このカードのソウルが0枚なら、場のこのカードをドロップゾーンに置いて良い。置いたら、君の手札かドロップゾーンの『トライレ』のモンスター一枚までをコールコストを払つてコールする。

能力：ソウルガード

『3階の3番目のトイレには、ヤバイ妖怪が住んでるんだってさ……』
＝＝＝＝＝＝＝

華子さんのファイトエリアに突然現れた洋式便所に、彼女は座つた。

つて、

「何だよそのカード!! 流石にありえないだろ!?」

洋式便所。

そんなふざけたカードに、僕は心底抗議した。

「う、うるさい！ 我だつて好きでトイレなんて使つとるわけではない！ 仕方ないのじゃ！」

「何が仕方なくてトイレなんて使つてんだよ！」

「トーヤ様、落ち着いてください。これもあるのモンスターの戦略です」

「ソフィア!? 何を言うか！」

落ち着け僕、そうだ、これも華子さんの戦略だ。

「何やらものすごい風評被害を受けてる気がするが……まあよい、一反木綿！ ソフィアにアタックじゃ！」

「ライフで受ける」

これでソフィアのライフは8か……。

クソツ、僕は防御力カードを使えない上にライフが高いから、集中的にソフィアが狙われてる……！

だからデュアルファイトは好きじゃないんだよ……！

「ターンエンドじゃ」

★華子さん：ライフ8／手札5枚／チャージ1枚／ライト：一反木

綿 ペーパー

「チャージアンドドロー。設置魔法、星脈の輝き」

＝＝＝＝＝

星脈の輝き

コスト：ゲージ1を払い、君の手札の星1枚を捨てる。

■君のターン開始時、君の手札の星1枚をこのカードのソウルに入れる。

入れたらカード1枚を引き、君のデッキの上から1枚をゲージに置き、君のライフを+2する。

■星の終わり：このカードのソウルが3枚以上あるなら、このカードをドロップゾーンに送る。

能力：設置魔法

『どんなものにも終わりは来る。それは例え、星でもだ』

＝＝＝＝＝

瞬間、ソフィアの背後に変化が起こった。
星が生まれたのだ。

綺麗に光り輝く、巨大な星が。

「さうにライトにコール、謎多き占い師 ソフィア」

何度も言うようだが、あの占い師はダンジョンワールドで見つけたモンスターだ。

決して、ファイターであるソフィアはデッキからなんらかの設置魔法を手ない。

で、占い師の能力でソフィアはデッキからなんらかの設置魔法を手札に加えた。

そして占い師が華子さんを攻撃し、ソフィアのターンが終了する。

★ソフィア：ライフ8／手札3／チャージ1／ライト：謎多き占い師 ソフィア／設置：星脈の輝き

「はいはーい！次は私のたーん！どろーー！ちやーじあんどどろーー！」

シルフのデッキは《妖精》主軸のデッキだ。

……華子さんのデッキも《トヨレ》／《妖精》主軸だろうが、僕はあんなのを《妖精》とは認めたくない。

「らいとに天翔ける精霊 りんどぶるむをこーる！」

|||||||

天翔ける精霊 リンドブルム

サイズ：1

ワールド：レジエンドワールド

属性：ワイダーサカー／妖精

打撃力1／攻撃力3000／防御力1000

■このカードが登場した時、君の手札の《妖精》1枚を捨てて良い。捨てたら、カード2枚を引き、君のライフを+1！

この能力は1ターンに一回だけ使える。

『かつて精霊は、神の遣いとも言われていた』

|||||||

リンドブルムは金色を基調とした体で、レジエンドワールドでは生息範囲の広いモンスターだ。

「りんどぶるむでそふいあにあたつく！」

「ライフで受ける」

これでソフィアのライフは残り7……か。

次のターンで一人は……一人？か一匹を倒すぐらいじゃないと、多分ソフィアはやられてしまう。

「たーんえんど！」

★シルフ：ライフ11／手札6／ゲージ3／ライト：天翔ける精霊
リンドブルム

さて、次は僕のターンだ。

第5話 恐れよ！これが学校の怪談なり！

次は僕のターン。

「ドロー、チャージアンドドロー。レフトに白晶竜 カリニヤンをコール！効果で手札1枚をドロップゾーンに送る」

＝＝＝＝＝＝＝

白晶竜 カリニヤン

ワールド：スタードラゴンワールド

サイズ：0

属性：プリズムドラゴン

打：1／攻：20000／防：3000

■このカードが登場した時、君の手札2枚までを捨てて良い。

捨てたら、捨てた枚数×2だけ君のデッキの上からゲージに置く。

『吾輩はプリズムドラゴンである！名はカリニヤン』

＝＝＝＝＝＝＝

カリニヤンはドラゴンツヴァイでは貴重なチャージカードだ。

しかし手札をゲージに送る性質上、使い勝手は悪いと言えるだろう。

だが、僕のデッキはエーヴィヒカイトさえいれば回るのでそれはあまり問題とはならない。

そして、カリニヤンのおかげで僕のゲージは5枚。

「竜騎士 エドワードをドロップゾーンに送り、バディコール！超越

竜王 エーヴィヒカイト！」

『クハハッ、今回は存分に力を奮つてやろうぞ！』

「ああ、頼むよ。ライフ2を払い、エーヴィヒカイトの能力発動！」

瞬間、僕の飛翔型のダークコアデッキケースから3枚のカードが放たれた。

その中から1枚を選び、残りはデッキの一一番下に戻す。

「レフトにサイズ0でコール！《超流星竜^{メテオウオーム}》ゼニスレイター！」

僕のデッキの上から2枚、《幸の竜 フォーボルカ》と《海王騎竜グランバスVIII世》をソウルに入れ、レフトエリアに一体のモンスター

が召喚される。

スタードラゴンワールド特有の、青々しく派手なネオドラゴン。エーヴィヒカイトよりも武装がゴツく、白を基調とした人型の本体に様々なパーツがくつ付いている、という印象だ。

ゼニスレイターを見れば、確かにヴィーの言つた『スタードラゴンワールドでは我は普通の方なのだぞ』という言葉も納得できる。

＝＝＝＝＝

『超流星竜 ゼニスレイター』

サイズ：3

ワールド：スタードラゴンワールド

属性：ネオドラゴン

打：2／攻：80000／防：4000

コールコスト：ゲージ2を払い、君のデッキの上から2枚をこのカードのソウルを入れる。

■君のドロップゾーンにモンスターが10枚以上あるなら、このカードは貫通を得る。

■このカードが攻撃した時、このカードのソウルにモンスターが2枚以上あるなら、そのターン中、このカードは2回攻撃を得る。

能力：ソウルガード

『これが一体のネオドラゴンの武装だと、誰が想像できるだろう』

＝＝＝＝＝

能力を見ればわかるだろうが、このゼニスレイター、ドラゴン・ツヴァイとの相性が抜群だ。

ドラゴン・ツヴァイにはモンスターのカードしかないので確定でソウルはモンスター0ンリーとなり、そしてヴィーの能力の関係上、ゲージを大きく消費する機会が多いので貫通も得やすい。

ここまでシナジーするか、と割と驚いた記憶がある。

まあ、ドラグアームズ竜装機のあるスタードラゴンワールドの方がシナジーするのだろうが、こればっかりは仕方ない。

『ヴィー』、華子さんにアタック！

「うむ、受けよう！」

これで華子さんのライフは4。

『ゼニスレイター』の攻撃が全て刺されば倒せるが……あの表情を見る限り、そんな簡単には倒させてくれないだろうな。だが、攻撃しないという手はない。

『ゼニスレイター』！華子さんにアタック！

「これは受けるわけにはいかんのう！キヤスト、『開かずの間』！ククツ、これでトイレのソウルは0枚じゃ！」

＝＝＝＝＝＝

『開かずの間』

ワールド：レジエンドワールド

属性：「妖精」「トイレ」「防御」

■相手のターンの攻撃中に使える。

■その攻撃を無効化し、君の場の「トイレ」のソウル1枚をドロップゾーンに置く。

『謎の力で閉じられた、外からの刺激では決して開かない場所。それが、開かずの間』

＝＝＝＝＝＝

華子さんとトイレを覆うように現れた壁に、『ゼニスレイター』の攻撃が遮られる。

しかし、ソウルをドロップゾーンに、か……。

そうまでして『トイレ』のソウルを減らしたかつたのなら、やはり何かあると見て良いだろう。

「ソウルが2枚ともモンスターなので2回攻撃！もう一度アタックだ！」

「ククツ、クカカツ！引つ掛かりおったな童あ！対抗、『トイレ』の能力でドロップゾーンよりバディコールじゃ！『トイレの華子さん』！」なんと、華子さんとトイレを隠していた壁が吹き飛び、華子さんが現れた。

……プレイヤーではなく、モンスターとして。

＝＝＝＝＝＝

『トイレの華子さん』

サイズ：3

ワールド：レジエンドワールド

属性：「妖精」「トイレ」「妖怪」

打：2／攻：90000／防：7000

■このカードが登場した時、相手の場のモンスター全てを破壊し、
破壊した枚数分、君のライフを回復する！

能力：3回攻撃

|||||||

「我的能力发动！お主らの場のモンスター、全て破壊じゃ！」

「それは私のエリアもか」

「もちろん、ソフィアのエリアもまとめて破壊じゃ！」

「マジかよ……！」

僕は《ヴィー》も《ゼニスレイター》もソウルガードで耐えたが、ソ
フィアは《占い師》が破壊されてしまった。

クソツ、ソフィアが最も被害を被つてる……！

だが、

「《ゼニスレイター》の攻撃は終わってないぞ！」

そう、《ゼニスレイター》は今なお《華子さん》を攻撃している。
ソウルが消えたので次のターンから2回攻撃は出来なくなつたが、
このターン中はまだ2回攻撃が出来るのだ。

「登場しておいてあつさり退場は嫌じやな！キヤスト、《ベルセルク・
ガルド》！ 我の防御力は《ゼニスレイター》を上回り、さらに反撃じや
あ！」

|||||||

《ベルセルク・ガルド》

ワールド：レジエンドワールド

属性：「ルーン」「強化」「アースガルド」

■“対抗”・バトルしているモンスター1枚を選び、このバトル中、
防御力+4000し、さらに反撃を与える。

『反撃の時だ。存分に怒り狂え』

|||||||

『ゼニスレイター』が破壊されるが、ソウルガードで耐えてファイナルフェイズ。

華子さんのライフは10。

残念ながら、このターン中に華子さんを倒すのは不可能そうだ。
だが、爪痕を残すことは出来る。

「必殺コール！ 『複製黒竜^{フェイク・ブラック} アビゲール』をセンターリに！」

『ヴィー』と『ゼニスレイター』を破壊し、センターに必殺モンスターを召喚する。

そのモンスターの名は、アビゲール。

かつて兄さんの研究室で培養されていたモンスターの遺伝子情報を盗み、独自に創り出したオリジナルモンスター。

兄さんが創っていたモンスターの模倣。

だからこそ、このモンスターは複製黒竜なのだ。

『複製黒竜 アビゲール』

サイズ：3

ワールド：ダークネスドラゴンワールド

属性：【黒竜】

打：1／攻：90000／防：4000

コールコスト：ゲージ1を払い、君の場のモンスター2枚を破壊する。

■このカードの攻撃で相手のモンスターを破壊した時、破壊したモンスターのサイズ+1だけ相手のデッキの上からドロップゾーンに送り、相手にダメージ！

『かの悪神竜の遺伝子は、とある2人の兄弟とは縁があるらしい』

『アビゲール』！ 『華子さん』にアタックだ！

『ベルセルク・ガルド』の効果は切れているので、今の『華子さん』の防御力は7000。

なので、『アビゲール』はなんなく『華子さん』を破壊した。

「能力発動！ 『華子さん』のサイズ+1、つまり4！ デッキの上からド

ロップゾーンに送つてさらにダメージだ……！」

「ぐぬうつ！ いやはや、まさかこんなにあつさりと倒されるとは！ お主、強いのう！」

「ハハ、ソフィアの場が蹂躪されてなければ、アンタも倒せていたよ！」

「抜かせ！ 『占い師』の助力もあるじゃろう」

華子さんと睨み合いながら、僕はひとまずターンエンドを宣言する。

……さて、ここからどうするか。

★悠斗／ライフ：18／手札：0／ゲージ：0／ライト：『複製黒竜アビゲール』

「次は我がターンじゃな。ドロー、チャージアンドドロー！」

華子さんという、おそらく最大の障害は排除した。

後はどうやって攻めてくるかだが……。

「クククツ、『トイレ』が我の主軸だと、いつから錯覚しておつた？」「なつ？まさか……！」

「そう！ そのまさかじや！ センターに『骨格標本 スカル・ダンディー』、ライトに『人体模型 ミギー・ナイスガイ』、レフトに『貧血鬼 クラット・ドラキュラ』をコールじや！ そして、その三体をソウルに入れてセンターにコール！ 『大妖怪 ガシヤドクロ』！」

瞬間、ファイティングステージに変化が起こった。

もつと言ふならば、華子さんの全エリアを埋め尽くすほどの巨大な何かが、地面から生えてきた。

そのモンスターを構成するのは、骨。

ただし骨盤より下は存在せず、全長は5メートルほど。

そんな巨大なモンスターが、華子さんのセンターに現れた。

＝＝＝＝＝

『大妖怪 ガシヤドクロ』

サイズ：3

ワールド：レジエンドワールド

属性：『妖精』『妖怪』

打：1／攻：70000／防：4000

コールコスト：君の場のモンスター3体をこのカードのソウルに入れ、ゲージ2を払う。

■このカードが破壊され、ソウルがドロップゾーンに送られた時、このカードのソウルからドロップゾーンに送られたサイズ1以下のモンスターをサイズ0として空いてるエリアにコールしても良い。この能力は1ターンに一回だけ使える。

■このカードがセンターにいるなら、君の場のモンスター全ては2回攻撃を得る。

■“兵どもが夢の跡”【対抗】：君の場のモンスター全てをこのカードのソウルに入れて良い。入れたら、このカードの打撃力+1！この能力は1ターンに一回だけ使える。

能力：ソウルガード

『ガシャア～』

『あれこそが大妖怪の一体、ガシャドクロだ』

「これは中々……」

強力なモンスターだな。

まさか『華子さん』以外にもこんな切り札ならぬ鬼札を持つていたとは。

「さて、ソフィアにアタックと行きたいところじやが、そもそもいかん。『アビゲール』にアタックじゃ！」

予想通り、華子さんは『アビゲール』を狙つてきた。

顔を横に向けると、ソフィアが視線で僕に訴える。

彼女が言いたいのは、『防御カードを使うか否か』。

その問いに、僕は首を振つて答えた。

何もここでソフィアが防御カードを使う必要はないし、シルフだって僕の『アビゲール』を優先的に狙うだろう。

そして『ガシャドクロ』が『アビゲール』に拳を振り下ろし、呆気なく破壊された。

「さらに『ガシャドクロ』自身の能力で2回攻撃を待つておる！ソフィ

アにアタックじゃ！」

「ライフで受ける」

ソフィアにも拳が振り落とされ、ソフィアのライフが5へと減少する。

まだ余裕はある。

だが、油断は出来ない。

華子さんのターンが終わり、ソフィアのターン。

★華子さん：ライフ：6／手札0／ゲージ0／センター：『大妖怪ガシャドクロ』

「私のターン。ドロー、チャージアンドドロー……ふふ。『星脈の輝

き』の能力発動、ゲージ+1、ライフ+2」

あ、ソフィアが僅かに口角を上げた。

それはつまり、勝つ方法を見つけたと言うこと。

僕は長年の付き合いでそれを知っている。

「華子、私は貴方に感謝している」

「なぬ？ 言葉の真意がわからぬが……」

「その感謝を行動で示そう」

ソフィアはそう言い放ち、一枚のカードを掲げた。

そして、彼女はそのカードの名を唱える。

『キヤスト、『大魔法 Re・リジエネイトワールド』』

瞬間、またも世界に変化が起こった。

第6話 決着！デュアルファイト！

瞬間、またも世界が変化した。

僕とソフィアが張ったディザスター・フォースの膜、その内側に、またも透明の膜が現れたのだ。

注意深く見ないと視認できないその膜は、間違なくソフィアが張つたものだろう。

|||||||

『大魔法 R.e. リジエネイトワールド』

コスト：君の場に、ソウルが一枚以上の『星脈の輝き』があるなら設置出来る。ゲージ3を払う。

■このファイトに参加しているファイターは、手札8枚、ライフ12、ゲージを6以上には出来ない！（手札かゲージに置かれるカードはドロップゾーンに置かれる）

■君のターン中、君のレフトとライトに「星」がいるなら、君の場の「星」とバトルしている相手のモンスターの能力全てを無効化する。

■“そして世界は再生する”：各ファイターは自分のメインフェイズ中、ドロップゾーンのカード15枚以上、手札3枚以上全てをデッキの一番下に順番に戻して良い。

戻したら、ライフを12、ゲージを5にする。

『汚れた世界を再生する。その権利はどの世界にもあり、何度でも行使が可能だ。しかしまあ、どの世界も随分と汚れている』

|||||||

瞬間、僕のライフが20から12にまで削られた。

……思うのだが、これ、ここで使う意味はあつたのだろうか。

確かに花子さんのデッキコンセプトが謎な以上行動を制限させる事に意味はあるだろうが、僕への被害の方が大きいような気がする。「キヤスト、『レジェンドエナジー』。そしてレフトに『双子の星守りジエミオス』をコール。さらに行きなさい、センターに『^{てんかつ}天蠍の星守り エスコルピア』をコール』

|||||||

『天蠍の星守り エスコルピア』

ワールド：レジエンドワールド

サイズ：3

属性：「星」

打3／攻：7000／防：6000

コールコスト：ゲージ2を払う。

■このカードがセンターにいるなら、君のレフトとライトの元々のサイズが2以下の「星」のモンスターのサイズは0になる。
『その一撃が、天運を分ける』

＝＝＝＝＝＝＝

白く輝く、サソリの下半身。

その下半身に金の装飾が散りばめられており、胴体より上は人間だ。

焼かれたような褐色肌、金の兜、剣と三叉の槍を片手ずつに構えている。

シンプルに強いという、ソフィアにしては珍しいモンスターだ。

「悠斗様」

「ん？どうし……」

ソフィアの方を向くと、彼女は僕に向けて頭を下げていた。
その奇異な行動に驚き、そして頭を上げるよう促す。

「申し訳ありません。私の都合で、悠斗様のライフを削つてしまいま
した」

「ああ、その事か。いや、別に問題ないぞ。むしろ良くやつた」

僕とソフィアがデュアルファイトをやつたのは、これが初めてでは
ない。

そして、今までソフィアは僕に損害が及ぶような行動を取ったこと
がないのでわざわざ頭を下げたのだろう。

「ソフィア、僕が聞きたいのは一つだ……これで華子さんに勝てるか
？」

僕の問いに、

「ダーチ、もちろんです」

ソフィアは頭を上げ、強い自信を持つてそう答えた。

そして、華子の方に振り向く。

「《ジエミオス》で《がしゃどくろ》にアタック」

「ぬう、大人しく破壊されよう」

本来なら、《がしゃどくろ》は4回攻撃しないと完全破壊には至らない。

しかし、《リジエネイトワールド》のおかげで一回の破壊で済む。

『ククッ、敵の時はあれほどの脅威が、味方となれば、これほど心強い。

良い配下を待つたな、マスター』

「そうだな。てか、配下じゃないぞ」

『フン、マスターの相棒は我である。いくらソフィアがマスターの役に立つていようと、それだけは譲れぬ』

強情なバディの存在と会話をしている内にも、戦況は動いていく。

『《ジエミオス》は2回攻撃を持っている。華子さんにアタック』

「受けよう。フフッ、我的手札は0枚。連携攻撃をして、さっさと止めを刺しても良いのじやぞ？」

確かに、華子さんの今のライフは4。

まして手札がない状態では防御カードも使えないのに、普通なら連携攻撃しても問題ないだろう。

そう、普通なら。

「華子、確かに貴方の手札は0枚。だけど、シルフの手札はそうじやない。そんな罠に引っかかるわけないでしょ？」

「確かにそうじやな。その事じやが……シルフよ、我に防御カードは使わなくて良いぞ。手札の無駄じや」

「なつ……!?」

「ええつ!? どうして〜!？」

華子さんの発言に、この場にいる全員が驚いた。

まさか、自らやられても良い、なんて言うとは。

僕とソフィアよりも長い時間を生きているからか、中々肝が据わっている。

「例え今我を守つたとしても、悠斗にやられるであろう。ならば、ここ

で我は退場じや」

「……わかつた。私、華子さんの分まで頑張る！」

「うむ、その調子じや。というわけで、さつさと我に止めを刺せ」

「……『エスコルピア』と『占い師』で連携攻撃」

シルフは防御カードを使わず、そして華子さんは宣言通り退場した。

これで2対1。

数字だけ見れば有利だけど……手札ゲージ共に0枚の僕じや、このターンは役に立たない可能性が高いな。

★ソフィア ライフ：7／手札：0／ゲージ：1／センター：『天蠍の星守り エスコルピア』／レフト：『双子の星守り ジェミニオス』／ライト：『謎多き占い師 ソフィア』／設置：『大魔法 Re・リジエネイトワールド』

「私のたーんーどろー、ちやーじあんどどろーーせんたーに『風の精しるふ』をばでいこーる！」

『シルフ』はファイター自身なので、シルフがセンターエリアに降りた。

華子さんでも思つたけど、こういうの見ると不思議な気持ちになるんだよな……。

＝＝＝＝＝

『風の精 シルフ』

ワールド：レジエンドワールド

サイズ：1

属性：『ワイダーサカ』「妖精」

打1／攻：4000／防：1000

コールコスト：ゲージ1を払う。

■このカードが登場した時、手札一枚を捨てて良い。

捨てたら、君のデッキからアイテムか必殺技一枚を手札に加える。

この能力は1ターンに一回だけ使える。

『あたし、こう見えても面白いだから〜』

＝＝＝＝＝

「でつきから手札に加えて、装備！『雷霆 けらうのす』！」

アイテムか。

僕もソフィアもアイテムを使わないから、見たのは牙王以来だ。にしてもあの武器……崖の上、つまりこら辺にある武器と同等の力を感じる。

|||||||

『雷霆 ケラウノス』

ワールド・レジエンドワールド

属性：【武器】【英雄】

装備コスト：ゲージ1を払い、手札一枚を捨てる。

打：0／攻：2000

■このカードが攻撃した時、君の場のモンスター1枚の打撃力+1！

■このカードは君のセンターにモンスターがいても攻撃できる。

能力：2回攻撃

『かつての英雄が使っていた武器の中でも、保存状態が良かつたものの一つ』

|||||||

『ケラウノス』はぱつと見、雷を纏った刺突用の槍だ。

しかし、シルフは手の平サイズの大きさなので思いつきり地面にぶつ刺さってる。

「れふとに『風と戯れる者 しるふ』をこーる！」

『風の精 シルフ』とは違い、藍色の洋服を着ていて短い金髪になつている。

同じ名称のモンスターとは思えないほど、容姿が異なつていた。

|||||||

『風と戯れる者 シルフ』

ワールド・レジエンドワールド

サイズ：1

属性：【妖精】【ワイダーサマー】

打：0 (+2)／攻：1000／防：1000

コールコスト：ゲージ2を払う。

■君のドロップゾーンの《妖精》一種類につき、このカードの打撃力+1！

■このカードが手札から捨てられた時、君の場の「精靈」全てを攻撃力+4000、さらに貫通を与える！

『シルフとはそれ単体の名ではなく、風の精靈という意味を持つ種族の総称である』

|||||||

今のシルフは打撃力2。

サイズ1だと平均的だが、《ケラウノス》の能力によつて4にまで跳ね上がる可能性がある。

どうやらシルフのデッキコンセプトは、打撃力重視らしい。

これはあくまで僕の主観だが、「妖精」にしてはかなり珍しいな。「さるに 《春風の運び手 しるふ》をらいとに！」

今度は、ワンピースに淡い茶髪の三つ編みを一本、後ろに流していれる少女が現れた。

《シルフ》の中で一番落ち着いて見えるのは、その雰囲気ゆえか。

|||||||

《春風の運び手 シルフ》

ワールド：レジエンドワールド

サイズ：1

属性：「妖精」「ワイダー・サカー」

打：1／攻：10000／防：1000

■君の手札一枚を捨てて良い。捨てたらこのターン中、君の場のモンスター全ての打撃力+1！この能力は1ターンに一回だけ使える。

『風は何よりも先に春の訪れを告げる』

|||||||

「能力はつどー！手札一枚を捨てたらあたしたちの打撃力+1！」

ドロップゾーンに置かれたカードは《妖精界の靴職人 ラプラコーン》のため、《風の訪れを告げる者》の打撃力は既に4にまで跳ね上がっている。

打撃力6になるサイズ1モンスター……乾いた笑いしか出てこない。

「そして、キャスト！『精霊の怒り』！アタックフェイズ！」

『精霊の怒り』は相手の場のセンターのモンスターを破壊する。

そのため『エスコルピア』が破壊され、ソフイアは無防備になってしまった。

「まずは『けらうのす』で2回ともあたつく！能力で『春風の運び手』のあたしの打撃力を+2！そして、『風の精』のあたしであたつく！」

「ライフで受ける」

これでソフイアのライフは4。

『春風の運び手』と『風と戯れる者』、どちらかの攻撃でも即死圏内……！

『春風の運び手』のあたしであたつく！これで止めー！」

「キヤスト、『エリネドの指輪』

瞬間、ソフィアと『シルフ』の間に青白い肌をした腕が現れた。その指には、禍々しい指輪が嵌められている。

＝＝＝＝＝＝

『エリネドの指輪』

ワールド・レジエンドワールド

属性：「防御」「回復」

■“対抗”：ゲージ1を払う。

■その攻撃を無効化し、君のライフ+1。さらに、君の手札一枚を捨てて良い。捨てたら、カード一枚を引く！

『指輪から、魔力の高まりを感じる』

＝＝＝＝＝＝

『おおつ』

その見事な防御に、僕とヴィーは揃つて感嘆の声を上げた。

ちなみに、ヴィーはドロップゾーンにいるので僕にしか聞こえない。

なんにせよ、これでソフイアのライフは5。

『風と戯れる者』の攻撃を受けても耐えられる。

「あうう……たーんえんどお！うくく……！」

ソフイアを倒しきれなかつた事がよほど悔しかつたのか、シルフはその目尻に大きな涙を浮かべ、頬を膨らませている。

その様子を見るに、ここから逆転できる方法は無くなつたのだろう。

★シルフ ライフ：12／手札：2／ゲージ：0／センタ－：『風の精 シルフ』／ライト：『春風の運び手 シルフ』／レフト：『風と戯れる者 シルフ』／装備：『雷霆 ケラウノス』

「じゃあ、僕のターンだ」

その後、デュアルファイトは僕とソフイアの勝ちで幕を閉じた。

第7話 復活!? 災厄の外道竜!

「うむ、ここじゃな」

「ここは……遺跡だよな?」

華子さんとシルフに勝った僕らは、「百鬼」と呼ばれる存在の大元について教えてもらうこととなつた。

そして華子さんに続いて来たのは、森の深部。

案内者がいなければ間違ひなく迷うであろうそこには、随分と年季のある遺跡がある。

「ここに「百鬼」の大元がいるのか?」

「ドーン伯爵の情報に間違ひがなければ、の」

「……ソフィア、ドーン伯爵って誰?」

「バディ・ポリスの幹部の一人です。悠斗様」

へえ、そんな人物がいるのか。

というか、伯爵って中世あたりの地位だつたよな?

本当にそんな名称の人物がいるとは思えないから、多分モンスターだろう。

「さて、ここまで来ておいてから聞くのもあれじやが、お主はこの先に

いる「百鬼」の大元をどうしたい?」

「強ければ僕のデツキに加える。弱ければ、殺す」

僕の目的は、兄さんに勝てるデツキの構築。

そのためにレジエンドワールドに来たのだ。

そう言い切ると、華子さんは目を見開いた後、ケタケタと笑い始めた。

お腹を抱え、童子のように。

「クカカッ!面白い!面白いのう!よもや、モンスターを殺すと断言する人間がおるとは!」

「百鬼」の情報を聞く限り、殺しても問題ないんだろ?」

「うむ、うむ、お主の御眼鏡に適わなければ殺して良いぞ」

そこで華子さんは言葉を切り、いつぞやのように僕とソフィアに冷たい視線を向け、

「じゃが、ちゃんと殺せ。でなければ、お主らもろとも我……いや、この世界が滅びるのでな」

「世界が滅びる……か」

本当にそんなモンスターが、この先にいるのだろうか。
そんな疑問を抱きながら、華子さんに続き僕とソフィアは遺跡の中に入つた。

瞬間、

「なつ!？」

全身がドロドロに溶けたような、粘土で固めたような小型の灰竜が華子さん目掛けてその爪を振り下ろした。

いくら小型といえど、その大きさは余裕で華子さんを超える。ヴィーが光砲を放つより、ソフィアが防御魔法を使うより、僕がデイザスター・フォースの膜を張るより、灰竜は早い。その鋭い爪が華子さんを引き裂く瞬間、

「舐めるでないぞ」

華子さんが目視できないほどの速度で放つた裏拳が、灰竜の顔面の顔面を捉え弾き飛ばした。

そして灰竜は壁に埋まり、絶命する。

その行動に、僕を含め誰もが言葉が出ない。

「ん? どうしたのじゃ? そんな鳩が豆鉄砲を食らつたような顔をしておつて」

「え……あ、いや……華子さんって、強いんだな」

嘘偽りない本心を言うと、当人は訳がわからないと言う風に眉をしかめ、首を傾げた。

「何を言つておるのじゃ? 強くなれば、世界を滅ぼす「百鬼」退治に赴くわけがなかろうに。あ、もしや我が弱いと思つたのか!?」

「いや、まあ、ちょっとは」

「ソフィアもか!？」

「ええ、だつて小さいもの」

「ムキイイイ! いいのじゃぞ! お主らが「百鬼」の大元をカード化する前に、我が殺してしまつてもいいのじゃぞ!？」

僕の返答だけでもキレていたのに、ソフィアが頭を撫でたせいで取り返しがつかなくなりそうだ。

取り敢えず、僕も頭を撫でて許しを乞うかな。

「ごめんな、そりやあ華子さんが弱いわけないもんな」

「お主も撫でるでない！さては反省しておらんな！」

「おつと、無意識ダツター」

「お主らそんなキャラだつ——待て」

そんなおふざけをしていると、いきなり華子さんが警戒態勢を取つた。

SD化しているヴィーも、周りに浮かせている光砲を構えている。次の瞬間、僕も気付く。

何体ものモンスターが、近付いている事に。

「……舐めておつた。まさか、奴がこんなにもモンスターを生み出しておつたとは」

「でもまあ、逆に言うと奴がそれだけ強いって事だろ」

「私が守れる事にも限度があります。お気を付けを、悠斗様」

「わかつたよ、ソフィア」

「わかつてないでしよう……」という呟きを聞き流し、バデイスキルを発動する。

バデイスキルとは、バディモンスターが与えてくれる力の総称だ。人によつてバデイスキルは異なり、僕のはヴィーと同じく2つの双砲。

それを曲がり角から現れたモンスターにぶつ放し、絶命させる。

しかし、どいつもこいつも氣味の悪いモンスターだな……。

「面倒くさいのう！こうなれば一気に本元を叩く！付いて来るのじゃ、悠斗、ソフィア！」

「わかつた！いくぞソフィア！」

「ダメ」

双砲をオートモードに切り替え、ソフィアと共に華子さんに続く。しつかし、デザスターフォースを発動する度に思うけど、髪が伸びるのつて鬱陶しいな……。

と、そんなどうでもいい事を考えながら、遺跡を駆けた。



「うつ……」

遺跡の最深部。

そこには一体の、「百鬼」の大元と思われるモンスターがいた。それを一言で表すなら、紫の巣、だろうか。

直径10メートル以上の紫の球膜、空中にあるそれを支えるように紫の糸があらゆる場所に張り付き、さらに赤い血のようなものが球膜を巡っている。

しかもこの球膜、脈動しているような……。

「……これか？」

「うむ、これじやな」

これは、ヤバい。

数々の世界を巡つて来た僕の本能が、そう訴える。

が、アジ・ダハーカよりは弱いと思う。

まあ、どつちも世界を滅ぼせる力を持つと考えると、強弱なんて関係ないか。

「じゃああの膜、破つて良いか？」

「うむ、特別に我が許可しよう。た、だ、し！ちゃんとカード化するか、殺すのじやぞ」

「ああ、もちろんだ。やれ！ヴィー」

『フンッ、モンスター使いの荒いマスターだ！』

最深部はかなり広く、サイズ3のモンスターでも数体は存在できる。

そのため、SD化を解いたヴィーの6つの光砲が球膜に放たれた。僕のバディスキルの双砲とは比べ物にならないそれは、呆気なく球

膜を——

「……嘘だろ？」

砕けなかつた。

いや、冷静に考えれば当たり前か。

華子さんによると、この球膜の中のモンスターを封印しているらし

い。

世界を滅ぼせるモンスターを封印する膜となると、そりやあ強靱に違ひないか。

ただのモンスターのヴィーでは、砕けないのも納得である。

「で、どうする相棒」

『聞くな、我は今かなり落ち込んでいる』

「アハハツ、そりやあそうか」

さて、眞面目にこの膜をどうするか。

それを考へるために華子さんに訊こうとした、その瞬間。

最深部……いや、遺跡 자체が脈動した。

それと同時に球膜がパキパキと音を立てて割れていき、破片を落としていく。

どうやらヴィーの光砲は、膜を破るには至らなかつたが中のモンスターを起こす事は出来たらしい。

「……悠斗様、これは」

「大丈夫、わかってる。危なかつたらカード化はしない」

そして、球膜が完全に割れた。

念のためにソフィアとデイザスター・フォースのバリアを張つてみると、「百鬼」の大元がその姿を現す。

『GYAAAAAAA!!』

百足。

そのモンスターを見て、そんな言葉が脳裏に浮かんだ。

背中に百足の甲羅を纏い、百足の尻尾をいくつも生やした歪な存在。

さらには6本もの腕を持つており、僕の識るモンスターの中でもトップクラスに気持ち悪い。

「ぬう、このような奇怪な見た目だつたとはのう。ドーンも教えてくれれば良かつたものを……」

華子さんは平気な顔をしているが、ソフィアは僅かに顔色が悪い。早めにカード化したいところだが、これは無理そうだな。なら、殺すか。

「華子さん、こいつのカード化は無理だ。殺す」

「うむ、我もそう考えていたところじゃ。ではいくぞ！」

双砲を構え、僕のダークコアデッキケースから数体のモンスターを出す。

狙うは急所、頭だな。

「行くぞっ！」

ヴィーが光砲を頭に当てるが、奴に効いた様子はない。

だが、これはあくまで囮だ。

華子さんと僕、そして『竜騎士 エドワード』が接近する。
どれか一つでも通れば良いという考えだつたが、

『GYAAAAAA!!』

『エドワード』が喰われた。

一口で、サイズ3のモンスターが喰われたのだ。

だが、『エドワード』はデイザスター・フォースで具現化しているだけ。

そのため、ゼロ距離で僕の光砲と華子さんの拳が炸裂する。
だが、奴は少しのけぞつただけに終わってしまった。

予想以上に硬いな、このモンスター。

『エドワード』、もう一回……え？」

サイズ3にしては小さいエドワードをもう一度呼び出そうとカードを手にすると、ありえない事が起きていた。

なんと、カードが白紙になつてているのだ。

こんな事は一度も……。

「もしかして……喰われたのか？」

奴が『エドワード』のカード情報だと、まとめて喰らつた。

なんとも突拍子のない推測だが、あながち間違つてはないとと思う。

「悠斗様！」

ソフィアの言葉で意識が引き戻されると、目の前には二本の腕が迫っている。

慌ててモンスターをコールするよりも早く、ソフィアの発動した『エリネドの指輪』が僕を守つた。

「サンキューソフィア！」

「ダー」

次の攻撃のために、デツキからカードを何枚か取り出す。よし、次こそ倒すぞ。

「待て悠斗、様子がおかしい」

「華子さん……？あれ？ そういえば」

奴はあれから、一切攻撃を加えていない。

数秒前までは容赦なく攻撃を加えていたはずなのに、だ。一体何が……。

『グ……ア……アアア……』

「声……？」

奴が、十分声と呼べるものを見た。

クソッ、意味不明な事が起きすぎだ……！

『ふあ……イト……ファイト……』

ファイト。

奴はハツキリと、そう発音した。

人語を話せるモンスターは多くいるが、こいつもその一體か。てかファイトって……つまりそういう事だよな。

「ふうー。やるぞヴィー、ファイトだ！」

『はあ!? 殺すのではなかつたのか!?

「そうだけど、こいつはファイトって言つたんだ！ つまりそういう事だろ！」

『ぐぬう……我はどうなつても知らんぞ!』

バディスキルを解除し、ディザスター・フォースでバディファイト結界を張る。

これで結界内にいる存在は怪我を負わなくなつたけど……『エドワード』が喰われたあたり、不安しかない。

「やるぞバケモン！ 来たれドラゴン、舞えよ竜！ ダークルミナイズ、ドラゴンズヴァーズイン！」

僕の背後に、ドラゴンツヴァイのフラッグが現れる。

これで奴がちゃんとファイトをするかどうかだが……。

そんな危惧をよそに、奴の前にフラツグが現れた。

へえ、あのフラツグ、百鬼夜行つて言うのか。

見たことないフラツグだが、機能してゐるつてことはちゃんとしたフラツグなんだな。

「ん?」

あちらのバディモンスターである奴、イーターの腹部から何かが出てきた。

おたまじやくしが巨大化し、腕が生えたような見た目のそれ。

それがさらに自らの腹部に手をかざすと、そこから6枚のカードが現れる。

そして空中に巨大なカードが2枚浮いてるつてことは、あれがゲージ。

ハハツ、一か八かだつたけど、なんとかなるもんだな。

「じゃあ、やろうぜ」

『キイイ』

こうして、僕とイーターのファイトが始まった。

第8話 対決！世界を喰らう獣！

「チャージアンドドロー。センターに『超武装騎竜 ガルガニックフェザー・ドラゴン』をコール、そのままアタックだ！」

センターに赤い翼を生やし、黒を基調とした鎧に身を包むモンスターが現れた。

そしてイーターに攻撃をすると、空中に浮かぶライフが10から8に減少する。

やつぱり、ちゃんとファイト出来るのか。

＝＝＝＝＝＝＝

『超武装騎竜 ガルガニックフェザー・ドラゴン』

ワールド：ドラゴンワールド

サイズ：3

属性：「武装騎竜」「赤竜」

打：2／攻：60000／防：6000

コールコスト：ゲージ1を払う。

■このカードが攻撃した時、君のデッキの上から1枚をゲージに置く。

『私は試練を与える者なり』

＝＝＝＝＝＝＝

そして、イーターのターン。

分身であるおたまじやくしが腹部に手をかざすと、カードが1枚手札に加わる。

そして、チャージアンドドロー。

さつきはファイトと声を発していたが、基本的には喋らないって事か？

それとも喋れない？

そんな考察をしている間に、イーターはモンスターをセンターにコールした。

「……ソフィア、あのモンスターは？」

「こちらです、悠斗様」

あらゆるカードの情報がわかる『火星人UFO タコ助』をデッキに入れたソフイアに訊くと、iPadにモンスターの情報が記載された。

＝＝＝＝＝

《ギロチンアックス・ドラゴン》

ワールド：ドラゴンワールド

サイズ：1

属性：「武装騎竜」「緑竜」「百鬼」

打：2／攻：2000／防：2000

■“爆雷”：相手の場に「竜」か「ドラゴン」を含むモンスターが登場した時か、相手が「竜」か「ドラゴン」を含む魔法を使った時、相手にダメージ1！

この能力は1ターンに一回だけ使える。

『寄越せ……腕、脚、首、全部寄越せ……！』

＝＝＝＝＝

ギロチンアックスと名の付く通り、二本のアックスを逆手に持つているその緑竜。

打撃力や攻撃力などは平均より低いが、着目すべきはそこではない。

爆雷という、僕ですら知りえない能力。

まして、「竜」か「ドラゴン」を含むモンスターしかいない僕のデッキにおいて、圧倒的なメタを持ったそのカード。

これは予想以上にマズいかもしない。

そして、ライトに人型の緑竜、レフトに華子さんが吹き飛ばしていた灰竜がコールされる。

＝＝＝＝＝

《圧殺竜 ザデルガンガー》

ワールド：デンジャーワールド

サイズ：1

属性：「デュアルドラゴン」「百鬼」

打：1／攻：7000／防：4000

『心配するな。いい具合にほぐしてやるよ』

＝＝＝＝＝＝＝

『アツシユドラゴン デフォルス』

ワールド：エンシェントワールド

サイズ：1

属性：「ネイキッドドラゴン」「百鬼」

打：3／攻：30000／防：2000

能力：ライフランク1

＝＝＝＝＝＝

これが百鬼夜行というフラッグ。

属性に「百鬼」があればどんなモンスター、魔法、武器でも使える
フラッグで、ドラゴンツヴァイと似ている。

まあ、初期ライフ20というようなぶつ壊れなところはないが。
そして、『ザデルガンガー』が両腕の圧殺具で『ガルガニックフェ
ザー・ドラゴン』を捻り潰した。

さらに『アツシユドラゴン』と『ギロチンアックス』の攻撃でライ
フが15に減少する。

「よし、僕のターンだ。ドロー、チャージアンドドロー。ライトにバ
ディコール！『超越竜王 エーヴィヒカイト』！」

『我ら相手にファイトを挑むなど、愚の骨頂！』

よくわからない決め台詞を言い放ち、ヴィーが僕の背後からライト
エリアに移動する。

バディギフトでライフが1回復するが、爆雷で1減少のプラマイ
0。

さして痛くはないが、蓄積するのはマズいな。

「ヴィーの能力発動！ライフ2を払い、デッキの上から3枚オープン
！」

その中から1枚を選択し、残りはデッキの下に戻す。

選んだ1枚、『神火の騎竜 ローメディウス』がサイズ0でレフトエ
リアに現れる。

赤い体に白を基調とした鎧を纏い、巨大な両手剣を持つたカツコいいモンスターだ。

＝＝＝＝＝

『神火の騎竜 ローメディウス』

ワールド：ドラゴンワールド

サイズ：3

属性：「太陽竜」「武装騎竜」

打：2／攻：70000／防：5000

コールコスト：ゲージ1を払う。

■ “ヒノカグツチ” このカードが攻撃した時、ゲージ1を払つて良い。

払つたら、君のドロップゾーンのモンスター1枚を手札に加える。この能力は1ターンに一回だけ使える。

能力：2回攻撃

『人の世に火を授けた者がいたように、ドラゴンワールドにも火を司る竜が存在する』

＝＝＝＝＝

『ローメディウス』でセンターの『ギロチンアツクス』にアタック！』ドロップゾーンに必要なモンスターはいないし、何よりゲージがないのでヒノカグツチは発動しない。

そして『ギロチンアツクス』が破壊され、センターはガラ空き。

『ローメディウス』、2回攻撃だ！そしてヴィーも続け！』

『ローメディウス』の攻撃は通るが、ヴィーの攻撃は『百鬼魔導 閻違え』で防がれ、ライフ+1されてしまった。

「ターンエンドだ」

★ 悠斗 ライフ：13／手札：3／ゲージ：0／ライト：『超越竜王 エーザイヒカイト』／レフト：『神火の騎竜 ローメディウス』 大丈夫、僕のライフは13。

このターンで倒されることはないし、イーターのデッキは恐らく爆雷主軸。

爆雷にリソースを割いているから、なおダメージ効率は低いはず。

……ハ、恐らくとかはすとか、我ながらスッゲー曖昧な推測だな。

『ギ……アア……セ……ンター……』

おたまじやくしがそんな言葉を発すると同時に、センターにモンスターが召喚される。

黒竜の顔に、蛇のような胴体、それが下半身あたりからいくつも分裂している。

これはまた、歪なモンスターだな。

＝＝＝＝＝＝

『片翼を憎む竜 レフトスラツシャー』

ワールド：ダークネスドラゴンワールド

サイズ：1

属性：「黒竜」「百鬼」

打：1／攻：50000／防：1000

コールコスト：ゲージ1を払う。

■“靈撃”：このカードの攻撃で相手のモンスターを破壊した時、相手にダメージ1。

■“爆雷”：相手のレフトにモンスターが登場した時、相手にダメージ1！

この能力は1ターンに一回だけ発動する。

『ニクイ……我の片翼がニクイ……』

＝＝＝＝＝＝

爆雷と靈撃のハイブリッドモンスターか。

しかし、靈撃とはダビデを思い出す能力だ。

『ア……アタック……』

『レフトスラツシャー』が『ローメディウス』の首に噛み付き、破壊する。

そして『レフトスラツシャー』がセンターに戻ると、僕のレフトエリアには水色の球体が浮かんでいた。

その球体はひとりでに動き出し、僕にぶつかってダメージ1を与える。

これこそが、この能力こそが靈撃。

食らうのは随分と久しぶりだ。

そして、『ザデルガンガー』と『アツシユドラゴン』の攻撃でライフが8に減少。

ふむ、やはりダメージ効率が悪いな。

いやまあ、ツヴァイでなければ死んでいたのだが。

★イーター ライフ：7／手札：3／ゲージ：3／センター：『片翼を憎む竜 レフトスラッシュヤー』／ライト：『圧殺竜 ザデルガンガー』／『アツシユドラゴン デフォルス』

『マスターよ、随分とマズい状況ではないか』

「確かにマズい。次のターンか、さらに次のターンで決めないと多分負けるな」

問題は、ヴィーの能力で強いモンスターを引けるかどうかにかかっている。

スタートフェイズを終え、メインフェイズに移行。

『幸いの竜 フォーボルカ』の能力発動！ ゲージ+2。さらに『ヴィー』の能力発動！

再びライフ2を払い、デッキから3枚オープンする。

よし、当たりだ。

「センターに『合成屍竜 ガロウズ・カーン』をコール！」

四足の帝王の下半身、それに赤いマントのようなものをなびかせた死神の上半身を合わせた、イーターのモンスターに負けず劣らず歪な存在。

ぱつと見、ケンタウロスを連想する人も多いだろう。

まあ、その実態はケンタウロスとは比べ物にならない氣味の悪さだが。

＝＝＝＝＝

『合成屍竜 ガロウズ・カーン』

ワールド：デンジャーワールド／ダークネスドラゴンワールド

サイズ：3

属性：「死」「深淵」「デュエルドラゴン」

打：3／攻：50000／防：9000

コールコスト：ゲージ3を払う。

■“潜影”：このカードは相手のセンターにモンスターがいても、相手を攻撃できる。

■このカードで相手にダメージを与えた時、相手の場のモンスター全てを破壊する！

『死神と帝王の合成——混ざり合う呪いと力が、恐るべき化学反応を起こす』

|||||

「これはシドーの……悠斗様、このモンスターをどこで」

「以前、と言つても四年前にガロウズとガエル・カーンの遺伝子を拝借していくな。最近完成したモンスター合成技術で造った」

「……存じませんでしたが」

「もしもの事があつたら危ないだろう？ 次からは手伝つてもらうよ」

そういう事じやない、と言いたげなソフィアから視線を移し、アタックフェイズに移行する。

『ガロウズ』！ ファイターにアタックだ！

瞬間、《ガロウズ》が自らの影に沈んだ。

そしておたまじやくしの背後に現れ、その鋭い爪でダメージを与える。

直後《ガロウズ》の能力が発動し、おたまじやくしの場のモンスターが全て破壊された。

そして《アツシユドラゴン》はライフランクを持つてるので、さらにダメージ1。

『ヴィー』も続け！

『おう！』

そしてイーターのモンスターは0、ライフは1にまで減少する。仕留めきれなかつたのは口惜しいが仕方ない、カードゲームとはそういうものだ。

「ターンエンドだ」

★悠斗 ライフ：8／手札：3／ゲージ：0／センター：《合成屍竜

ガロウズ・カーン》／ライト：《超越竜王 エーヴィヒカイト》

『GY……GYAAAAAA!!』

「ぐ……！ なんだ!?」

「うるっさいのう」

おたまじやくしのメインフェイズ開始時、突然本体のイーターが吠えた。

知性を感じさせない、そんな声で。

そして、おたまじやくしは何事もなかつたかのようにセンターに《ザデルガンガー》をコールする。

『バ……コール……』

おそらく、おたまじやくしはバディコールと発音したのだろう。

バディコールという事はつまり……。

次の瞬間、イーターが《ザデルガンガー》を喰らいセンターに召喚された。

ふむ、やはりデカイな、ビル何階分だ？

「ソフィア、《イーター》の情報をくれ」

「ダー」

ソフィアからiPadを受け取る。

その直前。

センターにいたはずの《ガロウズ》が、その姿を消していた。

《ガロウズ》を探すために視線を動かして、気付く。

「マジかよ……！」

《イーター》の口の端から、帝王の足がのぞいている事に。なるほど、《イーター》は《ガロウズ》を文字通り喰らつたってことか。

視線を横にずらし《イーター》の情報を見て、納得した。

「ああ、確かにこれなら……《ガロウズ》なんてただの餌だよな」

そして、アタックフェイズが開始する。

＝＝＝＝＝

《外道竜鬼 イーター》

ワールド：なし

サイズ：3

属性：「百鬼」「ドラゴン」

打：0 (+1) ／攻：4000 (+2000) ／防：3000 (+2000)

コールコスト：ゲージ3を払い、君の場のモンスター1枚を破壊する。

■君のアタックフェイズ開始時、場のカード1枚を破壊して良い。破壊したら、君のデッキの上から1枚をこのカードのソウルに入れる。

■『外道喰魂』：このカードのソウルの枚数分、打撃力+1、攻撃力+2000、防御力+2000！

■このカードで相手の場のモンスターを破壊した時、君のデッキの上から1枚をこのカードのソウルを入れる。

■君のターン終了時、このカードを破壊する。

能力：二回攻撃／ソウルガード

『数多の世界を喰い滅ぼした、醜惡なる大邪神の半身』

||||||

第9話 決着！全てを貫け！ドリル・ラム・バンカー !!

アタックフェイズが開始する。

その前に、おたまじやくしは『百鬼魔導 閻魔帳開封』で手札を全て捨て、新たに3枚ドロー。

そして、やはりというかなんというか、『イーター』は『ヴィー』に攻撃を仕掛けた。

防御魔法を持つていらない僕はそれを見ることしか出来ない。

「クツ……！ヴィー、ソウルガードはしなくていいよな！」

『聞くまでもないだろう！したところで、奴の餌になるだけだ！』

「だよな……！」

というわけで、ソウルガードをせずにヴィーをドロップゾーンに送った。

2回攻撃を持った『イーター』は、ヴィーという獲物を見失った事で僕に標的を変える。

そして一本の腕が僕に直撃し、ライフを削る。

「ぐつ……!?」

「悠斗様！」

「大丈夫だ……！この結界の中で怪我を負う事はない！」

しかしそれでも、目の前に巨大な腕が迫ってきたというのは中々のホラーだ。

ふうー、落ち着け僕、ここからが本番だぞ。

★イーター ライフ：2／手札：2／ゲージ：1／センター：『外道

竜鬼 イーター』

「ドロー、チャージアンドドロー……！」

今の一ーターのソウルは、1枚。

防御力は未だ5000、このターン中に倒す。

そうしなければ。僕に勝ち目はない……！

だが、今の手札はゲージコスト2以上のものが多く、ましてチャー

ジカードは0。

クソッ、初っ端から飛ばしすぎたか？いや、あの時は《ガロウズ》を出すのが正解だった。

それに、僕はまだ出せるカードがある。
だけど、思わず笑ってしまう。

「ハハ……まさかこの状況で出せるカードがこれだけなんて……感謝するよ、未門牙王。センターに《ドラムバンカー・ドラゴン》をコール！」

ゲージコスト1、攻撃力7000、さらに2回攻撃を持った、今僕が欲しい要素を全て満たしているモンスター、《ドラム》がセンター工リアに召喚される。

ああ、心強いな、これは。

「ドラムバンカー・ドラゴン……入れていたのですね、悠斗様」

「いや、ただのミスだよ。ドラムをデツキから外すのを忘れていた、ただの凡ミス」

だけどそれが今、僕の窮地を救える可能性を持つている。
思わずニヤけてしまうのも、致し方ないことだ。

「いけ《ドラム》！《イーター》にアタックだ！」

《ドラム》がドリル状の武器、ドリル・ラム・バンカーを吹かす。するとドリルの先端がわざかに尖り、白い煙が噴き出した。

その勢いに抗わず、《ドラム》は《イーター》に向かつて突進する。そしてドリルは《イーター》の中心を捉え、破壊させた。

「これで《イーター》のソウルはない。もう一度だ《ドラム》！」
またもドリル・ラム・バンカーを吹かし、《イーター》に突進する。
そして《イーター》の胸を貫く、その直前。

突如《イーター》の眼前に現れた闇で、ドリルが阻まれてしまつた。おたまじやくしに視線を向けると、一枚のカードが光つている。
そのカードは《百鬼魔導 閻違え》。

攻撃を無効化し、ライフ+1するカードだ。

「クッ……ソオ……！」

マジか、マジかマジかマジか……！

破壊できなかつた。

これで、イーターは生き残つてしまつた。
考えうる限り、最悪の状況だ。

「ターン、エンド」

★悠斗 ライフ：6／手札：3／ゲージ：0／センター：『ドラムバ
ンカー・ドラゴン』

そして、イーターのターンが開始する。
何もモンスターを出さないで欲しかつたが、そんな願いが通じるは
ずもなく。

ライトに『殲滅獣 グラシヤラボラス』、レフトに『跳梁跋扈 血染
蜘蛛』がコールされた。

|||||||

『殲滅獣 グラシヤラボラス』

ワールド：マジックワールド

サイズ：0

属性：「72柱」「百鬼」

打：1／攻：2000／防：2000

■君の場に『百鬼』があるならコールできる。

■『爆雷』：相手が爆雷でダメージを受けた時、相手にダメージ1

!

この能力は1ターンに一度だけ発動する。

『不幸になりてえ奴はかかつてきな。望み通りにしてやるからよ』

|||||||

『跳梁跋扈 血染蜘蛛』

ワールド：カタナワールド

サイズ：0

属性：「髑髏武者」「百鬼」

打：2／攻：6000／防：1000

■このカードのバトル終了時、このカードを破壊する。

『人間、俺に指図する気か?』

|||||||

そしてアタックフェイズが開始し、《イーター》の能力で《ドラム》
が呆氣なく破壊される。

直後、《イーター》の腕が二本、僕を捉えた。

「ふつ……！」

これでライフは4。

そして、《グラシャラボラス》の爪が僕の腹部を切り裂く。
「ぐつ……！」

これでライフは3。

最後に、《血染蜘蛛》の糸が僕に突き刺さつた。

「がああつ……！」

《血染蜘蛛》は自滅し、僕のライフは1になる。
「ぐ……う。マズいな、結構どころじゃなくマズい」

『マスターのデツキが浪漫型なのが仇となつたな。一連続でデツキ
トップに賭けねばならんとは』

「ハツ、うつせえ……！」

元々、矛盾しているのだ。

ライフ20で始まるのは、長期戦となつた場合明らかに有利。

しかし、手札は4枚しかなくリソース切れがしやすい、つまり短期
決戦を強いられる。

恨むぞ、ツヴァイを創造した古代の竜どもよ。

「すうー、ふうー……！」

飛翔型のダークコアデツキケースに手をかざしながら、深呼吸を繰
り返す。

大丈夫、僕の勝ち筋は見えている。

このターンで、このドローで、チャージカードを引けばいいんだ。
そうすれば、確実に勝てる。

だというのに。

「なんでこんな震えるかねえ……」

端的に言えば、怖い。

ここで引けなかつた未来を想像すると、どうしようもなく体が震え

る。

だが、それでも。

「未来は変わってくれないからな。ドローー！」

が、そのカードは《超流星竜 ゼニスレイター》。

チャンスは、後一回……！

重い腕でコアデッキケースに触れた瞬間、ソフィアから声がかかつた。

「悠斗様」

「ん？」

後ろに振り返ると、先ほどの青白い顔は何処へやら、いつもの無表情のソフィアがいる。

何を言われるのだろうと現実逃避気味に彼女の瞳を眺めていると、驚きの発言が飛び出した。

「頑張つてください」

と、一言。

たつた一言、それもありふれた言葉だが、僕は知っている。
ソフィアが言つた、その異常性に。

頑張つたところで、ドローするカードは変わらない。

頑張つたところで、僕のブレイングが成長する事はない。

頑張つたところで……イーターを倒せるとは、限らない。
それはソフィアも理解しているはずで、けれど、

「ああ、せいぜい頑張つて足搔くよ」

不思議と、僕を支配していた恐怖が霧散した。

今度は迷いも震えもなくデッキに手をかざし、

「ドロオーー！」

来た……！

「ライトに《舍弟見習い ゴーゴー・剛》をコール！」

《ゴーゴー》は1メートルほどの赤竜が、一昔前の番長服を来たような見た目をしている。

当たりも当たり、大当たりだ。

|||||||

『舍弟見習い ゴーゴー・剛』

ワールド：エンシェントワールド

属性：【竜王番長】

サイズ：0

打：1／攻：30000／防：1000

■“理想の番長像”このカードが登場した時、君のデッキの上から3枚を見て、その中のモンスター1枚を手札に加え、残りのカードをドロップゾーンに置く。

能力：ライフランク1

|||||||

『《ゴーゴー》の能力発動！デッキから3枚オープン！』

1枚目、《超越竜王 エーヴィヒカイト》。

2枚目、《魔竜の眷属 デストラクタ》。

3枚目、《魔竜の眷属 ゴライオウ》。

『《ゴライオウ》を手札に！そのまま能力発動！手札を捨て、ゲージ+2だ！』

これで、布陣は完璧に整つた。

手札のモンスターをコールしようとすると、今度は華子さんから声がかかる。

「何か良いカードでもおるのか？」

「援護は不要だ。僕は勝つ」

「クカカツ、何かは知らぬが、気負いすることもない。もし悠斗が負けたとしても、我がもう一度封印してやろう」

「そんな簡単には出来なさそうだが、まあ気持ちだけで助かるよ。センターにドルジナスをコール」

『ドルジナス』は黒い外殻を纏つた龍で、歪な一本のツノが特徴だ。ダークネスドラゴンワールドに行つた時、たまたま見つけたモンスターである。

|||||||

『不淨魔竜 ドウルジナス』

ワールド：ダークネスドラゴンワールド

属性：「悪神竜」

サイズ：3

打：0／攻：8000／防：5000

- 相手の場にモンスターがいないなら、このカードの打撃力を+4！

■相手の場のサイズ2以下のモンスター1枚を選び、ゲージ1を
払つて良い。

払つたら、選んだカードを破壊する。

『根源たる悪神の眷属は、魔竜……または悪神竜と称されている』

中々使い所が難しいモンスターだが、ハマれば強いモンスターの筆
頭だ。

コールするのにゲージがかからないところもなお良い。
『ドウルジナス』！『イーター』にアタックだ！』

瞬間、『ドウルジナス』が『イーター』に向けて飛んだ。
邪氣を吐き続いている口で『イーター』を破壊する瞬間、どこから
ともなく花弁が舞つた。

それに阻まれ、『ドウルジナス』の攻撃は失敗に終わる。

|||||||

『百鬼魔導 百花繚乱』

ワールド：カタナワールド

属性：「百鬼」「鬼道」

■相手のターンの攻撃中に使える。

■その攻撃が連携攻撃でないなら、無効化する。

『さあ、届くかしら？』

|||||||

なるほど。

『ドウルジナス』の攻撃はこの魔法で防がれたのか。

『GYA AAAA!!』

瞬間、自らの勝利を確信したのか『イーター』が吠えた。
まあ、確かにそう思われても仕方ないだろうな。

だつて土壇場の土壇場で、2回攻撃も貫通も持たないモンスターをコールしたのだから。

「……悠斗、残念じゃがお主の負けじや」

と、華子さんが拳を構えてイーターに近付こうとするが、それをソフィアに阻まれた。

「何をするのじや？ ソフィア」

「まだ悠斗様のターンは終わっていない。だから、貴方が手を出す必要はない」

「しかし、すでに悠斗のアタックフェイズは終わって」

「ファイナルフェイズ！」

華子さんの言葉を遮り、ファイナルフェイズを宣言する。
その行動に華子さんを目を丸くするが、驚くのはまだ早い。
良く見てろ、イーター。

これが僕の、切り札の一つだ。

『《ドルジナス》をソウルに入れて、センターにコール！』

召喚されるは、一体の武装騎竜。

赤く強靭な肉体。

黄色い防具に身を包み、その手に持つは一つの巨大な武器。
そのモンスターの名は、

『《ドラムバンカー・ドラゴン ドリル・ラム・バスターブレイク！》、
《イーター》にアタックだああ!!』

《ドラム》はその手に持つ巨大な武器、ドリル・ラム・バンカーを勢い
良く吹かす。

辺りに心地の良い重低音を響かせ、赤い炎と白い煙が吹き出し始め
る。

その姿はまるで、一本の破城槌のようだ。

凄まじい勢いで、《イーター》に迫っていく。

そして《ドラム》は《イーター》の胸を貫通し、

『キシャアアアア!?』

3ダメージを与え、ライフ0にした。

瞬間、バディファイト境界が解除される。

結果は僕の勝ちだが、あくまでファイトに勝つただけだ。

イーターは生きている。

まだ、本当の勝負は終わっていない。

「良くやった。後は我に任せておくのじや」

モンスターを召喚しようと構えると、すぐ隣からそんな声が聞こえる。

そして次の瞬間、イーターが後ろ向きに倒れ始めた。

「ふむ、おそらく悠斗とのファイトで力を使つたのじやろうな。弱くなつておつたぞ」

「は、華子さん……？ 何やつたんだ？」

「ぬ？ 何つて、ぶん殴ったのじやよ。こうやつての」

華子さんが拳を突き出し、僕の眼前で止める。たつたそれだけの動作で、風が巻き起こつた。

ハ、ハハ……苦笑いしか出ねえよ……。

これでも多分、滅茶苦茶手加減しているのだろう。

「で、悠斗よ。お主力カード化は良いのか？」

「あ、生きてるのか。ならするよ」

竜という属性があり、ドラゴンツヴァイでも使えるのは魅力的だ。なげなしの精神力でバディスキルをオンにし、イーターに近づいていく。

そしてイーターの胴体あたりに着地し、心臓辺りに白紙のカードを押し付けた。

そのまま白紙のカードとイーター、2つにデイザスター・フォースを注いでいく。

辺りに黒い雷がバチバチと響き渡り、イーターがカード化に抵抗しているのがわかる。

「大人しく……カード化されろ……」

瞬間、イーターの全身が淡く光つた。

そしてそのまま縮小していく。

よし、これでカード化成功……つと……。

「あれ……？」

無事カード化が成功した影響か、興奮が収まつた事で押し寄せてた

眠気のせいか、意識が朦朧とし始める。

ああ、これはマズいな……早くなんとかしないと……。

と、思考するが、時すでに遅し。

僕の意識は、完全に呑まれた。

第二章 A B C カツプ開催編

第10話 なんの変哲もない日常を（適当）

「くああ……」

相棒学園中等部、2年A組の教室。

朝読書の時間で、僕はいつものように盛大な欠伸をかいた。
ああ、眠い。

イーター戦による精神力の消耗で、なお眠い。

読書時間は後5分しかないけど、せめて寝とこう。
というわけで机に突っ伏そうとすると、それが何かに遮られた。
『キイイ』

「痛いから引っ張るな……イーター」

僕の貴重な睡眠を遮る存在、イーターに声をかける。

ちなみに、イーターと言つてもあのビル数階分のサイズではなく、
おたまじやくしサイズの方だ。

それを引っ剥がそうと、イーターはモンスター特有の怪力……頸力
？で抵抗する。

餅のように若干形が変わるが、イーターは依然僕の頭に噛み付いた
まま。

こ、こいつ……僕の睡眠を邪魔する気か？

デイザスター・フォースを使うのも一つの手だが、こんなしようもな
い事に使いたくないし、使うべきではない。

と、そこで再度眠気が襲つてきたので、もう一度欠伸をする。
すると、丁度隣の席から声がかかつた。

「なんや、居眠り王子は今日も眠そうにしどんなあ」
声の主はそう言つてケラケラ笑つている。

てか、居眠り王子つてなんだ居眠り王子つて。
あれか？授業中いつも居眠りしてるからか？

「しようがないだろ？ほほ徹夜だつたんだよ」

ドラゴンワールドやデンジャーワールド、マジックワールドなどの

異世界にもちゃんと時間という概念が存在し、昼夜がある。

そしてどんな異世界も、地球と流れる時間は一緒らしい。

地球で過ごした1秒は、異世界で過ごした1秒と変わらないのだ。
いやまあ、一日の周期が違うので日本では夜だったのに異世界では
昼だった、なんてのはありふれた事だけど（というか、昨日のレジエ
ンドワールドがそうだった）

「なんや、悠斗だけえらい宿題多かつたんか？それは同情するで、宿
題は学生の敵やからなあ」

「んー、強いて言うなら、宿題よりめんどくさくて難しかったな」

イーターのカード化なんて偉業、宿題如きと一緒にされては困る。

ちなみに、この関西弁を使う男は禍津ジン。

飄々とした雰囲気で、いつも2つの黒いダイスを持ち歩いている、
ギャンブルー気質な男だ。

「その宿題よりめんどくさくて難しい用事は、このようわからんモン
スターに関係あることなんか？」

「お、よく分かったな。大正解の花丸だ。じゃ僕は寝る」

「ちよい待ちいや、そないな面白そうな話、俺が噛まんわけないやろ
？」

つまりジンは、イーターをカード化した経緯を話せと。

が、そんな事ホイホイと話していいものではないし、話す意味もない
い。

バディポリス、ドーン伯爵が箱口令まで敷いたしな。

「たまたまパックからバディモンスターが出て、興奮で眠れなかつた。
はい終わり」

「ほーん。ま、今はそういう事にしといてやるわ」

「はいはい。じゃ、おやすみ」

と言つて眠ろうとするが、相変わらずイーターに邪魔されて昼休み
まで一睡も出来なかつた。

イーターよ、華子さんかドーン伯爵に頼んで君を殺してしまつても
かまわんのだよ？



「くああ……」

昼休み、相棒学園の屋上。

弁当を食べながら、僕はまたも盛大な欠伸をかいた。

「大丈夫ですか、悠斗様」

と、ソフィアに心配の言葉を投げかけられる。

レジエンドワールドに行つていてせいで隈が酷い僕とは違い、ソフィアはいつも通り健康的な肌をしていた。

「全然大丈夫じやないけど……ソフィアは眠くないのか？起きてる時間で言えば僕より長いだろ？」

「今日は寝ても問題のない授業が多かつたので」

「ああ、確かに理系が多かつたなあ」

これは別にイキリでもなんでもないが、常にモンスターの遺伝子情報に触れている僕にとって理科、特に生物学は基本的に授業を聞く価値がない。

僕の助手であるソフィアもだ。

なお、地理や公民が何もわからない僕と違つて、ソフィアは全ての教科で順位一桁というバケモノスペックをしている。

「それで悠斗様。本当に未門牙王に挑むのですか」

「ん？そりやまあ。お礼もしたいしな」

ちなみに、お礼というのはイーター戦のことだ。

未門牙王のバディがドラムでなければ、僕はドラムをデッキに入れなかつた。

つまり、イーターに勝てたのは少なからずドラム、元を辿れば牙王のおかげもある、というわけだ。

「なんや自分、牙王に挑むんか」

「お前は……禍津ジン」

「ほお、あの書記様に覚えてもらえたつたとは光栄やで」
なぜかジンに話しかけられた。

ちなみに、ジンの後ろにはバディである闇狐とチューナーの真間雁メグミがいる。

わざわざ何のようだらうか。

「何の用や?とか思つとるんやろ。バレバレやで、自分」

「そんな顔に出てたか?」

「当たり前や。んで、自分らに用はない」

「んん?じやあなんで来たんだ?」

「俺ら友達やろ?友達と昼飯食べたいって思うのは不思議やない。せやろ?メグミ」

「ジン、サラツと友達を騙そうとする人は友達とは呼べない」「何サラツとネタばらしすんねん!俺の計画が破綻したで!?!」

「……まあ、そんな事だろうとは思つたけど。

と、そこで背筋がピリピリするような寒気を感じた。

隣を見るとソフィアがいつもより冷たい視線をジンに送りながら、ポンチヨの中に手を突っ込んでいる。

ソ、ソフィアのやつ……いざとなつたら無理矢理デイザスター フオースで目的を吐かせる気だ……。

「禍津ジン、貴方はなぜ悠斗様に近づいたの。理由次第では——」

——消す。

と、唇の動きだけでそう言つた。

ソフィアの言葉がマジだと氣付いたのか、闇狐と真間雁はジンの後ろに隠れ、ジンを人質に差し出している。

「死になさいジン。元はと言えば貴方が原因よ」

「ジン、私は2度も死にたくない」

「ちよ!?なにすんねんメグミ!自分ほんまに幼なじみか!?それに闇狐は俺のバディやろ!」

おお、なんかのコントを見てるみたいだ。

流石関西人、これが関西人の血筋つてやつか。

「んで、本当の理由はなんなんだよ」

「……はあ、しやあないなあ。これは極秘機密なんやけど……」

ジンはそう言つて頬をポリポリとかくが、

「早く話しなさい」

「分かつた分かつた、話すからその殺氣抑えてくれや」

ソフィアの脅しには逆えず、ジンはポツポツと……いや、滅茶苦茶

ベラベラ喋つてんな。

「シドー会長、知つとるやろ？」

「ああ」

「んで、近々ABCカップが開催されんのも知つとるよな？」
「知つてる。てか、僕もソフィアも生徒会のメンバーなんだから知らないわけないだろ」

ちなみに僕が副会長、ソフィアが書記である。

ていうか、もうすぐABCカップか。

あれ、準備とか生徒会に一任されるんだよなあ。

面倒クセエ、マジで面倒クセエ。

「自分らが一番知つとるはずやけど、シドー会長は自己顕示欲が高いんや。まあ親がバディ・ポリス幹部のボンボンやし、仕方ない部分はあるやろうけどな」

「で？それが僕に近づいてきた事にどう繋がるんだよ」

まあ、大体は見当が付いている。

だからこれは確認だ。

「ABCカップで優勝したい言うて、俺に依頼してきたんや。有力ファイターの情報収集、そして決勝で当たつた時は絶対負ける、つてゆーてな」

「はあ！」

ジンの言葉に僕は驚き、ソフィアは呆れたように肩を竦めた。

シドー……あいつ、いつまでも学習しないなあ……。

いやまあ、ガロウズの遺伝子情報をあんな簡単に取れた時点であつていたけど……。

「でも決勝で当たるとは……いや、出来るな」

あの人は、あんなでも生徒会長だ。あんなのでも。

ABCカップのマッチングなんて、どうとでも出来るだろう。

それこそ、シドーに有利な相手を連続でマッチングするようになる、なんてのも可能か。

「ても、それを僕に知らせたら意味なくないか？」

「はつ、当たり前やろそんなの。なにせもう交渉決裂しとるからな。

口止め料を貰つとらん情報なんて、どうしようとも俺の勝手や。で、たまたま悠斗がおつたから声をかけた。それだけやで

「ハハッ、ジンらしいな」

このカラカラと笑つてるジンの姿、録画してシドーに見せたいな。シドーの悔しがる姿が脳内再生余裕である。

「で、こつちは話したんやしそつちも喋つてもらうで？ま、大方見当は付いとるけどな」

「未門牙王と勝負したいんだよ。なにせ、あの龍炎寺タスクに勝ったんだからな」

「やっぱりなあ、俺もあの試合は感動したで」

と、ウンウンと頷いているが、後ろの真間雁がすぐに否定した。

「嘘。ジンはある時、『勝てるわけないやろ。そないな事より特売行くで特売！メグミも付いて来いや！』って言つてた」

「そ、そんなわけないやろ。ちゃんとスマホで見とつたで？」

「それも嘘。牙王くんが龍炎寺くんに止めを刺す瞬間、ジンは半額の牛肉に夢中になつてた」

「なんでメグミはそないな詳細まで知つとんねん！」

「私はジンのチユーナー兼マネージャー。情報収集は当たり前よ」

そう言つて真間雁はジンの目の前でピースを作り、完全勝利を収めた。

しかしこの2人、ほんと仲良いなあ。

なんていうか、気軽に話せる仲というか。

「お、俺のことはもうええんや。悠斗、もうすぐ昼休み終わるで？もう行つた方が良いやろ」

「え？うつわ、後20分しかなかなのか。早く食べて——」

「その弁当やけど、もうないで？」

「え？」

そんなはずないだろ。

だつて、まだ僕は半分も食べてないんだぞ？

などと考へながら視線をすぐ下、弁当に移すと本当にかつた。ちなみに、ソフィアの弁当はちゃんと残つている。

が、僕の弁当がないのを見て、

「も、申し訳ありません、悠斗様。私の注意が甘かつたばかりに……」

と言つて項垂れているソフィアはわずかに顔を怒りに染め、腕が震えていた。

無表情が普通のソフィアがこんな表情をするというのは割とレアだ。

心なしか、全身から負の雰囲気が出ているような気がする。
というか、一体犯人は誰なんだ？

『ケフウ』

という声が、ベンチの下から聞こえてきた。
ベンチの下に手を伸ばすと、モンスター特有の感触が返ってきたので勢い良く引っ張る。

『キシャア』

出てきたモンスター、イーターは首……首? のような部位を傾げて
いるが、僕は見た。

イーターの口の周りに、幾つもの米粒が付着しているのを。
「悠斗様」

「今まで言わなくて良い。僕に考えがある」「
ダ。悠斗様の思し召しのままに」

その瞬間、僕とソフィアの心は完全に一致した。

——今日の夕飯、イーターだけ抜きな。

第11話 対決！荒神ロウガ！

それから。

まだ弁当を食べ終わっていないソフィアを置いて、僕は初等部校舎を走っていた。

理由は単純明快、未門牙王とファイトするため、6年C組の教室を目指しているのだ。

しかしそれ、ただでさえだだつ広い校舎なのでかなり距離があり。ほぼ全速力で走ったため、6Cの教室前に着いた時には額に汗が滲んでいた。

うーん……やっぱリディザスター・フォースがあるとはいえ、真面目に体を鍛えるべきだろうか。

と、そんな事を考えながらスライド式の扉を開ける。

すると、僕に視線が集中した。

中学生が初等部の教室に来る事が珍しく、尚且つ僕が臥炎キヨウヤの弟だから、というのもあるのだろう。

「未門牙王は……いた」

視線を動かし、教室の隅でカードを広げている牙王を発見した。ので、机と生徒を避けながら牙王に近付いていく。

向こうもこちらに気付いたらしく、その鋭い目つきで僕を射抜いている。

いや、多分睨んでないな。あれが普通なんだ。

そして、牙王の席に近づいたので口を開く。

「えっと、君が未門牙王？」

「そうですけど……アンタは？」

「僕は悠斗、臥炎悠斗だ。後、タメ口で良いよ」

「そうか！話のわかる先輩で助かるぜ！んで、悠斗先輩は俺に何の——」

「ブフウツ！」

と、牙王が僕に要件を訊く最中に、誰かが吹き出した。

その人物は牙王のすぐ隣で弁当をかき込んでいたのだが、それを吹

き出してしまつたらしい。

「うおおつ!? どうしたんだよ爆!」

「おまつ、牙王! 知らないのか!?」

「知らないって何がだよ」

「この人は臥炎財閥の御曹司、臥炎キヨウヤの弟だ!」

へえ、この弁当を吹き出した人は爆つて言う名前なのか。オレンジの半袖の上に青いつなぎを着て、白い鉢巻のようなものを巻いている。

しかしこの人、なんで半分だけつなぎを捲つているんだ?

「へえ、すげえんだな! 悠斗先輩!」

「いや、凄いのは僕じゃなくて兄さんの方だから」

実際、僕は何も凄くない。

一応、生物学に関してはいくつか偉業を成し遂げているが、それだけだ。

コアデッキケースの生産方を確立した兄さんが、圧倒的に凄い。

「それで用件だけど、僕とファイ——」

「おい、貴様が龍炎寺タスクのライバルか

と、またも同じタイミングで誰かが吠えるように叫んだ。

またか……と呆れながら声の主の方向、扉の方に視線を向ける。

そこには、肩に『アーマナイト・イーグル A^{エース}』を乗せた荒神口ウガがいた。

中等部2年ランキング1位の人間がなぜここに……いや、さつき叫んでたな。

貴様が龍炎寺タスクのライバルか、と。

なら、口ウガも牙王とファイトしに来たつてことか?

と、そんな事を考えている間に、口ウガは距離を詰めてくる。

「もう一度聞く。貴様が龍炎寺タスクのライバルか」

「ああそりだぜ……ですよ。荒神口ウガ先輩」

「フツ、そうか。龍炎寺タスクが認めたライバルというのはお前か」

口ウガの奴、久しぶりの再会なのに無視かあ。

いやまあ、僕はロウガが所属している組織、デイザスターを抜けた人間だ。

嫌われるというのも、無理のない話だろう。

「放課後、俺とファイトしろ」

「どうしてファイトしなきやならないんですか」

「お前にはこの前、キヤツスルで言つたはずだ」

と、牙王とロウガだけで話が進んでいってしまう。

にしても牙王、心なしか僕や爆と話す時よりも声が荒いような気がする。

ロウガには好印象を抱いていない、つてことか。

「だつたら、ちゃんと名前で呼んでくれよ……！」

「フツ、お前なんぞ龍炎寺タスクのライバルで十分だ」

牙王とロウガの間で、バチバチと火花が散った。

一番側にいる爆も、2人をハラハラとした表情で見守っている。つて、待て待て。

「ロウガ、悪いけど僕つていう先約があるんだ。順番は守ってくれ」

ロウガの肩を掴むと、鬼のような形相で睨まれた。

が、僕はこれでも世界を滅ぼすモンスターと対峙したこともあるんだ。

それくらいで引くほど、甘くない。

「ええっ!? 悠斗先輩つてそのために來てたのか！」

牙王が驚いているが、今は無視だ。

「フンッ、悠斗、お前に興味はない」

「それを言つたら僕だってロウガに興味ない。僕はただ、牙王と戦いたいだけなんだよ」

「ならばファイトだ。どちらが先に未門牙王と戦うか。それを賭けてな」

「ああわかつた。上等だよ」

ロウガは数秒間僕を睨んだ後、鼻を鳴らして出ていった。

これは想定外の事態だけど、まあいいか。

勝てば牙王と戦えるのだから、さして問題はない。

「あー、すまん。勝手にあんな事言つて」

「いや、問題ないぜ先輩。俺も戦つてみたかつたしな」

「え……？でも、ロウガとのファイトは嫌そうに見えたけど」

「あー、それはその……」

言葉に詰まり、視線を泳がしている牙王を見て察した。

なるほど、何か事情があるつて事か。

なら、無理に聞き出すこともない。

それに……さして興味もないしな。



「バディファイトあるところ奈々菜パル子あり！」

放課後、ファイティングステージ。

僕とロウガが定位位置に着くと、上空にUFOが現れ聞き慣れた声がステージに響いた。

そのUFOに乗っているのは、初等部6年の放送部員、奈々菜パルコさんとそのバディ『火星人UFO タコ助』だ。

「なななんど！今回の対戦カードは意外や意外！中等部ランキング1位の荒神ロウガ選手と、あの臥炎財閥当主の弟、臥炎悠斗選手だあー！」

まあ、意外といえば意外か。

僕は基本ファイトをしないし、ロウガと戦つたことなんてなかったのだから。

「どういう経緯で対戦カードが組まれたかは不明ですが、この2人の対戦を夢見た方は多いのではないでしようか!? ロウガ選手は当然として、悠斗選手はランキングには載つていませんがその実力はランキング上位に匹敵するともっぱらの噂！ 大熱戦になるのは火を見るよりファイヤーです！」

しかしあの子、テンション高いなあ。

同じ女子でも、ソフィアと正反対の性格だ。

「来たれドラゴン、舞えよ竜！ダークルミナイズ、ドラゴンズヴァーブズイン！」

「エースの力がお前を碎く！ダークルミナイズ、エース・デフィート

！」

「それでは宣言しちゃつてください！バディー！」

「「「ファイト！」」」

「「オープンザフラッグ」」

「「ドラゴン・ツヴァイ」」

「「デンジヤーワールド」」

数百単位の観客の宣言で、ファイトが開始する。

先行はロウガからだ。

「チャージアンドドロー。装備！《崩滅槍 天抉り》！」

赤く染まる、三叉の槍。

それを装備し、ロウガはセンターエリアに降りた。

ここまでセオリ一通りか。

＝＝＝＝＝

《崩滅槍 天抉り》

ワールド：デンジヤーワールド

属性：「タイラント」「武器」

打：2／攻：7000

装備コスト：ゲージ2を払う。

■場のこのカードは相手のカードの効果で破壊されず、手札に戻せない。

■君のライフが回復した時、君のデッキの上から1枚をゲージに置き、そのターン中、このカードは2回攻撃を得る。

この能力は1ターンに一回だけ発動する。

『千丈の堤も、蟻の穴より崩れる。天井の世もまた同じ』

＝＝＝＝＝

「さらにライトに《タイラント・ジン》をコール」

＝＝＝＝＝

《タイラント・ジン》

ワールド：デンジヤーワールド

属性：《タイラント》

サイズ：1

打：2／攻：3000／防：2000

■“ランプの願い”：君の場の《武器》が攻撃した時、君のライフを+2！

“ランプの願い”は1ターンに一回だけ使える。

『どんな願いでも叶えてやろう。ただし、対価は頂くがな』

|||||||

そして、ロウガが直接アタックしてきた。

《ジン》の能力でライフ+2され、ライフ回復したことでゲージ+1される。

限りなくシナジーが高く、無駄がない。

「はああ！」

「くつ……！」

ライフが18になり、僕のターン。

★荒神ロウガ ライフ：12／手札：4／ゲージ：2／ライト：《タ
イラント・ジン》／装備：《崩滅槍 天抉り》

「ドロー、チャージアンドドロー」

マズいな。

手札に《超越竜王 エーヴィヒカイト》がいない。
かといって、他のモンスターをコールしたのでは手遅れになつてしまふ。

こうなつたら、強引に引き寄せるか。

「センターに《魔龍の眷属 デストラクタ》をコール。ライフ2を払
い、ツードロー」

チツ、チャージカードは来たがヴィーは來ていない。

「さうにレフトに《舍弟見習い ゴーゴー・剛》をコール。デツキから
3枚をオープンして……よしつ、《超越竜王 エーヴィヒカイト》を手
札に加える。そして、そのまライトにバディコール！」

『ハツ、荒神ロウガよ。貴様なぞ、我がマスターの敵ではない』

「アホ、それはまだわかんないだろ」

バディファイトは、どれだけ良いカードが揃うかにかかっている。

それに……ロウガは僕の弱点とも言えるカードを持つてるしな。

「幸いの竜 フォーボルカ』を捨て、ゲージ+2。さらにライフ2を払い、《ヴィー》の能力発動！デツキから3枚オープン。その中の《剣

竜隊長 ドライ・エツグ』をサイズ0でセンターにコールだ！」

『デストラクタ』を破壊し、新たなモンスターがセンターエリアに召喚される。

3メートルほどの巨大な赤竜が鎧を纏い、巨大な双剣を構えているそのモンスター。

|||||||

《剣竜隊長 ドライ・エツグ》

ワールド：ドラゴンワールド

属性：「武装騎竜」「赤竜」

サイズ：3

打：2／攻：80000／防：60000

コールコスト：ゲージ2を払う。

■このカードが攻撃した時、相手の場のモンスター全てを破壊し、破壊した枚数分、相手にダメージ！

『武装騎竜団剣竜隊長が相手になろう』

|||||||

『ドライ・エツグ』でファイターにアタック！そして能力発動、《ジン》を破壊してダメージ1！

「受けよう！」

『ヴィー』と『ゴーゴー』も続け！

「くれてやる！ぐつ……！」

「ターンエンド」

★悠斗 ライフ：15／手札4／ゲージ：1／センター：《剣竜隊長

ドライ・エツグ》／ライト：《超越竜王 エーヴィヒカイト》／レフト：《舍弟見習い ゴーゴー・剛》

「ドロー、チャージアンドドロー。チツ、ライフ6か」

「5以下だと、お前の独壇場が展開されちゃうだろ？寸止めは当然だ」「フンッ、そんなもので俺を止められると思つたか？キヤスト！《闘氣暴走》！ライフ2を払いゲージ+4！」

「マジかよ……！」

これでロウガのライフは4。

マズいな、アレが来るぞ……！

「センターバディコール！《アーマナイト・ケルベロスA》！」

「フンッ、ぶちのめしてやろうぜロウガ！」

「当然だ！《ケルベロスA》の能力発動！魔装合体！」

瞬間、地獄の番犬が《天抉り》と合体した。

これが、これこそがAの能力……！

アイテムと合体し、絶大な力を与えるというもの。

＝＝＝＝＝

《アーマナイト・ケルベロスA》

ワールド：デンジャーワールド

属性：「アーマナイト」

サイズ：2

コールコスト：ゲージ1を払う。

■“魔装合体”：君のライフが5以下なら、場のこのカードを君の場の《武器》のソウルに入れて良い。

■このカードが君の《武器》のソウルにあるなら、その《武器》の打撃力+2！

■“ガルチャージ！”：このカードが君の武器のソウルにあるなら、ゲージ3を払って良い。払つたらそのターン中、その《武器》の打撃力+3する。

＝＝＝＝＝

今のロウガのゲージは8。

ということは、間違いなくアレが来る！

「ゲージ6を払い、《天抉り》の打撃力+6！つまり、今の《天抉り》の打撃力は10だ！」

「なななんど！通常のフラツグであれば一撃で消し飛ばす打撃力だあ！悠斗選手のライフは15だが、バディギフトでライフが回復したことにより今の《天抉り》は2回攻撃を持つています！防御魔法を持つていない悠斗選手、ロウガ選手の猛攻をどう乗り切るのかあ!?」

うん、わかりやすい解説をありがとうバル子さん。

しかし打撃力10の2回攻撃とか……ちょっと、強すぎるんじゃないかな。

「まだだ！『アーマナイト・グリフオンA』をコールし、再び魔装合体！これで『天抉り』は貫通を得た！さらにキヤスト！『餓狼深氣功』。ライフ+2、さらに貴様のライフが俺より4以上あるなら、さらに+6だ！！」

「来たよ最悪のカードがさあ！」

最初のライフ差から、10もあるのだ。

僕とのファイトは、最も『餓狼深氣功』を使いやさしいだろう。

そして、今のロウガのライフは13……！

「貴様のライフ、消し飛ばしてやろう！『天抉り』で『ドライ・エッジ』にアタックだ！」

これで『ドライ・エッジ』が破壊されれば、貫通で僕はダメージ10か。

それは、少々どころではなくマズいな。

「手札の『魔龍の眷属 カース・ドラゴンJr.』を捨てる！捨てたら、その攻撃を無効化する！」

「なんだとつ！ならば、2回目だ！」

「手札の『氷竜王 グラキエス』を捨て、ライフ1を払う！その攻撃を無効化だ！」

「おおつと悠斗選手！あの打撃力10の2回攻撃から完全に耐え抜いたあ！ファインプレー！なんというファインプレーだあ！」

「クソッ！ターンエンドだ！」

さて、このターンで決めさせてもらうぞ！

★ロウガ ライフ：13／手札：1／ゲージ：2／装備：『崩滅槍

天抉り』

第12話 耐え抜け！これがAの力だ！

「ドロー、チャージアンドドロー！《魔竜の眷属 ゴライオウ》を捨て、ゲージ+2！そして《ヴィー》の能力発動！」

「フン、自らのライフを削らなければまともに戦えんとはな」「世の中にはこう言う言葉がある。失う事を恐れるな。君に与えられるモノは、その代償より大きな力だ」

「《大器竜成》か」

へえ、流石ランギング1位。

割とコアなカードのフレーバーテキストを覚えてるなんてな。

「《センターにコール！《紅晶竜 カンパリー》》！」

センターに幾重もの魔法陣が現れ、それがグルグルと回転して一体のモンスターを召喚する。

紅と付く通り、紅い結晶で構成された竜。

そのフォルムは美しく、見る者を思わず感嘆させるような魅力を持つていた。

＝＝＝＝＝

『紅晶竜 カンパリー』

ワールド：スタードラゴンワールド

属性：【プリズムドラゴン】

サイズ：3

打：3／攻：80000／防：7000

コールコスト：ゲージ3を払う。

■このカードが登場した時、君のライフを+4！

■このカードが登場した時、君のライフが10以上なら、そのターン中このカードは2回攻撃を得る。

『美しい宝石の輝きは、見る者的心を癒す』

＝＝＝＝＝

ライフ+4され、16になる。

普通なら多いと思えるが……今回ばかりは、そうは思えない。なにせ、相手はあの荒神ロウガ。

1ターンで20ダメージを叩き出せる、バケモノ中のバケモノだ。これ以上のライフがあれば安心できる、というラインがない。

「アタックフェイズ。《カンパリー》で」

「クククツ、クハハハハツ！」

「……何笑ってるんだ」

「笑つてはいる、だと？これが笑わずにいられるか！今この瞬間、俺の勝利が決定づけられたのだからな！キヤスト！《暴君の束縛》！」瞬間、僕のセンター、レフト、ライトエリアにいくつもの鎖が現れた。

その鎖は僕のモンスター達を幾重にも縛り付け、身動きを取りなくする。

これは一体……。

「おおつとロウガ選手！ここで《暴君の束縛》を使つたアア！ゲージ1とライフ4を払う事で、相手の場のモンスターとアイテム全てを強制的に攻撃不可にさせる、超強力魔法です！」

「なつ？」

それじゃあ、これでアタックフェイズが強制終了した、つて事なのか……！？

ロウガのライフは9に減つているが、本来なら4にまで減少させていたはずなのに。

クソッ、まさかそんな隠し球を持つていたなんて……！
「他にする事はあるか？魔法の使えない貴様に」

「ぐつ……ターンエンドだ……！」

★悠斗 ライフ：16／手札：2／ゲージ：1／センター：《紅晶竜カンパリー》／ライト：《超越竜王 エーヴィヒカイト》／レフト：

《舎弟見習い ゴーゴー・剛》

「俺のターン！ドロー、チャージアンドドロー！キヤスト、《裂神呼法》！2ドローだ」

＝＝＝＝＝＝

《裂神呼法》

ワールド：デンジャーワールド

属性：「闘氣」「ドロー」

使用コスト：ゲージ1を払い、ライフ1を払う。

■ カード1枚を引く。さらに、君が《武器》を装備しているならカード1枚を引く。《裂神呼法》は1ターンに一回だけ使える。
『神に近づくために鍛えるのではない。神すらねじ伏せるために、己を鍛えるのだ』

＝＝＝＝＝

大丈夫、《ケルベロスA》の“ガルチャージ”はゲージが3も必要で、今のロウガのゲージは1だけだ。

最悪の事態だけは、起こらない。

が、限りなく最悪の事態というものは、割と起こり得るものらしい。《アーマナイト・リトルドレイク》をライトにコール！能力発動、手札を1枚捨てることでドロップゾーンの《アーマナイト・ケルベロスA》を《天抉り》のソウルに入れる！これで《天抉り》の打撃力は6だ！

「先程の打撃力10に比べると見劣りしますが、それでも2回攻撃により合計12を叩き出せます！止まらない！荒神ロウガ選手の猛攻が止まらないぞおお！」

＝＝＝＝＝

《アーマナイト・リトルドレイク》

ワールド：デンジャーワールド

属性：「アーマナイト」

サイズ：1

打：1／攻：4000／防：1000

■ このカードが登場した時、君の手札一枚を捨てて良い。捨てたら君のライフ+1し、君のドロップゾーンのカード1枚を君の場のカードのソウルに入れて良い。

『お前、オイラをバカにしたな！許さない！絶対に許さないぞ！』

＝＝＝＝＝

これでロウガの手札は0。

これ以上ソウルが増えないということだが……それでも十分だろ

う。

僕のライフを削り切るには。

『《天抉り》で《カンパリー》にアタックだ!』

「ぐつ……！ 破壊だ！」

「クハハツ！ ついに防御カードが尽きたか！ 貫通で6ダメージだ!!」

「ぐううつ！」

ライフが10に減少。

『2回攻撃！ 《リトルドレイク》も続け！』

「ライフだ……！」

これで、ライフは3。

あの時……イーター戦並みに、この状況はマズい。だがそれでも、可能性だけは捨てない。

それが、ファイターというものだ。

★ロウガ ライフ：9／手札：0／ゲージ：2／ライト：《アーマナイト・リトルドレイク》／装備：《崩滅槍 天抉り》

スタートフェイズを終え、メインフェイズ。

手札にチャージカードはなく、今のゲージは2。

これじゃあ、高火力のカードが来てもコストが払えない……！
いや、待てよ……まだ勝ち目はある……か？

「ヴィー、お前の出番は終わりって言つたらどうする？」

『フン、聞くまでもない。我的力不足ゆえ、マスターの役に立たなかつた。それだけのこと。さっさと我を破壊し、切り札を切るが良い』
「さつすが、僕のバディだよ！ 《エーヴィヒカイト》を破壊し！ センターにコール！ 《灼熱の鉄甲番長 デュエルイエーガー》！
デュエルイエーガー。

それは、エンシエントワールドに古より存在する海の番長。

そんなモンスターが今、センターに降臨する。

「さらに、ライトに《魔竜の眷属 デストラクタ》をコール！ ライフ2を払い、ツードローだ！」

「悠斗選手！ 手札は3枚に増えたがライフはどうとう1にまで減つてしまつた！ やけくそのように見えますが、その瞳は未だ闘志に燃え

ている！まだこのファイトを諦めていないようだああーー！」

「フン、無駄な事を」

「無駄な事かどうかは、確かめさせてやるよ……！『デュエルイエーガー』！ロウガにアタックだ！」

『デュエルイエーガー』の拳がロウガに直撃し、打撃力3が叩き込まれた。

これで、ロウガのライフは6となる。

さらに『ゴーゴー』と『デストラクタ』も続き、ライフは4へ。

「クハハハハッ！これだけか臥炎悠斗！まだ俺は生きているぞ！」

「そうです！ロウガ選手は未だピンピンしています！ですが、悠斗選手に攻撃できるモンスターはいません！さらにドラゴン・ツヴァイの特性上、必殺技を使う事が出来ない！これで終わりなのかー！？」

ハハ、見事なフラグ建築とお膳立てだなあ。

後パル子さん、僕は確かに必殺技はないけど、必殺モンスターはあるぞ。

まあ、必殺モンスターはまだ限られた人間しか認知していないから、知らないもの無理はないけど。

そして一番重要な事だが、僕はまだ、攻撃できるモンスターを残している。

『デュエルイエーガー』の能力発動！

「なにつ!?まだ何があるのか！」

「手札のサイズ3のモンスターを捨てることで、このモンスターは何回でも攻撃する事が出来る！」

瞬間、ステージ中から歓声と驚愕が入り混じったような、そんな声が響いた。

『デュエルイエーガー』！ロウガにアタックだ！

「クソオツ……！」

またも、『デュエルイエーガー』の拳がロウガに振り下ろされた。

これでロウガのライフは、僕と同じ1。

そして、僕の手札にはサイズ3のモンスターが後1枚残っている。もし防がれたらその瞬間、僕の敗北が決定するがその心配はいらな

い。

だつて、

「ロウガ、お前の手札は0枚だからな……『デュエルイエーガー』！止

めを刺せえええ——!!」

「覚えていろ……!!臥炎悠斗オオオ——!!」

ロウガのライフが0となり、バディファイト結界が解除される。

瞬間、『game end.

winner

臥炎悠斗』というホロ

グラムボイスと、煩いぐらいの大歓声が耳朶に触れた。

「臥炎悠斗選手！まさかまさかの大逆転！1ターンでライフ9を削り切り、ロウガ選手相手に勝利を収めましたああ!!」

はあ、疲れた。

ロウガとは久しぶりに戦つたけど、まさかここまで強くなっているとは。

少し間違えば、負けているのは僕の方だつた。

「悠斗せんばあああああい!!」

「おーーーう!!どうした!?牙王!!」

「アンタ、やつぱすげえや!!ファイトが楽しみだぜええ!!」

「僕もだよおおお!!……ゲホッ」

ロウガに勝った喜びからか、大声で叫んだせいで喉が痛い。

そして、UFOに乗ったパル子さんがマイクを僕に向けながら近づいてきた。

「ええつと、悠斗選手。牙王ちゃんとファイトするというのは?」

「ん? まんまだよ。僕とロウガ、勝った方が牙王とファイト出来るんだ」

「……えつと、マジ?」

「マジたけど」

瞬間、パル子さんはステージを飛び回り、僕とは比べ物にならない声量で叫び出した。

「ななななんとお! 中等部ランキング1位を下した悠斗選手が! 続けて牙王選手とファイトだああ!! ロウガ選手とは牙王選手とのファイトをかけて戦つていたそうです!!」

えええ……そんなに驚く事だろうか。
まあいい。

未門牙王、君が僕と兄さんに立ち向かえるかどうか……確かめさせ

てもらうぞ。

第13話 まだ勝負は終わつてねええええ！

「来たれドラゴン、舞えよ竜！ダークルミナイズ、ドラゴンズヴァーザイン！」

「爆発的ドラゴンデッキスペシャル！ルミナイズ！超爆ドラ！」

確かに、爆が作つたドラゴンデッキだから爆ドラだつたか。

そして超が付いているという事は、あの時よりも進化してると考えて良いだろう。

まず間違いなく……『ガルガンチュア・パニッシャー!!』は入つているはず。

「それでは、バディ～」

「「「ファイト!!」」

「オーブンザフラッグ！」

「ドラゴン・ツヴァイ」

「ドラゴンワールド！」

先行は僕からか。

じやあ……まずは小手調べだ。

「チャージアンドドロー。センターに『超武装騎竜 ガルガニックフェザー・ドラゴン』をコール！そのままアタックだ」

「ライフで受ける！」

牙王のライフが8となり、ターンエンド。

★悠斗 ライフ20／手札3／ゲージ：3／センター：『超武装騎竜 ガルガニックフェザー・ドラゴン』

「へへっ、行くぜ！ドロー、チャージアンドドロー！ライトに『ヴェノムハルパー・ドラゴン』、レフトに『迅雷騎士団副団長 ゴルディオン・ハルバード』をコール！」

「再び私をコールしてくれた事、感謝いたします。未門牙王

『ヴェノムハルパー』は深紅と銀の外皮に身を包み、身体中から刃が突出している四足歩行のドラゴンだ。

そして『ハルバード』は黄金と白銀の鎧を纏い、斬撃用の短槍を2本構えている。

まあ、短槍と言つてもそれは『ハルバード』にとつてで、人間にとつては十分長槍に分類されるが。

＝＝＝＝＝

『ヴェノムハルパー・ドラゴン』

ワールド：ドラゴンワールド

属性：「武装騎竜」「赤竜」

サイズ：1

打：2／攻：40000／防：1000

■このカードが相手にダメージを与えた時かモンスターを破壊した時、君のデッキの上から1枚をゲージに置く。

『斬撃と毒撃、お好みなのはどちらかね?』

＝＝＝＝＝

『迅雷騎士団副団長 ゴルディオン・ハルバード』

ワールド：ドラゴンワールド

属性：「武装騎竜」「赤竜」

サイズ：2

打：2／攻：60000／防：6000

コールコスト：ゲージ2を払う。

■このカードがセンターラインに移動した時、相手の場のモンスター1枚を破壊する。

能力：移動

『振るわれしは黄金の双牙——まさしく、疾風迅雷が如く』

＝＝＝＝＝

「そして装備、『鉄拳 ドラゴンナックル』！」

＝＝＝＝＝

『鉄拳 ドラゴンナックル』

ワールド：ドラゴンワールド

属性：「ドラゴン」「武器」

打：2／攻：4000

装備コスト：ライフ1を払う。

■このカードが相手にダメージを与えた時、君のデッキの上から1枚をゲージに置き、君のライフを+1する！

■“対抗”・ゲージ1を払つて良い。払つたらそのターン中、このカードの攻撃力+2000する！

『君の心が相棒と共ににある限り、鉄拳が錆びつく事はない』

＝＝＝＝＝

『ドラゴナツクル』か。

これまた割と厄介で、パックから出にくいカードを。

にしてもあの鉄拳、手の甲あたりに太陽のマークが刻まれているあたり牙王にピツタリだな。

「おおつと！早速きました牙王フォーメーション！牙王選手、初つ端から飛ばしてきましたー！」

牙王フォーメーション……？

それが何なのかわからぬが、今の牙王はそのフォーメーションが組まれているらしい。

『ハルバード』、『ガルガニツク』にアタックだ！』

手札に防御カードは無く、あつても使う価値はないので大人しく破壊される。

「俺と『ヴェノムハルパー』で悠斗先輩にアタック！」

『ライフだ』

これでライフが16となり、牙王のゲージが+2される。
ふむ……今の牙王が狙っている事が、なんとなく分かった。

「牙王、君はゲージを溜めて『ガルガンチュア・パニッシャー』を打とうとしてる。違うか？」

「おつ、大正解だぜ、先輩」

やつぱりか。

おそらく、『ガルガンチュア・パニッシャー』を打ちやすいように爆がゲージを溜めやすいデッキを構築したのだろう。

そのデッキビルドの手腕は、手放しで称賛できる。

デイザスターのデッキビルダー、グレムリンに勝るとも劣らないレベルだ。

★牙王 ライフ：8／手札：4／ゲージ：3／ライト：《ヴエノムハ

ルパー・ドラゴン》／レフト：《迅雷騎士団副団長 ゴルディオン・ハルバード》／装備：《鉄拳 ドラゴナツクル》

「僕のターン。ドロー、チャージアンドドロー。ライトにバディコール、《超越竜王 エーヴィヒカイト》。さらに手札から《幸いの竜フォーボルカ》を捨て、ゲージ+2。そしてライフ2を払い、《エーヴィヒカイト》の能力発動！」

デッキの上から3枚がオープンされる。

1枚目、《紅晶竜 カンパリー》。

2枚目、《超流星竜 ゼニスレイター》。

3枚目、《緑晶竜 シード・ルー》。

ここは《カンパリー》をコールしたいところだが、それは出来ない。なにせあの《ハルバード》の能力で、僕のモンスターは確定で一体破壊される。

破壊するモンスターはソウルガードがない奴を選ぶのが普通であり、つまり僕はソウルガードを持つモンスターを選ぶ必要がある。

そして、その条件をクリアするモンスターはこの中でただ一体、《シード・ルー》だけだ。

「センターにコール、《緑晶竜 シード・ルー》」

《シード・ルー》は、《カンパリー》と同じく「プリズムドラゴン」だ。

しかし、こちらはあのように見る者を感嘆させるような魅力はない。

それどころか、恐怖を覚える人もいるだろう。

＝＝＝＝＝

《緑晶竜 シード・ルー》

ワールド：スタードラゴンワールド

属性：「プリズムドラゴン」

サイズ：3

打：2／攻：80000／防：50000

コールコスト：ゲージ2を払い、君のデッキの上から1枚をソウルを入れる。

■このカードが破壊された時、君のライフを+1！

■このカードが攻撃した時、君のライフが7以上なら相手の場のモンスター1枚を破壊する。

能力：2回攻撃／ソウルガード

『自分がどんな過程を経て生まれたのか、我らにもわからないのだよ』
＝＝＝＝＝＝＝

「アタックフェイズ」

「《ハルバード》！センターに移動だ！そして能力発動、《シード・ルー》を破壊！」

「《シード・ルー》の能力発動、ライフ+1だ。そして、《シード・ルー》で《ハルバード》にアタック。さらに能力発動、《ヴェノムハルパー》を破壊」

これで《ハルバード》を破壊し、4点を叩き込む。

その予定だつたが、牙王は予想以上にやり手だつたらしい。

「キャスト！《ドラゴエナジー》！」

「おおつと出ました《ドラゴエナジー》！場の「武装騎竜」一体の攻防を+3000させる、圧倒的初見殺しのカードです！そして魔法が使えない悠斗選手！これを防ぐ手段はナッシング！」

「ハハ、やべー。やつたなあ」

これは、シンプルに僕のプレイミスだ。

《ヴィー》で攻撃していれば、まだ2回攻撃を持つ《シード・ルー》がいた。

2回攻撃を持つ《シード・ルー》を先に攻撃させてしまった、僕のミス。

いつもならサポート室から注意してくれるソフィアも、今だけはない。

「《ヴィー》で《ハルバード》にアタック。そのままターンエンドだ」

★悠斗 ライフ：17／手札：2／ゲージ：1／ライト：《超越竜王エーヴィヒカイト》

「俺のターン！ドロー、チャージアンドドロー！レフトに《ヴェノムハルパー・ドラゴン》をコール！さらにライトにバディコール！《ドラ

ムバンカー・ドラゴン》！」

「やつとオイラの出番だ！暴れるぜ牙王！」

「おう！《ドラム》、悠斗先輩にアタックだ！」

《ドラム》がいつぞやのようく武器を吹かし、僕に突っ込んでくる。

「突貫！ドリル・ラム・バンカー！」

「ぐつ……！」

これで、僕のライフは15に。

全部食らつたら9か……それは、ちょっとどころじゃなくマズいな。

「俺と《ドラム》、《ヴェノムハルパー》で連携攻撃！」

「全部ライフだ！」

《シード・ルー》があんなアツサリと破壊されたのが、ここにきて響いてる。

★牙王 ライフ：10／手札：2／ゲージ：5／ライト：《ドラム》／
ンカー・ドラゴン》／レフト：《ヴェノムハルパー・ドラゴン》／装備：
《鉄拳 ドラゴナックル》

僕のターン。

早速ライフ2を払い、デッキの上から3枚をオープンする。

「ライトに《神火の騎竜 ローメディウス》をコール。そしてセンターに《魔竜の眷属 デストラクタ》をコール。ライフ2を払い、ツードロー。さらに《魔竜の眷属 ゴライオウ》を捨て、ゲージ+2」

これで僕は手札、ゲージ共に3か。

「《ヴィー》で牙王にアタック」

「受けるぜ！」

「《ローメディウス》の2回攻撃！」

「それも受ける！」

「《デストラクタ》でアタックだ！」

「ぐつ……！」

これで、牙王のライフは3。

ドーン伯爵から口止めされているが……ここで使わなきゃ、僕は勝てない。

だから使う。

「ファイナルフェイズ！必殺コール！《ヴィー》をソウルに入れ、センターに《ドラムバンカー・ドラゴン ドリル・ラム・バスター・ブレイク》をコール！」

「なななんとお！悠斗選手、必殺モンスターなるものを使つてしましました！必殺技と思われますが、悠斗選手はモンスターしか使えません！という事は、あれはモンスターなのでしょうか!?ですが、あんなものは見た事がありません！」

必殺モンスターは、未だカードの量産化がされていない。

持つているのは、各ワールドの深部に潜つた極々少数だけ（まあ、この《ドラム》は別口だが）

パル子さんがこんな反応をするのも無理はない、か。

「いけ《ドラム》！牙王にアタックだ！」

牙王の《ドラム》より大きく、より鋭利なドラム・ラム・バンカーが稼働し出した。

辺りに心地の良い重低音を響かせ、赤い炎と白い煙が吹き出し始める。

そして、そのまま勢い良く牙王に向けて飛んで行く。

対抗が使えない牙王にドリルが突き刺さり、呆気なくライフを0にした。

「はあ……はあ……楽しかったよ、牙王」

ゲームエンドを告げるシステムアナウンスが鳴るのを待つていてと、別の音がどこから響き始めた。

ドクン……ドクンと、何かが脈動するような……そう、まるで心臓のような……。

「…………まだ……だ……」

その咳きは、牙王から漏れた。

反対側のファイタースペースに視線を向けると、《ドラム》の衝撃でうつ伏せの状態となつた牙王がいる。

この心臓のような鼓動は、牙王が出しているのか。

「まだ……終わつてねえ……」

そして、牙王は立ち上がる。

フラフラになりながらも、ゆっくりと、確実に。

そして見た。

牙王の心臓に重なるように、赤いオーラで出来た心臓があるのを。

「まだ勝負は、終わってねえええええええええええええ！」

あの魔法の名は、『ドラゴン・ハート』。

ライフが0になつた時、ライフ1として復活出来る魔法だ。

その魔法で、未門牙王は僕の猛攻から耐え抜いたのか。

「ハハ……見事だ、未門牙王。ターンエンド！」

第14話 必殺！ガルガンチュア・パニッシャー！！

「見事だ、未門牙王。ターンエンド」

★悠斗 ライフ：5／手札2／ゲージ：0／センター：『ドラムバン

カードラゴン ドリル・ラム・バスター』ブレイク』／レフト：『神火の

騎竜 ローメディウス』

僕の正真正銘の切り札、『ドラム バスター』ブレイク』は対抗無効だ。

しかし、その効果は『ドラム』とバトルしている間だけ発動するもの。

バトルした後に復活魔法である『ドラゴン・ハート』を使われても、どうしようもない。

しかし、しかしだ。

なぜ牙王は、手札に『ドラゴン・ハート』を持つていた？

あの魔法は、『必殺技で倒された時』という条件が付いている。

必殺モンスターも必殺技の枠組みに入っているので復活は可能だが、気になるのはそこではない。

僕のデッキは必殺技を入れる事が出来ないのだ。

牙王が必殺モンスターを知っていた可能性は、ほぼ0%。

ならばどうして……。

いや、これはただの言い訳だな。

大事なのは未門牙王が生き残った、この事実だけだ。

「すげえ……やっぱすげえよ悠斗先輩！アンタのファイト、すげえワクワクする！」

「そう……か？僕のファイトがワクワクする……？」

「ああ！まるでびっくり箱みてえだ！」

いやまあ、確かに僕のデッキは牙王にとつてびっくり箱みたいなものだろう。

なにせ、必殺モンスターを始め世間一般には認知されていないモンスターがデッキに入っているのだから。

何が来るかわからない、というのは割と恐怖だと思うけど……牙王

はそうではないらしい。

「いくぜ悠斗先輩！『ドラム』！センターをこじ開けろ！」

「任せろ！突貫！ドリル・ラム・バンカー！」

ドリルによつて『ドラム バスター』が破壊されるが、ソウルガードで復活。

『ドラム』は2回攻撃を待つて！もう一回『ドラム』にアタックだ！

「ええい、オイラと同じ名前でややこしいんだよ！くたばれえええ！」

そして『ドラム バスター』が破壊され、僕のセンターがガラ空きになつた。

『ドラゴナツクル』と『ヴエノムハルパー』、合わせて4ダメージ。

残りのライフは1で、なんとか耐えられた計算だけ……。

「ファイナルフェイズ！」

ハハ……そりや、そうなるよな。

瞬間、ファイティングステージの結界ギリギリに縮小された剣と、それに何十本も巻き付いた鎖が召喚された。

そして、どこからともなく現れた黒竜の腕が剣の柄を握り、強引に鎖を引き千切る。

露出した剣は、あの龍炎寺タスクの代名詞とも言えた必殺技で――。

「『ガルガンチュア・パニッシャー!!』」

それが、僕に向けて振り下ろされる。

炎に燃える視界の中、僕のライフが0になり、バディファイト結界が解除された。

そして、牙王がスポーツが終わつた時のように構えを取り、

「押忍！ありがとうございました！」

と言つた瞬間、またも大歓声が響き渡つた。

あーあ……ハハ、僕の負けか……。

「未門牙王！とても……とても楽しい勝負だつた！」

「ああ！俺も楽しかつたぜ！」

これでわかつた。

未門牙王、彼は……いや、彼らは十分臥炎キヨウヤの脅威になりうる。

それがわかつただけで、わざわざファイトを申し込んだ価値があつたというものだ。

「なあ！俺とダチになつてくれよ！」

「ダチ……？ああ、友達か」

友達……まあ良いか。

特に損があるわけでもないし、なつておいた方が気軽に交流出来るだろう。

「わかつた。僕で良ければ、牙王のダチにさせてくれ」

「ああ！もちろんだぜ！」

こうして、僕は牙王のダチになつた。



ファイターだけが通れる、ファイティングステージの外へ繋がる通路。

そこで悠斗は、

「くつそ……」

と悪態を吐き、壁を軽く殴つた。

その行為は、悔しさから。

ソフィアとは違い、圧倒的にメタられていたわけではない。だというのに、負けた。

それが、悠斗の心に不安と影を落とす。

『マスター……』

そんなバディを見て、エーヴィヒカイトも悔しさを覚えた。

自分がもつと強かつたならば。

自分がもつと強いモンスターを召喚できたならば。

そんな後悔が、思考を埋め尽くす。

「……なあヴィー、牙王つてファイトを始めてまだ一年も経つてないんだよな」

『確か、そのはずだ』

「ハハ、そんな奴に負けたのかあ。ソフィア以外に負けるつもりはない

かつたんだけどなあ……」

悠斗は、ずっと昔からバディファイトをやっている。

4年前からは、各ワールドを旅して数々の強力なモンスターをカーボ化して回り、確実に強くなっていた。

それが、死線も潜っていないような小学生に負けたのだ。

悔しくないわけがない。

「……多分、てか絶対、僕はこれ以上強くなるのは不可能だと思う」
『であろう、な……強いモンスターをデッキに加えたところで、それが戦力強化に直結するとは限らない』

「だから」

『ならば』

『これ以上強くなりたいなら、ヴィー^我が強くなるしかない』

それは、彼らが前々から思っていた事。

エーヴィヒカイトが強いと言われる理由は、その能力故だ。

ライフ2を払い、強力なモンスターをサイズ0としてコールする。

逆に言えば、そこしか強い箇所がない。

攻撃力も防御力も高いとは言えず、2回攻撃も貫通もなく、他に強力な能力などすらない。

もつと言うならば、ライフ2を払うという、ツヴァイでなければまともに扱えないデメリットがある時点で強いとは言えないだろう。
『私は強くなりたいし、可能性だつてあるだろう。だが、確実に強くなれるかはわからない』

「強くなれる可能性が低いとか、そんな事は言つてられない。強くならなきや、兄さんの計画は潰せないんだ。強くなるしかないんだよ」
まあ、その前にABCカップがあるけどな、と呟いて。

こうして一組のバディは、更なる強さを求めた。



「行くで、メグミ。随分とおもしろいモンが見れたわ」

メグミと共に悠斗対ロウガ、悠斗対牙王を観戦していたジンは、そう言つて立ち上がる。

いつものように、指で2つの賽子を弄りながら。

「ジン、貴方はどう思う？未門牙王のこと」

「まあ、悠斗に勝つとる時点で強いつちゅーのは明白や。やけどまあそこで一旦言葉を区切り、前髪で隠れているチユーナーの瞳を見据え、

「俺の敵やないで」

ケラケラと笑つた。

嘲笑するように、純真無垢に、見下したように笑う。

そして、メグミと共に誰に対してもない言葉を紡ぐ。

「だつて、悠斗は前より弱くなつとるからな^{なつてるからな}」

ジンはこれから展開を思い、顔を手で覆つて笑う。

こうして一組のファイターとチユーナーは、高みの見物と洒落込む事にした。

◆◇◆◇

「牙王のやつ、初っ端にしては使いこなせてるな」

「そうね。でも、負けてた可能性も十分あつたわよ？」

「わかってる。改善点はまだまだあるつて事だ。デツキビルダーの腕がなるぜ」

そう観客席で話すのは、牙王のデツキビルダーである大盛爆とそのライブラリー、宇木くぐるだ。

彼らは牙王のファイトを観戦し、デツキの改善点と悠斗の情報を集めていた。

その理由は、

「で、どうだくぐる。悠斗先輩の使うカード……特に必殺モンスターに心当たりはあるか？」

「いいえ、ないわ爆ちゃん。どのパックにも収録された事ないもの」「くぐるがそう言うならマジでそうなんだろうな。臥炎財閥の関係者だから、で済ませられるレベルを超えてる」

本来、モンスターをパックに収録して出すには様々な過程を経なければならない。

その中でも特に閑門なのは、バディ・ポリスへの申請だ。

モンスターをバディ・ポリスの研究施設に出し、生息地や成長過程、

体の構造などを解明され尽くしてから、やっとカード化の許可が出る。

そのため、今でもカード化されていないモンスターは多い。

爆とくぐるは、臥炎の力でそれらのモンスターを譲り受けたのかと思つたが、必殺モンスターを見てその認識を改める。

「必殺モンスターは、バディファイトの常識を覆すカードだ。いくら

臥炎財閥だろうと、手に入れるのは無理だろうな」

「つまり、違法モンスターかそれに準ずる何か、つて事でしょ？でも、もしそうだとそもそもこんな場所で使うかしら？」

「そこなんだよなあ」

違法モンスターは、バレた時点でバディポリスに捕まる。

だからこそ、こんな場所で使うとは思えないのが2人の共通認識だ。

「でも悠斗先輩のデッキ……ビルドしてみたいな」

「フフ、爆ちゃんはそればっかり。でも、確かに私も興味あるわ」

自分たちの力で、あのデッキをどこまで強くできるか。

こうして一組のデッキビルダーとライブラリーは、そんな思いから悠斗に近付く事にした。



「見たか猫シャツ！牙王兄ちゃんが勝った！」

「だから猫じやねえ！虎だ！」

席を立つて牙王を指差し、興奮したように叫ぶのは未門花子、牙王の妹だ。

そして、花子に負けず劣らずの声量で叫ぶのは虎堂ノボル、初等部ランキング2位のファイターである。

彼らも牙王のファイトを観戦、もとい応援するためにここにいた。

「これで牙王兄ちゃんは学園一位だー！」

「アホ！なんでそうなるんだよ！」

「え？ だつてそうでしょ？」

「はあ……確かに牙王はロウガ先輩を負かした悠斗先輩に勝つたけどな、だから最強ってわけじゃないんだよ」

ノボルは出来るだけわかりやすく説明するが、花子は頭上にハテナマークを3つほど浮かべた。

「小3にはわかりづらかつたか」と煽つてから、頬を膨らませている花子にさらに説明を重ねる。

「いいか？カードゲームつてのは少なからず運が絡んで来るんだよ。だから、たまたま勝つてもそれが運の産物なんてのはザラにある。つまり、牙王は運ゲー野郎つて事だ」

「むうう……！牙王兄ちゃんは運ゲー野郎なんかじやないもん！この猫シャツ！」

「だから！猫シャツじゃねえ！」

そんな仲の良さそうな2人に、周囲の人は頬を緩める。

そんな中、ノボルはふと思つた。

バディのいない自分は、牙王に勝てるのかと。

おそらく、勝てる可能性は限りなく低いだろう。

初等部2位という地位が、脅かされていく感覚。

なんとかしなければならないのに、何も出来ない無力感。

様々な思惑が交錯する中、ABCカップの開催がすぐそこまで迫っていた。

第15話！誕生！少年バディポリス！

「馬鹿者！なぜあんな場所で必殺モンスターを使つた！」

牙王に負けた翌日。

僕はバディポリスの高層階、食堂でそんなお叱りを受けていた。ドーン伯爵から。

「ま、まあまあドーン伯爵。そこまで混乱は広がっていないのだしど……」

「コマンダーI、確かに貴方の言いたいこともわかるが、それはそれです。あれの情報が研究班に漏れていたらどうなつていたか……」

研究班、聞いた事がある。

確かに、バディポリス直属でモンスターの解析、量産が目的の組織だつたか。

ドーン伯爵の話を聞く限り、必殺モンスターはバディポリスの全員が把握しているわけではないらしい。

「ともかく、必殺モンスターは迂闊に使うんじゃない。使わざるおえない状況があるとしても、我々の判断を仰ぐんだ」

「わかりましたー……」

判断を仰げ、か。

多分、僕はどんな状況でもそんな事はしないだろう。

頭が硬い大人に従つても、状況が更に悪化するだけなのだから。

龍炎寺タスクも、そう判断したから無断でフューチャーフォースを使つたのだろうし。

「ふう、この話はひとまずここまでだ。本題に入ろう」「本題？まだあるんですか？」

「まあそう言わないでくれ。コホン。ヤミゲドウ、というモンスターの封印が何者かに解かれた事は、君も知つているな？」「まあ、少しほ

確か、イーターの半身だつたか。

それが一体どうしたのだろう。

「奴は今でもどこかのワールドでモンスターを喰らい、力を取り戻し

ているだろう。そして、我々バディーポリスは一刻も早くヤミゲドウの居場所を特定し、速やかに殺す義務がある」「

イーター、そしてヤミゲドウ。

これらは、放つておいたら世界を喰らう。
それをドーン伯爵は阻止したいのだろうし、僕だつて世界が喰われるのを望んでない。

「今でもバディーポリス隊員による懸命な捜索が行われているが、この作戦は極秘だしある程度以上の戦闘力を持つ隊員も多くはない。そこでだ」

と、顎髭を弄つていたドーン伯爵はその手を僕の肩に置き、じつと目を見つめてきた。

なぜだろう、何か嫌な予感がする。

「臥炎悠斗くん、君に少年バディーポリスをやつて欲しい」

「は……はあああああ!?」

という叫び声は、僕とコマンダーIから漏れたものだ。

後、隣に座つているソフィアも目を見開いた。

ちなみに、イーターはソフィアの膝の上で食堂のパンを頬張つている。

おい、今お前の半身の話をしてるんだぞ。

「ド、ドーン伯爵?! いくらなんでもそれは……!」

「ふむ。我が輩は特に問題は無いと思います。彼は龍炎寺タスクに匹敵……いや、上回るほどの戦闘力があるのだし、臥炎財閥との縁も完全に切れている。しかも、強くなるために様々なワールドを巡つていった。これ以上の適任はいないでしよう」「いやいや、流石にそれは」

と、僕とコマンダーIが反論するが、

「君とソフィアくん、中学生のみの同居を許しているのは誰かね。そして、情報統制をしているのは? 強力なモンスターの情報を横流しているのは?」

「うぐつ……! それは……バディーポリス……です」

「そうだろうそうだろう」

と、ドーン伯爵は満足げに頷いた。

確かに僕は、バディポリスに様々な恩を貰っている。

そして、世の中はギブアンドテイク。

対価があるのは当たり前で、それが少年バディポリスになれ、という事か。

確かに、恩を着せられっぱなしというのも性に合わない。

「わかりました。なりますよ、少年バディポリスに」

「うむ、ありがとう。ああ、仕事と言つてもタスクくんのようクリミナルファイターは捕まえなくて良い」

「各ワールドを巡るついでに、ヤミゲドウを探せつて事ですか？」

「理解が速くて助かる」

まあ、そのくらいなら何の問題もないか。

その後もいくつか話を聞き、僕とソフィアはそのまま相棒学園に登校した。



「いいのですか、悠斗様」

相棒学園とバディポリス本部が近かつたため、徒歩で向かっている途中。

ソフィアがそう訊いてきた。

「少年バディポリスの事か？まあ、バディポリスにはいつか恩を返さなきやいけなかつたし、丁度良かつたと思うよ」

「その事もですが、もう一つの方です」

もう一つの事、というのはヤミゲドウ搜索の事だ。

「まあ、イーターと同等の存在を探すんだから自分の身は自分で守れるだろ。僕らはいつも通りにすれば良い」

ドーン伯爵の話では、各ワールドにバディポリス隊員がいるらしい。

特定のワールドを探索している時は、そのバディポリス隊員と一緒に活動して欲しいと言わされたのだ。

「ダ—。ですが部外者がいるというの……その……」

珍しいな、ソフィアがこんなに歯切れ悪いなんて。

「どうした？ソフィー——」

その理由を聞く前に、相棒学園からファイティングステージでよく聞くような大歓声が聞こえた。

そうか、今日はABCカップの開催日だつたか。

しつかしこれ、普通に近所迷惑だろ。

つて、僕も主催者側だから速く行かないと。

「すまんソフィア！また後で！」

「ダ——……」

落胆の声音で了承するソフィアに申し訳なく思いながらも、バディスキルを発動してすぐさま校庭に向かつた。

◆◇◆◇

校庭に着くと、既に初等部の予選が始まつていた。
お、牙王もいるな。

バディスキルを解除し、地上に降りる。

「お、やつと来たで。人を散々こき使つておいて、自分は遅刻なんてえらい余裕やなあ？」

「すまんすまん、ちよつと用事があつたんだよ」

こき使つたというのは、仕事の事である。

僕はジンに、警備員という仕事を任せたのだ。

警備員と言つても大したものではなく、せいぜいガズルをしたファイターの対処と暴力沙汰の仲裁。

生徒会のメンバーだけでは流石に無理という事で、金さえ払えばなんでもやつてくれるジンと他数名を雇つた、というわけだ。
「で、どこまで進んでる？」

「もう3人は決まつとる。んで、最後の1人を決めるファイトも今やつとるところや」

A B Cカップの本戦に出場できるのは、初等部と中等部それぞれ4人ずつだ。

エントリーハウスは3桁だったので、随分と早い展開だな。

「ファイナルフェイズ！キヤストオ!!」

あ、牙王が『ガルガンチュア・パニッシャー』で止めを刺した。

最後の1人は牙王だつたのか……まあ、予想はしていが。

にしても、前回も出場していた如月斬夜と虎堂ノボルは確定として、後1人は誰なんだ？

「ABCカップ初等部予選が終了！本戦に駒を進める4チームが出揃いました！」

瞬間、デカデカとしたプロジェクトショーマッピングがファイティングステージに重なるように現れた。

そこに映っているのは、お馴染み奈々菜パル子だ。
「では奈々菜パル子が、代表4チームに突撃インタビューを行います！」

そして映像が切り替わり、如月斬夜が映る。

が、パル子が話しかけた途端に眼鏡にヒビが入り、木の葉隠れの術でどこかへ消えてしまった。

……ああそうだった、あいつって確かに忍者の末裔だつたか。

しかし斬夜のパル子に対するあの怯え様……女性恐怖症か何かなのか？

「次よー！次ー！」

次に映つたのは……名前は忘れたが、魔王アスマダイのバディだつた。

有名なアスマダイのバディになつた奴がいる、つて事で一時期有名になつっていたつけ。

そしてパル子がマイクを近付けると、アスマダイのバディは頭に生えたバナナ……バナナ？のようなものを引き千切り、パル子に手渡していた。

……あいつの頭、二重の意味でどうなつてるんだよ。

「まだまだ！」

次に映つたのは、虎堂ノボルだ。

インタビューには無愛想に「どーセ運ゲー」と答えた。

……うん？あいつ、コアデッキケースを持つてないか？
へえ、バディが出来たんだな、面白い。

そして最後は牙王が映り、普通に受け答えをした。

これが初等部代表の4人……前回出場者がたつたの2人か。
これは面白いことになりそうだ。

『しかし、私は誰にも負けつもりはないぞ。マスターよ』
「もちろん僕もそうだよ。だから、精一杯頑張ろう』

優勝目指して、な。

第16話 共闘！少年バディポリス達の試練！

『では、ABCカップが終わるまではワールドに行く事はないのか』
「ええ、何か急ぎの用が出来ない限り。それとも何か依頼でもあるん
ですか？』

『……いや、今のところは特にない。いつも通り、学園生活を謳歌して
くれ』

はーい、と返事をしてから、通話を切る。

通話相手は、ドーン伯爵だ。

相棒学園に登校してゐる時にかけてくるから何用かと思つたけど、異
世界に行くか？なんて要件だつたとは。

いや、言葉に詰まつてたし、何かはあるのだろう。

ただ、伯爵は僕に『クリミナルファイターは捕まえなくて良い』
と言つたから、言い出せなかつただけか。

「どのような要件だつたのですか、悠斗様」

「いや、大した用事じやなかつたよ」

しつかし、最近は頭を悩ませる事が多くなつてきたな……。

兄さんの計画に、世界を喰らうヤミゲドウの存在、牙王をどのように
に仲間に引き入れるか、それに轟鬼ゲンマ……。

色々な事が、一気に起こりすぎだ……創作なら完全にイベント過多
だぞ。

「ん？」

心の中でそんな愚痴を溢しながら相棒学園に続くエスカレーター
を上り終えると、そこには意外な人物がいた。

青い制服に身を包んだ龍炎寺タスクと、同じく制服を着用したステ
ラ・ワトソンさん。

僕と同い年のタスクはともかく、23歳のステラさんがどうしてこ
こにいるんだ？

「おそらく、バディポリスの任務かと」

「……今、点と点が線で繋がつた。はあ、面倒くさいな……」

龍炎寺タスクは、バディポリスでも有数の実力者と聞く……リアル

ファイトの。

世界でも少ないフューチャーフォースの解放者なので当然と言えば当然で、そんな人物がわざわざこんな所にいるはずがない。

それはつまり、バディ・ポリスの依頼絡みのはずで、それならバディ・ポリス職員のステラさんと行動を共にしている理由も納得がいく。「どうする？ ソフィア。僕も一応少年バディ・ポリスだし、声かけた方が良いと思うか？」

「悠斗様の判断にお任せします……ですが、私は接近した方が良いかと」

「その心は」

「龍炎寺タスクと交流を持つのは、悠斗様にとつても損ではないはずです」

損ではない……か。

確かに、龍炎寺タスクは兄さんに対抗し得る人物だ。

出来れば仲間に引き込んでおきたいし、正義感の強い彼なら了承するだろう。

というわけで、

「やあ、龍炎寺タスク。初めまして、か」

「君は確か、臥炎悠斗……僕に何の用だ」

交流を持つために話しかけた。

が、どうにも機嫌が悪い……いや、焦っているのか？

「いや、手伝おうかと思つたんだ。何か依頼でも受けてるんだろう？」

「なつ……!? どうして君がそれを！ いや、それ以前に君に手伝つてもらうことなんてない。これは、僕たちバディ・ポリスの問題だ」

バディ・ポリスの問題……か。

なら、僕も関係あるな。

「クックツ」

「何を笑っているんだ」

「聞かされてないのか？ 僕も最近、少年バディ・ポリスに任命されたんだよ」

「なつ!？」

ふむ、少年バデイポリスという立場は色々面倒と思つたが、意外とそうでもないらしい。

いや、まだ恩恵しかないからそう思えてるだけで、いざれこのツケを払う時が来るだろう。

だが今だけは、この立場を利用させてもらおうか。

「本当なんですか？ステラさん。彼が少年バデイポリスになつてゐるなんて……」

「ええ、本当よ。だから、言つても問題ないとと思うわ」

ステラさんは僕が任命される瞬間は見てないはずだけど、コマンダーIか滝原さんにでも聞いたのだろう。

しかしこの人、本当になんで中学生の服なんて着てるんだろうか……。

サイズ的な限界というものがあるのだが……。

と、そこでタスクの視線がソフィアに向いているのに気付いた。

……ああ、ソフィアはバデイポリス関係者じやないから、離れて欲しいのか。

関係者以外の人を巻き込みたくないのだろう。

つづく责任感というか……守護欲求が強いというか。

「ソフィアも聞いて良いか？そこらのバデイポリスより強いし、口が固いぞ」

「私は悠斗様の助手のようなもの。悠斗様が口外しないなら、私もしない」

「そういうことなら……」と、タスクは渋々任務の概要を話してくれた。



さて、今日からABCカップの本戦が開始するとは言え、普通の授業をしないという訳ではない。

午前授業を終えてから、本戦が始まるのだ。

「で、タスクの言つてた事は本当なのか？」

『うむ、間違はないだろう。確かにこの学園内にモンスター反応が

ある』

タスクに与えられた任務。

それは、相棒学園に存在するらしいイリーガルモンスターの調査だ。

それ如きでタスクが出張ることもないと思うが。

『クック、マスターよ。タスクは役不足ではないぞ。むしろ、力不足なまである』

「強いのか、イリーガルモンスター」

『ああ、それも相当に』

ヴィーは未来のドラゴンワールド、スタードラゴンワールドが混じつたドラゴンロードだ。

だから、強者の気配を感じ取る事が出来る……らしい。
そんなヴィーが強いと断言するのだから、相當に強いのだろう。
だけど、イーターより強いのなんて早々いないだろうしなあ。
むしろ、いたら地球なんてとっくに滅びてる。

『探さなくて良いのか?』

「僕がわざわざ協力しなくても、タスクなら一人でやれる」

それに、保護したモンスターはバディポリスに預けられるので、そのモンスターが僕のデッキに合うかはその時に確かめれば良い。
にしても、理科の授業は暇だな……。

中学で習う化学反応式は既に暗記してるので、せいぜいが復習にしかならない。

『ぬ、見てみよ。件の少年がいるぞ』

「あ、ほんとだ。頑張つてゐるなあ」

窓から相棒学園の校庭を観察していると、タスクとステラさんがいた。

まだモンスターは見つけられていないらしい。

あれが僕と同い年、か……。

なんというか、生き急いでる感じがする。

『マスターによく似てゐるな』

「……はい? 僕が、タスクと?」

『ああ、我から見れば、マスターも十分生き急いでもるように見える』

生き急いでる、ね……。

他人から見れば、僕もタスクと同じなのか。

『……マスター、反応が強まつた』

「何? どこだ?」

『丁度、彼らのいる辺り——』

いつもより、ヴィーの念話が強張っている。

それに影響されて緊張を覚えた瞬間、背筋に言い難い悪寒が走った。

それも、どこか既視感のある悪寒が。

「ヴィー! ゲートを作れ! この距離なら外さないよな!」

『そんなへマをするはずがないだろう!』

席を立ち、勢い良く窓を開けた。

その突然の行為にクラスメイトの視線が集まるが、気にせずバディスキルを起動してその窓から飛び降りる。

そして誰かの悲鳴が聞こえた直後には、僕はヴィーのゲートで転移を終えていた。

タスクとソフィアさんの真上に。

「食らえッ……!!」

そして2人の側にいたイリーガルモンスター、三つ首の中心目掛けで双砲を放つ。

それは確かに直撃したが、特に効いている様子はない。

ああクソ、やっぱ硬いな……!

「悠人様っ……!」

デイザスター・フォースを発動させ、髪を伸ばしたソフィアも転移してバリアを張つた。

それのおかげで、三つ首が放つた電撃が無効化される。

「どうして君たちがここに!?」

「話は後だ龍炎寺タスク! 今はこいつをなんとかするぞ!」

「つ、わかつた! 行くよ! ジャック!」

なんとかする、とは言つても、僕たちがこいつ……アジ・ダハーカ

に出来ることなど限られている。

なるほど、タスクじゃ確かに力不足だな……！
かと言つて、僕も力不足だけど！

「ブレイドターミナイトオオ!!」

タスクのバディモンスター、ジャックナイフ・ドラゴンが頭部の刃で斬りかかるが、呆気なく弾かれる。

「タスク！ フューチャーフォースだ！ 使えるんだろ!?」

「ダメだ！ あの力の解放は禁止されてる！」

「はあ!? 今そんなこと言つてる場合じや——」

次の瞬間、アジ・ダハーカからの電撃がジャックに直撃した。
電撃はそのままジャックの体に纏わり付き、いつの間にか開いていたゲートに引き摺り込んでいく。

「ジャック！」

そしてゲートに呑まれたジャックを追うように、タスクもゲートに入る。

「ああクソ、マジかよ……！」

「ソフィア！ 僕もゲートに入る！」

「お待ち下さい！ 私も——」

ソフィアの言葉を最後まで聞く前に、閉じかけていたゲートにギリギリで侵入した。

瞬間、視界が暗転する。



「……う……」

あ、起きた。

転移した先で氣を失っていたタスクとジャックを揺すつていると、やつと目を覚ましたのだ。

「ジャック……ジャックは!?」

「私はここだ、タスク」

タスクがジャックの姿を認すると、長年の再開を喜ぶように抱きついた。

……こんな状況で思うことじやないと思うが、よくトゲだらけの

ジャックに抱き着けるな……。

ちなみに、エーヴィヒカイトは見るからに竜装機が痛うなので抱きついた事がない。

「……それで、ここはどこなんだ？」

やつと落ち着いてきたタスクが、周囲を見てそう呟く。

僕に向けたものではない、明らかな独り言だが、その答えを知っているので応えた。

「闘技場。正式名称は決められてないけど、そう呼ばれている」「闘技場……言われてみれば、確かにそんな構造だ。だけど、どうして君がそれを知っている？」

兄さんが見せてきたから、なんて馬鹿正直には言えない。
地球とドラゴンワールドの狭間にある空間、なんて言つても、さらには追求が激しくなるだけだから言いたくないなあ。

「……黙秘権を行使する」

「つ、今はそんな事を言つてる場合じやないんだぞ！ わかつてているのか！」

「わかつてるから落ち着け。僕たちの目的はこの闘技場から出る、だろ？」

僕もこんな場所にいたくないし、この事はアジ・ダハーカを通じて兄さんにも伝わっているはず。

「ここから出たいという目的は、龍炎寺タスクと一致する。

『だがマスターよ、ここが如何なる場所か、覚えているだろう？』

「ああ、もちろん。ここは闘技場。闘技場つていうのは——」

瞬間、僕の言葉を区切るように、闘技場に備え付けられた無数の扉が重苦しい重低音を響かせながら開いていく。

その中から現れるのは、様々なワールドのモンスター。

ぱっと見デンジャーワールドのモンスターが多いのは、彼らの本能が戦闘を望んでいる事に関係しているだろう。

『アーマナイト・ミノタウロス』や『甲殻竜 アルガラス』、『デスウェイザード・ドラゴン』に『スカイドラゴン ジャベロット』、ワールドなど関係ない、モンスターの展覧会。

その共通点はただ一つ、本能に刻まれた闘争心のみ。
ああそだ、闘技場というのは、

「命を賭けて、戦う場所」

彼らが望むのは、僕らの死。

自らの命をチップにかけ、僕たちを殺しにくる。

ならば、僕はそれに応えよう。

「デイザスターーフォース、発動」

ダークコアデッキケースが起動し、闇のオーラが噴出した。
髪が伸び、五感が冴え、万能感が全身を支配する。

「ほら、タスクも早く解放しろ。じゃないと死ぬぞ……ああ、一つ言つ
とくと、ここは地球じやない。だから、お前がフューチャーフォース
を解放しても、それがバディポリスに漏れる事はないぞ」
という助言を出すと、タスクは腰につけた黄色いコアデッキケース
を握りしめ、ジャックを見つめた。

「……ジャック、僕はここで死にたくないし、君をこんな所で死なせた
くない」

「ああ、私も同じ気持ちだ。君は、私の家族なのだから」

「ジャック……ありがとう！フューチャーフォース！強制解放！」

タスクのコアデッキケースが変質し、円形の浮遊機械、スター・パル
サーに姿を変える。

さらにはデイザスターーフォースを発動した時のように髪が伸びた。
髪が伸びるのは、デイザスターもフューチャーも変わらないのか。
「……臥炎悠斗、君がどうしてフューチャーフォースを知っているの
か、なぜ僕と同じ力を出せるのか、それはわからない」

フューチャーフォース。

この力は世界でも限りある人物しか使う事が出来ず、解放者はバ
ディポリスによつて情報が隠蔽されている。
タスクに漏らしたのは少し軽率だつたかもしれないが、いずれ教え
る予定だつたし。

「だけど、それでも君は中学生だ。僕とジャックの間に入つてくれ。
君は僕が守る」

「守る……ねえ」

タスクの言葉に従い、タスクのすぐ後ろに移動する。
それも、背中合わせで。

「タスク、お前が僕を守ろうとするのはバディポリスだからなんだろ
うけど……僕も、少年バディポリスだ」

「ああ、知つている」

「なら、僕だってお前を守つてやる。僕がお前を守つて、お前が僕を守
る。それなら良いだろ？」

タスクは少し迷うように言葉が出なかつたが、それでも頷いたのが
後ろからでもわかつた。

少しほは信用してくれた、つて事で良いのかね。

ひとまず、ヴィーとイーターをSD化を解いてコールする。
「行くよ、ジャック！」

「応！私たち家族は、絶対に負けない！」

「準備は良いよな、相棒」

『クック、誰に聞いている。私は時空をもエクシードする竜王。^超_越準備
など、元より完了している』

地球とドラゴンワールドの狭間の世界。

観戦客などいない闘技場で、命を賭けたリアルファイトがなんの合
図もなく始まつた。

第17話　闘技場にて

『エマージエンシー・イベイド』

ソフィアがキャストした魔法で、彼女に当たるはずだつた雷撃は完全に空を切る。

攻撃を無効化するジエネリックの魔法で、ソフィアは回避したのだ。

『ふむ、よく避けるものだ。未来でも見えているのか』
「見えてない。そこに来ることを知っているだけ」

未来を読む。

その能力を有す「天球竜」というモンスターは存在するが、世界でも数体しか確認されていないレアモンスターのためソフィアは見たこともない。

『クク、魔法か。人間も悪魔も、つくづく厄介なものを作るものだ』
厄介と言つておきながら、その雰囲気は余裕に溢れている。
世界を滅ぼせる終焉魔竜にとつて、魔法など小細工に過ぎない。
だからこそ、ソフィアと言葉を交わすのだ。
殺そうと思えば、いつでも殺せるから。

(このまま無策に戦つても無意味ね……。なら)

瞬間、ソフィアはアジ・ダハーカの前で足を止める。

そしてソフィアは、手に持つていたカードをコアガジェットに仕舞つた。

無抵抗を示し、アジ・ダハーカに対話の意思を伝えるために。
そして、

『……久しいな、ソフィア・サハロフ』

「はい、お久しぶりです」

アジ・ダハーカが会話に応じ、ひとまづの安全が確保された。

ソフィアはその事に胸を撫で下ろすが、幼少期より被つてきたボーカーフェイスという仮面でそれを悟らせないように努める。

『最後に見たのは貴様と悠斗がデイザスターから出て行つた、4年前か』

アジ・ダハーカは4年前を懐かしむような口調で言葉を紡ぐが、1万年以上を生きている彼にとつて、4年など人間にとつての1日とさほど変わらない。

だが、それを知る由もないソフイアは思考を加速させる。

「……なぜ、貴方が相棒学園にいるのですか」

『貴様に言う必要はない。だが、龍炎寺タスクに関係ある、とだけ言っておこう』

でしようね、と喉まで出かかった言葉を飲み込む。

ある程度の予想は付いていたし、ソフイアにとつてそれはあまり重要なことではない。

そう、彼女にとつて最優先なのは、

「悠斗様はどこ？」

自らが仕える、主人の所在と安否のみ。

それを聞いたアジ・ダハーカは、高らかに声を上げる。

ソフイアに聞こえるように、聞かせるために。

「早く答えて」

『クック、焦つて敬語が取れているぞ。まあいい、悠斗の所在だったな』

ソフイアはアジ・ダハーカが答える前に、懐に忍ばせているカードに触る。

触れているカードはスタードラゴンワールドの魔法、《サドゥン・ワームホール》で、すぐに悠斗のいる場所に飛ぶ氣だ。
(だけど)

ソフイアはアジ・ダハーカに悟られないように、未だ後ろで尻餅を突いているステラを見る。

彼女の瞳は未知への恐怖に染まつており、まともな行動が取れるとは思えない。

彼女を連れて行くか、否か。

デイザスターにいた頃ならば悩まない、悩む必要のない事でソフイアは悩んだ。

『闘技場、と言えばわかるだろう』

「闘技場……」

それは、かつてデイザスターに所属していた人間なら誰もが知る場所。

アジ・ダハーカと共に世界を壊す、そんなモンスターを選抜する施設。

並のモンスターならば相手にすらならない存在がごまんといる闘技場に、悠斗は飛ばされた。

だが、ソフィアに心配はない。

悠斗の強さを一番近くで見てきて、信頼してるから。

だが、それでも問題はある。

『サドゥン・ワームホール』では、闘技場に飛べないのだ。
『……元々、貴様に用事は無かつたがこの際だ。貴様に適性があるか、試そうではないか』

「適正……？ それは何——」

ソフィアが言葉を紡ぎ切る前に、それは突然発生した。

彼女の足元に巨大な虚が発生し、それに彼女は呑まれたのだ。

そして虚は消滅し、その場にはアジ・ダハーカとステラのみとなる。『適性があるかは、生命の危機に瀕さねばわからない……死ぬかもしれんが、それもそれで良いだろう』

悠斗がドラゴンフォースに選ばれるやも知れぬからな、とステラには理解できない単語を発して。

アジ・ダハーカはその場から姿を消す。

「……はつ！コ、コマンダーIに報告しないと——!!」

そしてその日、地球から二人の少年バデイポリスが姿を眩ませた。

◆◇◆◇

「はああ！『ドラゴン・ブレス』！」

『竜剣 ドラゴブレイブ』を装備したタスクが近くのモンスター、『激突竜 ガエルゴルガ』に斬りかかり、周囲のモンスターを魔法で怯ませる。

殺傷力はないが、それはあくまで威力を弱めているから。
(だが……)

タスクが真後ろに視線を移す。

そこにはバディスキルである二対の光砲を起動し、複数のモンスターをコールしている悠斗がいた。

タスクはフューチャーフォースに目覚めたばかりのため、まだジャックしかコールできないが悠斗は『エーヴィヒカイト』と『イーター』の他にもモンスターをコールしているあたり、練度はタスクより高い。

（敵ならすぐに殺されていただろうが、味方である今だけは心強い）
「ふうつ……！」

そんな悠斗はタスクに目もくれず、敵モンスターにだけ集中していた。

最大出力で撃たれた光の槍が、『スチールガントレット・ドラゴン』などを貫いていく。

バディである『エーヴィヒカイト』も、六つの光砲を遙か上空から放ちモンスターを撃ち抜く。

そして『イーター』は『インフェルノアーマー・ドラゴン』を両腕で掴み、頭を文字通り喰い千切った。

それにより血液が飛び散るが、彼らは関係ないとわんばかりに殺戮を繰り返す。

（確かにこのモンスターは僕たちの命を狙つてきてるが……そこまでするのか）

そんな光景に、タスクの背筋は凍りつく。

モンスターにも命があり、人間と同等以上の知能を有するモンスターだつている。

そんな存在をアツサリと、作業のように殺していく彼らが。タスクには、同じ人間だとは思えなかつた。

「しつかりしろ！ タスク！」

瞬間、タスク目掛けて放たれた矢をジャックが斬り払う。
後一瞬遅れていれば、タスクの命はなかつた。

「しつかりしろ！ 私が全力で君を守るが、それでも限界はある！」

「ごめんジャック！少し抜けてた！」

そしてタスクは《ブレイブ》を構える。

だが、

「……いけ、《黒眼魔竜 ブラゴ・ザ・バース》」

タスクにモンスターは殺せないと判断した悠斗は、また新たにモンスターをコールする。

タスクとジャックを援護させるために。

「タスク、お前が死ぬのは困る。ここから生きて帰ることが出来たら全部喋るから、頑張ってくれ」

「……正直、君に踊らされている感じは否めない。だけど、君の助力がないと生き残れないのも確かだ……頑張ろう、ジャック！」

「応！ブレイドターミネイトオオ!!」

それから、彼らは何時間も戦い続けた。

◆◇◆◇

「これでつ最後オツ！」

《ブルードラゴン サンダーホーン》を殺し、ついにモンスターの供給は止まつた。

だが、これでも全体から見れば数%にしか満たない。

長期戦を強いられれば、どうしようもなかつただろう。

ひとまずディザスター・フォースを解除し、息切れを起こしているタスクに近付いていく。

「大丈夫だよな。もし怪我しても、僕じゃどうしようもないぞ」「はあ、はあ……だい、丈夫だ。心配はいらない」

フューチャーフォースの解放に慣れていないのか、顔色が悪い。こればっかりは慣れの問題だ。

「じゃあ、地球に帰るぞ。行けるよな？ヴィー」

『問題ない。多少時間はかかるが、相棒学園に戻れるだろう』

エーヴィヒカイトは、空間転移を得意とするモンスター。

だから理論上、どんなワールドにも、どんな場所にも行くことが出来る。

まあ、座標合わせに時間は掛かるが。

「……すう、ふう……じゃあ、話してもらおう。ここは何なのか。なぜ君がここを知っているのか」

「ああ、うん、わかつた。話すよ」

本当ならもう少し期間を開ける予定だつたが、この際話すことにしてよう。

タスクが臥炎キヨウヤを敵対視してくれると良いが。

「じゃあまずは、ここの説明から。この場所の名前は」

『闘技場』

僕の言葉に重なるように、誰かの声が空間に響いた。

その声は聞き覚えがあるもので、だからこそ無意識のうちに顔をしかめる。

「……アジ・ダハーカ」

『久しいな、凶炎悠斗』

アジ・ダハーカ。

その存在を象徴する三ツ首が、闘技場の壁に現れた。

ディザスター・フォースを発動し、いつでもカードを使えるようにコアガジエットに触れる。

だが、アジ・ダハーカに攻撃する様子はなく、どうやら戦闘するつもりはないらしい。

『悠斗、貴様のせいで計画が狂つた。本来ならばタスク単体だというのに。これでは試せない』

『試す? フューチャー・フォースの事か?』

『否、フューチャー・フォースではない。別種の力の事だ』

別種の力?

僕はそんなもの知らないし、兄さんから聞かされてもいない。

だから、この四年で発見したものと考えるのが妥当だろう。

『そこで悠斗、私は貴様ごと試す。貴様に資格があるかどうか、な』

ああ、嫌だな、この感覚。

僕になくて相手にある、前提知識。

このえも言われぬ感覚は、嫌いだ。

だが、

「嫌だ。僕らは闘技場から出させてもらう」

『確かに、このままでエーヴィヒカイトの空間転移により貴様らはこの世界を出るだろう。それは我といえど、止められるものではない』

アジ・ダハーカは世界を滅ぼせるが、逆にいうとそれしか出来ない。だから空間転移さえしてしまえば、後は問題ないのだ。

まあ、するまでが問題なのだが。

『だが、人質がいれば話は別だろう』

「人質……だと？」

何故だろう。

なぜだかわからぬが、不思議と嫌な予感がする。

ピリ。ピリと神経が逆立ち、本能が聞いてはいけないと判断を下す。だが、理性がそれを抑え付けてアジ・ダハーカの言葉に耳を傾けた。『人質は、ソフイア・サハロフ。炎悠斗、貴様に求めるは一つ。我に資格を見せよ』

「だから……人質にしたのか」

『貴様にとつて、一番効果的だろう』

落ち着け、落ち着くんだ。

感情的になつてもどうしようもないのは、わかってる。

だから心を鎮めろ。

人質に取られたソフイアをどう救うか、それに思考を裂け。

『……どうすれば良い。どうすればソフイアを返してもらえる? いや違うな……どうすれば彼女を傷つけない?』

『クック、ソフイア・サハロフはこの空間のどこかにいる。探すが良い。私は邪魔しない。我は、な』

なるほど、言いたい事はわかつた。

ソフィアを救うまで、闘技場を出るなどいう事だ。

エーヴィヒカイトにゲートを閉じさせると、アジ・ダハーカは消えた。

だが、あいつは僕たちの事をちゃんと見ていてるだろう。相変わらず、趣味が悪い。

「……と、いうわけだ。タスク、お前は地球に帰つてくれ。これは僕の問題だ」

「いや、僕も手伝おう。君に借りつ放しというのは性に合わない。良いよね？ ジャック」

「ああ、私も問題ない」

人手が必要な今だけは、タスクの助けがありがたい。

ヴィーに空間転移を阻害する微弱な電波を発してもらひながら、僕らは闘技場に設置されている扉の一つを開いた。



「う…………あ」

100以上にも及ぶ闘技場の一つで、ソフィアは目覚めた。

意識が途切れるとディザスター・フォースは解除されるため、彼女の髪は縮み、側にはダークコア・デッキケースが置かれている。

「ここは…………闘技場」

すぐさま現在地を理解したソフィアは、ディザスター・フォース再度発動して周囲を警戒する。

自らを害そうとするモンスターを、いち早く感知するために。

そして、

「あら、やつと起きたの？」

ソフィアの真後ろに、モンスター反応があつた。

勢い良く振り返ると、そこには一体のSD化したモンスターがいて。

驚愕にボーカーフエイスを僅かに歪めると、

「私はスター・ヴィザード キヌース・アクシアよ。これからよ、ろ、し、く♪」

そう自己紹介したモンスターは、ソフィアの困惑に染まる瞳をじっと見つめた。

第18話 凸凹バディ結成！口ウガとの再会！

何故こうなつたのだろう。

ソフィアは心中で頭を抱えながら、そう思つた。

「ねえねえ、貴方つてバディがいないんでしよう？なら、私がバディになつてあげても良いわよ。この大魔術師、スター・ウイザードがね！」

早口で捲し立てるのは、スターウィザード キヌース・アクシア。マジックワールドとレジエンドワールドに所属する、魔術師だ。

ちなみに、男である。

女のような口調で話すが、れつきとした男である。

エンシエントワールドの「ドラゴンロード」のように、性別がないわけでもない。

「私にはちゃんとバディがいる。出てきなさい、『星神 アストライオス』

デイザスター・フォースを発動し続けているソフィアは、アクシアの煩い口を止めるためにバディモンスターをコールした。

太陽を模した円盤に人間の顔のパーツがあり、その周りを黄色い星々がグルグルと公転している。

まさしく、天体のように。

ソフィアの側で静かに浮かぶ『アストライオス』を見て、アクシアは、

「何よ、このだつさいモンスター！」

オブラーートなど殴り捨てて酷評した。

これには自らのバディモンスターにある程度の自信を持つていたソフィアも、僅かばかり眉が動く。

だが、アクシアはどこ吹く風でさらに辛辣な言葉を述べる。

「モチーフは良いと思うわ。天体、なんて口マンチック！でも顔よ。顔がダメね。だつて人間の顔なんて、ミスマッチにも程があるわ！」アストライオスはあくまで、デイザスター・フォースでバディにしているに過ぎない。

それに意思はなく、よつて肯定も否定も、まして感情など抱かない。

だからこそ、アクシアも容赦なく言葉を吐くのだ。

「そ、こ、で、提案があるの」

「結構よ」

「まだ何も言つてないでしょー!?」

「バディにしろ、でしょう。何回も聞いている」

これで累計、8回目。

ソフイアが闘技場に転移してから40分ほど経っているため、5分おきに言つてている計算だ。

流石のソフイアも、ため息の一つや二つ吐きたくなる。

「でも私、強いわよ」

これも8回目。

アクシアが口を開くと、結果的にバディ結成の話に収束する。だからソフイアはアクシアと離れたいのだが、

「……いるわ。この先……まあこの世界にハツキリとした距離なんて概念はないけれど、扉を超えた先に。数は一体ね」

離れられない理由がこれだ。

アクシアは魔術師、つまり魔術を研究している。

その魔術の名は、星占術。

流石のソフイアも詳細はわからないが、未来を占う術だと聞いている。それでアクシアは未来を知り、戦闘をなるべく回避出来ているのだ。

ちなみに、星占術にも欠点がある。

それは、現時点でもっと可能性が高い未来しか見る事が出来ないという事だ。

ソフイアとアクシアがこの闘技場で死ぬ未来、可能性はある。だが、その未来となる可能性は低いためアクシアは見れない。もちろん、これもソフイアは知らない事だ。

「一体なら、どうにでもなる」

「そうね。貴方が弱かつたらどうしようかと懸念したけど、心配要らなかつたもの。貴方は強い。それは私が保証するわ」

そしてソフィアは《ギュミルの杖》を構えながら、扉に手をかざす。

「準備は良い」

「……ああ、問い合わせ？ 私は良いわよ。というか、語尾に疑問符くらい付けなさい。わかりにくいわよ？」

さて、星占術の欠点は一つの未来しか見えないというものだが、もういくつかどうしようもない欠点がある。

一つは幾つもの下準備が必要で、今のアクシアには数分先の未来までしか見えないという事。

本来なら教会などの特殊な場所で行い、幾つもの触媒が必要なところを魔力だけで補っているのだから、それは致し方ない。

そしてもう一つが、

「つ！ 待つてソフィア！ 扉を開けないで！」

「え……？」

未来など、個々人の意思によつて簡単に書き換わる。

ソフィアが開いた扉から、一体のモンスターが勢い良く弾き出された。

『知識の盾 テトラピプリオン』！

咄嗟にソフィアが発動した魔法で、そのモンスターは彼女たちの眼前で止まつた。

だが《テトラピプリオン》にヒビが入つており、かなりの速度でぶつかつたというのがわかる。

『アーマナイト・バハムート』……どうしてここに……

デンジャーワールドのサイズ3モンスターは、死んでいた。

胴体に大きく抉られた穴を刻んで、死んでいた。

「何よ、これ……こんな、さつきは見えなかつたはずなのに……」

「アクシア、行きましょう。このモンスターを殺した奴をなんとかしないと、私たちも死ぬ」

何度も視線を潜り、慣れているソフィアが先導して《バハムート》がいた闘技場に入る。

別の闘技場より一回り大きいそこは、見渡す限りの地獄だつた。

地面に臓物が転がり、壁一面に血が付着し、凄まじい臭いを放つて

いる。

それが『バハムート』だけか、それとも『バハムート』を殺したものの血なのかは定かではないが、確かに血に濡れていた。

「フン、この程度か」

「そう言うな。キヨウヤの野郎は消費しても良いやつしか俺たちに回さねえ。所詮こんな程度だ」

そして、闘技場の中心で一人の人間とそのバディが佇んでいる。アクシアは誰かわからないが、ソフィアには心当たりがあった。というか、知り合いだ。

そしてその人間はソフィアの方に振り向き、血に濡れた顔でニヤリと笑った。

「ククク、クハハッ！ そうか、そういう事か！ 『バハムート』は前座、ソフィアが本命という事だな！ キヨウヤ！」

「荒神ロウガ……」

ソフィアが呟くと、血塗れの人物、ロウガは赤く染まつた顔面でさらによ角を上げる。

まるで、ケモノのように。

「では死合うぞ！ どちらかが果てるまで！」

「つ、うくつ……！」

赤き三叉、『崩滅槍 甘挟り』を装備したロウガが一瞬でソフィアの眼前に移動し、なぎ払う。

それを『ギュミルの杖』でガードするも、呆気なく吹き飛ばされ壁に激突した。

男女の力量差もあるが、ロウガは『ディザスター・フォース』を全て身体能力に回しているためにこれほどの力がある。

「ソ、ソフィア!? 大丈夫なの!? 生きてる!？」

「貴様はソフィアのバディか？ ならば喰らえ！ 『ケルベロス』！」

「ひっ！」

慌ててソフィアの元に駆けようとするとアクシアだが、『甘挟り』からケルベロスが現れて道を塞ぐ。

その圧倒的な威圧感にアクシアは尻餅を付くが、それも仕方ない事

だろう。

なにせアクシアは肉弾戦が苦手な魔術師、常に命を懸けて戦うケルベロスとは、生きてる世界が違うのだ。

だからこそ、

「ディザスター・フォース！」

ソフイアは守ると決意した。

咄嗟に張ったディザスター・フォースの幕に、ケルベロスの動きが止まる。

それも無理はない。

今ケルベロスがアクシアに爪を突き立てても、一切のダメージを負わないのだから。

「これは……バディ・ポリス結界か」

「ええ、バディファイトをしないと出られない結界。それを張った」

「フン、小賢しい」

本来、バディ・ポリス結界はソフイア一人では張ることができない。それを可能としたのは、バディ・ポリスから拝借した小型の機械によるもの。

本来なら宇宙に存在する衛星電波を受け取り結界を張る機械を、ディザスター・フォースで無理矢理稼働させたのだ。

「……結界を壊すのは容易い。だが、ファイトで決着を付けるというのも悪くない。やるぞ、ケルベロス」

「ああ！俺たちの新たな力、見せてやろうぜ……！」

ロウガはこの“余興”に付き合うと決め、黒い槍型のダークコアデッキケースを地面に突き刺す。

「エースの力がお前を碎く！ダークルミナイズ、エース・デフィート！」

バディは《アーマナイト・バスター・ケルベロス》A！

「夜空よ凍れ、歴史よ止まれ。ダークルミナイズ、冬のダイヤ。バディは——」

「私、《スターウィザード キヌース・アクシア》よ！」

結界がアクシアをバディとして認識したことにより、《アストライオス》はデッキに戻っていく。

ロウガは怪訝な顔をし、ソフィアも内心驚いた。

「なぜ」

「貴方、私のバーディは嫌なんですよ？なら、証明してあげるわ。私が使

える女だつて事をね」

「……好きにしなさい」

貴方は男でしよう、という言葉を飲み込み、ファイトが開始する。先行はソフィアからだ。

第19話 獣V.S星！新なる切り札！

「チャージアンドドロー。レフトに『幻星の巨神 アストライオス』をコール」

|||||||

『幻星の巨神 アストライオス』

ワールド：レジエンドワールド

属性：[星]「オリンピア」

サイズ：0

打：1／攻：20000／防：2000

■君のメインフェイズ開始時、君のレフトとライトに「星」がいるならカード一枚を引き、君のライフを+1！

『アストライオス。多くの謎に包まれた、星の男』

|||||||

背中に『星神 アストライオス』を提げた色白い男が、レフトエリアに現れた。

このモンスターも感性に合わなかつたのか、アクシアは若干顔を歪め引いている。

だが、ソフィアは無視。

すぐさま次のモンスターをコールする。

「ライトに『魔王の右腕 ソフィア』をコール」

|||||||

『魔王の右腕 ソフィア』

ワールド：レジエンドワールド／ダークネスドラゴンワールド

属性：[星]

サイズ：1

打：1／攻：40000／防：1000

コールコスト：ゲージ1を払う。

■君のレフトとライトの星は破壊されない。

■君のメインフェイズ開始時、君のレフトとライトに「星」がいて「星」が設置されているなら君のデッキの上から一枚をゲージに置き、

君のライフ+2！

＝＝＝＝＝

ソフィアが以前コールした《謎多き占い師 ソフィア》とは違う、別のモンスター。

しかし、その容姿は非常に似通っていた。

藍色の長いローブを纏い、《幻星の巨神》と同じくアストライオスを携え、あちこちから魔法陣を展開させている。

「センターアに《謎多き占い師 ソフィア》をコール。登場時、手札一枚を破棄してデッキから設置魔法一枚を手札に」

《魔王の右腕》、《謎多き占い師》、そしてファイターのソフィア。

そんな異常で奇怪な光景に、ロウガは嘲笑うように口角を上げた。
「クハハツ、ソフィアと呼べる存在が三人か。随分と気味の悪い光景だな」

「貴方には関係ない。それより、早く全身の血を拭いなさい」

「フン、ここは闘技場だ。そんな事、どうでも良いだろう」

「ええ。なら、私が三人いたところで貴方はどうでも良い。そうでしょう」

ソフィアが強気にそう言うと、ロウガは一瞬だけ目を見開いて再度笑い飛ばした。

まるで、予想外と言わんばかりに。

「ああそうだ。貴様が三人いようと、強弱以外に興味などない。さあ見せてみろ！ 貴様の強さを！」

「《謎多き占い師》でアタック。ターンエンド」

★ソフィア ライフ：10／手札：3／ゲージ：1／センター：《謎多き占い師 ソフィア》／ライト：《魔王の右腕 ソフィア》／《幻星の巨神 アストライオス》

「俺のターンだ。ドロー、チャージアンドドロー。装備！《崩滅槍 甘抜り》！」

ロウガ十八番のアイテムを装備し、センターエリアに降り立つ。

悠斗とファイトした時とは違い、ディザスター・フォースを発動しているため二刀流ならぬ二槍流である。

しかし、しかしだ。

バデイファイトで同じカードは4枚までしか入れることができない。

だというのに、サーチカードも無しにかなりの高確率でアイテムを装備できるというのは、少々理不尽なのではないか。

ソフイアは鉄仮面の下で、そう愚痴を漏らす。

「キャスト、『危竈同舟』。ドロップゾーンの『アーマナイト・データモン“A”』を『甘抉り』のソウルに入れ、ゲージ+1だ』
『A』属性のモンスターは、武器のソウルに入つて初めて真価を発揮できる。

そのため、本来は『竜王番長』デッキに入れてソウルを増やすだけの『危竈同舟』で、それ以上の恩恵を受けられるのだ。

「さらにキャスト、『武練鍛生』。ゲージ+2、さらにライフ+1だ。そして『甘抉り』の能力発動！ ゲージ+1し、このカードは二回攻撃を得る」

これでロウガのゲージは5。

ゲージを激しく消耗しやすい『デンジャーワールド』で、ここまで溜まるのは割と珍しい。

そもそもこれも、エースデフェイターに限りなくマッチした魔法カードのおかげである。

「出でよ！ 『アーマナイト・バスター・ケルベロス“A”』！ そして『魔装合体』

「ハッ！ 暴れるぞロウガア！」

＝＝＝＝＝

『アーマナイト・バスター・ケルベロス“A”』

ワールド：デンジャーワールド

属性：『アーマナイト』

サイズ：2

コールコスト：ゲージ1を払う。

“魔装合体”：場のこのカードを君の武器のソウルに入れて良い。

■このカードが君の武器のソウルにあるなら、その武器を打撃力+

1する。

■このカードがソウルにある武器のソウルが3枚以上あるなら、その武器は貫通を得る。

＝＝＝＝＝

ライフ5以下の制限を無くしたケルベロス。

地獄の番犬を視たソフィアは、そう評価を下した。

「ライトに《タイラント・ジン》をコール。そのまま《占い師》にアタックだ！」

《ジン》の拳で《謎多き占い師》が破壊され、センターがこじ開けられる。

それはつまり、打撃力3の《甘抉り》がソフィアに届くという事だ。

「喰らえ！《崩滅槍》甘抉り》イイ！」

「つくづく……！」

ロウガの二回攻撃により、ソフィアのライフが4にまで減少。

これで終わりと判断したが、まだロウガのターンは終わっていない。

「まだだ！《アーマナイト・デーモン》A』の能力発動、ゲージ1を払いスタンド！再び喰らえ、《甘抉り》！」

これで早くも、ソフィアのライフは1となつた。

明らかにピンチに、アクシアはハラハラとしている。
ソフィアはいつも通り無表情だが。

「ね、ねえ、大丈夫なの？ソフィア。勝てる？」

「そんなの、未来でも見れば良いでしょう」

「む、無理よ！可能性が多すぎわ！」

それは、占星術の制限。

ソフィアはそれについて尋ねようと口を開くが、

「フン、随分と余裕だな。ソフィア。まだ俺のターンは終わってないぞ」

「つ……!?」

それより早く、ロウガは残り一枚の手札を掲げる。

すると《甘抉り》がひとりでに上昇していき、それにゲージが3つ

吸収されて一本の巨大な槍を生み出した。

「ファイナルフェイズ！ キャスト！」

そしてロウガはその槍を掴み、腰を捻つて振りかぶると、

「《怒裏留バンカー！！》

ソフィアに向けて、勢い良く振り落とした。

それは一瞬でソフィアに直撃し闘技場を震撼させる。

血が混じった土煙が闘技場を包み込む中、ソフィアは、

「……キャスト、《エリネドの指輪》

静かに、防御魔法を使用していた。

ゲージ1を払い、ライフ+1して手札一枚を交換する。

なんとか、なんとか凌ぎ切つたが、ソフィアの表情は暗い。

（これでゲージは0……チャージカードが来ないと《凍てつく星辰》を設置できない）

《グレムリンの嘲笑》や《ホーリーグレイル》があれば、ソフィアは迷わずそちらを使つていただろう。

しかし、ソフィアの手元にあつたのはゲージを消費する《エリネドの指輪》のみ。

このままでは、《凍てつく星辰》を設置する事は不可能だ。

「ソフィア。なぜ貴様がここにいるのか、そんな事は今更どうでも良い。俺は貴様に頼みがある」

「貴方が頼み事……」

ソフィアはロウガの口から発されたとは思えない言葉に耳を疑いながらも、しかし耳を傾けた。

ソフィア本人にも、その理由はわからない。

「貴様がいるという事は、臥炎悠斗もこの闘技場にいるはずだ。もう一度、戦わせろ」

「……なぜ」

悠斗は今、別の闘技場でソフィアを探しているのだが、今この場にいる者でそれを知る人間はない。

悠斗はとつぐに闘技場を出ているとソフィアは思つており、だからこそその事を隠す。

「俺はあいつに敗北した。だからこそ、俺は勝たねばならん。友の力となるためにな」

言い切つてから、ロウガは余計な事を喋りすぎたと口を閉ざす。が、今の言葉だけでソフィアには十分だ。

（友は恐らくキヨウヤ様のこと……そしてキヨウヤ様のために勝つ。だから悠斗様に勝負を挑みたいのだろうけど……違う）

ソフィアの頭の隅で、気持ちの悪いものが自己主張する。ロウガの言葉には違和感が……正確には、矛盾のようなものがあると。

だが、それが明確な形を伴わない。

判断を下すには、材料が少なすぎるのだ。

「……貴方が悠斗様と戦いたいのは、よく分かつた」

それでも、ロウガは言つた。

悠斗に挑み、そして勝利を收めたいと。

なら、ソフィアがすべき事はただ一つ。

「なら、私に勝ちなさい。私如きに負ける存在に、悠斗様に挑む価値はない」

悠斗に危害が及ばないように、勝つ。

それが、悠斗の従者であるソフィアの役目。

「フン、ならば証明してやろう。俺は、貴様より強いという事をな」

ライフは2、手札は2枚、さらにゲージは0。

ソフィアの切り札、『凍てつく星辰』も『Re・リジエネイトワールド』も使えない。

それでも、ソフィアは勝つと決めたのだ。

「ドロー」

彼女のドローで、3ターン目が開始する。

第20話 相見えるは最恐の模倣兵器

「喰え、イーター」

僕の命令に応じて、イーターが六本の腕をそれぞれの方向に伸ばす。

そして無造作に闘技場のモンスターを掴み取り、まとめて口に運んだ。

様々なモンスターがイーターの口の中で混ざり合い、中々に不快な音を醸し出している。

グチャグチャ、ゴリゴリ、バキバキ、ブチブチ。

その中には、モンスターの悲鳴も混じっていた。

そしておそらく、イーターは味わっていない。

ただ、消化しやすくしているだけだ。

より素早く体内にエネルギーを蓄え、僕の支配から抜けるために。

「普通、意志やらなんやらも封印されるはずなんだけどな……ほんと規格外だよ、お前」

強制的にカード化したモンスターは、その力や特殊能力と共に思考能力すら封印する。

だが、イーターは違う。

SD化した分身を常に還元させ、さらには命令していないことをこなしたり、命令無視も珍しい事ではない。

まあ、世界を喰らつたモンスターの片割れなのだ。

それくらいは出来てもおかしくないだろうし、むしろ封印できている事 자체が奇跡だろう。

……一度、ドーン伯爵が言つていた淵上一族を訪ねてみるか？
ヤミゲドウを封印していた過去を持つらしいし、何かヒントになるかもしねれない。

「これがイーター……所有者は君だつたのか」「あれ、知つてたのか。イーターの存在」

残りのモンスターをイーターに任せ、タスクと他愛無い会話をする。

まあ、仲間に引き込んでおきたいからある程度までは情報を吐いても良いだろう。

もちろん、まだデイザスター関連は話せないが。

「ああ、コマンダーIから聞いていた。あくまで聞いていただけだけど……」

「ビビったか？これでも弱体化されてるんだぜ？」

「これでもか……ハハ、僕じやどうしようもないな」

と、自嘲するように、心の底から悔しそうにタスクは言う。だからだろうか。

無意識のうちに、ポツリと言葉が漏れた。

「ガルガンチュア・パニッシャー」

「え……？」

「……気づいてなさそうだから言わせてもらうが

言つたところで、特に問題ないだろう。

今は、タスクの手元はないのだし。

「ガルガンチュア・パニッシャー。あれならイーターも殺せるはずだ。今の弱体化してるとも、弱体化する前のも」

流石にイーターとヤミゲドウが融合した存在まで殺せるかはわからないが、まあレジエンドワールドで封印されていたイーターぐらいならなんどでもなるはずだ。

アジ・ダハーカはどうだろうか。弱らせたならワンチャン、と言つたところか。

「つまり、牙王くんがフューチャーフォースに目覚めたら……」

「間違いなく、僕が知る中で最強と成る」

これはあくまでもしもの話だが、いずれ現実に変わるだろう。

フューチャーフォースの存在を知る人は少なく、さらに研究までしている人間はそこまで多くない。

だがいくつか説が提唱されており、最も有力なのが『心に起因する』というものだ。

詳しい事は省くが、フューチャーフォースに覚醒する者は自らの中に確かな正義を持ち、そして力を望むらしい。

あくまで説なので信憑性のほどはわからないが、あながち間違つてもないと思つてゐる。

つまり、自らの中に確かな正義を持つ牙王はフューチャーフォースに覺醒する可能性がある、という事だ。

「ハハ……もしもの時、僕は守られるのか。年下の牙王くんに……」

ふむ、そんなに悲観する事だろうか。

僕なら、頼れる存在には全力で頼る。

それが一番安全で、一番確実だから。

というか、『ガルガンチュア・パニッシャー』を渡したのはお前だろうに……。

『マスターよ、戦闘が終わつたぞ』

「ん、わかつた。イーター！ 戻れ！」

イーターが描かれているカードにデイザスター・フォースを込め、無理矢理カードに戻す。

だが、それでもおたまじやくしのような分身は残つてしまふ。

厄災の種だが、今すぐ殺すわけにもいかない。

せめて、兄さんの計画を阻止してからでなければ。

「臥炎悠斗、君がソフィア・サハロフを探していて、君の方が闘技場に詳しいと理解した上で訊く」

「なんだ」

「このまま無鉄砲を探すのは効率が悪い。だから分散した方が良いだろう。君も早く見つけ出したいはずだ」

まあ、確かにタスクの言うことは一理以上のものがえる。

だが、この闘技場にはタスクより強いモンスターだつてごまんとおり、そんなのと遭遇したら目も当てられない。

タスクはフューチャーフォースに目覚めた人間で、唯一接点のある存在。

おちおちと死なせるわけにはいかない。

だからこそ、こちらにも考えがある。

「オーケーわかつた。ここからは分散でやるが、タスクには僕の指示に従つて貰いたい」

そこで言葉を区切り、ヴィーに念話を送る。

それを受け取ったヴィーは、空中に映像を映し出した。

スタドラの世界では初步的な技術で、プロジェクションマッピングと似たようなものだ。

そしてその映像には闘技場を簡略化した地図が表示されていて、僕らの現在位置なども事細かに見ることが出来る。

それを見たタスクは、呆れたように映像とジャックを見比べた。

「……ほんと、君のバディは多芸だな」

「タスク、いくら私でもこんな芸当は出来ないぞ」

「はは、わかつてると、ジャック」

そう言い合う二人に対し、僕は説明を開始する。



「タスクよ、なぜ臥炎悠斗に協力する？私にはその理由がわからない」

悠斗が説明を終え、扉から出て行つた矢先。

ジャックナイフ・ドラゴンが、バディであるタスクにそんな事を尋ねた。

タスクはその質問を予想していたようで、特に驚いた様子はない。「彼は、臥炎財閥の関係者だ。バディポリスが掴んでない情報も、彼ら知っている。僕はそれが知りたいんだ」

「だが、敵の可能性もある。それに、奴は平気で人もモンスターも殺せる人間だ。タスク、私はそんな者と関わりを持つて欲しくない」

タスクとジャックは、いわば子供と保護者のような関係だろう。

ジャックは、ただ単にタスクに危険な目に合つて欲しくないのだ。

タスクと平穏に、何事もなく過ごせれば良いと思っている。

だが、タスクは違う。

いや、正確にはそれとは別に望みがあるのだ。

その望みのせいで、彼は戦い続ける。

誰もが認める、大人となる為に。

「それでもウルフ……荒神ロウガを探るには彼と同じ力に目覚めてい

る臥炎悠斗に訊くのが一番なんだ。頼む。納得してくれ、ジャック」

「……ああ、わかつた」

ジャックは納得いかなそうだが、タスクが言つても聞かないことは理解しているため形だけは理解を示しておく。

まあ、全てタスクに簡抜けだが。

『表面上だけでも理解を示してくれた事、感謝する。マスターも、其方たちには信頼を置いて欲しいと思つていいのだ』

瞬間、タスクの側にいたエーヴィヒカイトが口を開く。

今回、悠斗は万が一を考慮してエーヴィヒカイトをタスクにつかせた。

これが一番アンパイな策だと、悠斗はそう考えている。

「私たちも、別にあの少年を疑つてはいるわけではない。私たちが悠斗少年の敵ならば、とつくな殺されているだろうからな」

「だけど、彼は僕たちの味方でもない」

『ふむ……あながち間違いでもない、か』

エーヴィヒカイトは悠斗の目的、『龍炎寺タスクを仲間にする』を話そうか悩んだが、結局口を開ざした。

まだ早いと、そう判断を下して。

「じゃあ行こうか、ジャック。早くソフィア・サハロフを見つけ出そう」

「応、こここの地図は頭に入つていて、タスク」

そして、タスクは一枚の扉に手をかけた。

サイズに比べて非常にスマートに動く扉を潜り、また新たな闘技場に足を踏み入れる。

しかし、そこは今までのようになんスターはいなかつた。

血眼になつて、死に物狂いでタスクたちを殺しにきていた、モンスターがどこにもいない。

その事にタスクが違和感を覚える前に、エーヴィヒカイトは確信する。

配置場所が変わつていて、と。

しかし、それも無理はない。

何せ、悠斗がデイザスターを辞めたのは四年前の大災害の直後。四年も経つていれば、闘技場の配置だつて変わつていて当然だ。

そして問題なのは、今までの雑魚モンスターに代わり、何が配置されたのか。

エーヴィヒカイトが高速演算でそれを算出する前に、闘技場の主がその姿を現した。

奇怪なモンスターに、

「つ！『ドラゴニックシユート』！」

明確な殺意を乗せて。

タスクの顔面を狙つて、どこからか水晶突起を備えた触手が高速で迫つた。

しかしタスクが放つた魔法により軌道がズレ、水晶の触手は地面に突き刺さる。

各々が各々で警戒を強める中、触手の主が地面から生えた。

「なんだ……」のモンスターは……

「おかしいぞ、タスク。このモンスター、まるで生命力を感じられない。限りなく無機物に近い」

『ふむ、無機物のモンスターはいるにはいるが……これは、それらのどちらとも違うらしいな。それらより遙かに気味が悪い』

ソレは、全身が水晶のような青と紫色の鉱物で構成されたモンスターだった。

ソレは、全身から不規則に触手を生やしていた。

意思を感じられないソレは、しかし確かな殺意をもつてタスクを攻撃した。

「ふむ、攻撃速度は上々。ちゃんと急所も狙えてますね」

そして、ソレの背後から一人の人間が現れる。

いや、違う。

正確には、ソレから生えてくる触手のように、赤髪の男は出てきたのだ。

「……お前は誰だ。臥炎悠斗の仲間か」

タスクが『竜剣 ドラゴブレイブ』を構えながら、悠斗と話すときよりドスのきいた声で問いかける。

しかしそれに対し、赤髪の男は口に指を当て、『黙れ』とジエス

チャードした。

「私には時間がありません。よつて、君の質問に答える気はありません。ですので、貴方に必要な情報を簡潔にお話ししましょう」

そして、赤髪の男は指を一本立てる。

「その一、私は貴方とファイトしに来ました。ちなみに、拒否権はありません」

二本目。

「その二、君が勝てば、ソフィア・サハロフの居場所をお伝えしますよう」

三本目。

「その三、私が勝てば、貴方のバディ、ジャックナイフの遺伝子情報を頂きます。これが貴方に必要な情報の全て。ああそれと、私は悠斗くんの元仲間です」

たつた三つ。

たつた三つだというのに、タスクの中では膨大な数の疑問が浮かび上がった。

自分とファイトする意味とはなんなのか、お前はアジ・ダハーカの関係者なのか、なぜジャックの遺伝子情報を必要とするのか、臥炎悠斗の元仲間とはどういう事なのか、どういう組織の仲間だったのか。「……ハア、時間が惜しい。先にルミナイスしておきましょう。括目して見よ。これが新時代の：革新的バディファイトだ。ダークルミナイズ、イノベーション・オブ・ゼータ」

赤髪の男はタスクがルミナイズすると確信しているのか、いち早く準備を終えた。

しかし、タスクの脳内では戦うメリットとデメリットが天秤に乗せられ……デメリットの方が圧倒的に重く、このファイトを受けないつもりでいる。

その際は謎のモンスターがタスクを狙うかもしれないが、そういう時のために【エーヴィヒカイト】がいるのだ。

「受け——」

受けない、と宣言しようとタスクの声を抑え、ジャックが咆哮

する。

思わず、赤髪の男ですら耳を覆うほどの声量で。

「ジャ、ジャック……？」

「タスク、恐れるな。たとえ何があろうと私がついている。敗北など考えるな。君はただ、前を見て走れば良い」

「……でも、でも僕は！怖い！ジャックを失うのが怖いんだよ！」

「狼狽えるなタスク！君は大人になるんだろう！モンスターである私すら守れる、立派な大人になりたいのだろう！」

その言葉に、最愛の家族であるジャックの言葉に、タスクはハツとした。

そして数秒の時を置いて両手で頬を叩き、深く深呼吸をする。

赤髪の男を見据えるその目に、最早怯えはない。

後は、最善を尽くすのみ。

「…… 集え、未来を切り開く竜の軍団！・ドラゴニック・クロニクル！ルミナイズ！」

「オーブン・ザ・フラッグ」

「ドラゴンワールド！バディはジャックナイフ・ドラゴン！」

「ヒーローワールド。長い無駄話は終わりですか」

「ああ、おかげさまでね。わざわざ待つてくれたのには驚いたよ」

「私は最高のパフォーマンスでファイトをしてもらいたい。1分ほどなら待ちますよ」

そこで赤髪の男が言葉を区切り、

「私のバディは『複製模倣兵器 ジエムクローン』。そして私の名前はJ・ジエネシスです。さあ、ファイトを始めましょう」

タスクの先行で、ファイトが開始した。

第21話 刮目せよ！必殺技のオンパレード！

「僕の先行だ。チャージアンドドロー！」

タスクのデッキは典型的な『武装騎竜』にジャックを混ぜたデッキだ。

しかし、『ガルガンチュア・パニッシャー!!』を牙王に譲渡したため彼のデッキは僅かに変更されている。

チャージカード……『ジャックナイフ・チャージ』や登場するだけでゲージを+2出来るカード、『ジャックナイフ』バーンエナジー』を減らし、攻撃カードを増やしているのだ。

だが、

（このデッキはまだチューニングをしていない……いや、大丈夫。扱いこなしてみせる！）

どのデッキにも微調整、チューニングというものは必要だ。

そうすれば必要なカードと不必要的カードを選別でき、簡潔に言えばより強くなれる。

タスクほどの実力を持つファイターならチューナーがいるのが普通なのだが、彼は雇わない。

「キヤスト、『ジャックナイフ・ジョイント』。手札のジャックナイフと名の付くモンスター一枚を捨て、ライフ+1してツードロー」

＝＝＝＝＝

『ジャックナイフ・ジョイント』

ワールド・ドラゴンワールド

属性：「緑竜」「ドロー」

コスト：手札のカード名にジャックナイフを含むモンスター1枚を捨てる。

■君のライフ+1して、カード二枚引く。

『2人で分かれ合えば、痛みは半分、恩恵は2倍だ』

＝＝＝＝＝

捨てたカードは『ジャックナイフ　　ゲヴァルト』』。

効果で破壊されないという効果を持つカードで、今はさほど必要の

ないもの。

しかし、タスクには《ゲヴァルト》を捨てる気などない。

「ライフ1とゲージ1を払い、センターに《サークルナイフドラゴン》をコール！登場時、ドロップゾーンの《ゲヴァルト》を手札に戻す！」

「ああ、なるほど」

タスクのそのプレイイングに、ジエネシスは納得がいった。

恐らく、タスクは初手の手札に《ジャックナイフ・ドラゴン》がなかつたのだろう。

そして、ドラゴニック・クロニクルは起点となるジャックがいてこそ初めて機能するデッキ。

そのため容赦なく《ゲヴァルト》を捨て、しかしすぐに手札に戻した。

その行為が意味するものは、

「レフトに《ブツシユナイフ・ドラゴン》をコールし、そしてバディコール！《サークルナイフドラゴン》を押し出して、《ジャック》をライトに！」

「ウオオオオオオオ!!」

『ジャックナイフ・ジョイント』で、《ジャックナイフ・ドラゴン》が手札に回ってきたという事だ。

＝＝＝＝＝

《ブツシユナイフ・ドラゴン》

ワールド：ドラゴンワールド

属性：【緑竜】「武装騎竜」

サイズ：1

打：2／攻：20000／防：2000

■君がカード名にジャックナイフを含むモンスターを手札からコールする場合、コールコストに書かれているゲージを払わなくて良い。

＝＝＝＝＝

《ジャックナイフ・ドラゴン》

ワールド：ドラゴンワールド

属性：「緑竜」「武装騎竜」

サイズ：2

打：3／攻：50000／防：60000

コールコスト：ゲージ1を払う。

【起動】：ゲージ2を払つて良い。払つたら、君のデッキからカード名にジャックナイフを含むモンスターをこのカードの上に重ねてコールし、デッキをシャツフルする。

＝＝＝＝＝

「さらに、『ジャック』の上に『ゲヴァルト』を重ねる！そのままアタックだ！」

「キヤスト、『本気で来いよ！』。攻撃を無効化してライフ+1です」「ぐつ、ターンエンドだ」

『ゲヴァルト』の打撃力は破格の4。

決まれば一気に試合が傾くその攻撃は、アッサリと防がれてしまつた。

（だけど、まだ予想の範囲内だ）

★タスク ライフ11／手札3／ゲージ2／ライト：『ジャックナイフ』／ゲヴァルト』／レフト：『ブツシユナイフ・ドラゴン』
「ドロー、チャージアンドドロー。キヤスト、『ヒーローエナジー』。そして……ファイナルフェイズ」

「なつ……に!?」

メインフェイズ、さらにアタックフェイズを、『ヒーローエナジー』を使用するだけで終わらせた。

そんな馬鹿な、とタスクは心の中で叫ぶ。

バディファイトは、モンスターやアイテムを装備しなければ始まらない。

手札事故とも考えられたが、タスクはすぐさまその考えを放棄する。

なにせ、目の前で悠々とした笑みを浮かべているジエネシスに焦つた様子がないのだから。

そして、

「——必殺変身」

その予想は的中している。

ジエネシスが掲げたカードが白く光り、彼の体に変化をもたらす。黒と黄色を基調とした『ダークヒーロー』のような鎧を纏い、紅き翼を生やしたそのモンスター。

それは周囲に炎、風、土、水のエレメントを浮かべながら、ジエネシスに装備……いや、必殺変身された。

＝＝＝＝＝

《フォースエレメントマスター ゼータ》

ワールド：ヒーローウールド

属性：「ダークヒーロー」「火」「土」「風」「水」

サイズ：3

打：2／攻：8000／防：4000

コールコスト：ゲージ3を払う。

■君がこのカードに変身しているなら、場のこのカードと必殺モンスターは破壊されず、手札に戻せない。さらに、君は必殺モンスター以外のモンスターをコール出来ず、1ターンに何回でも必殺モンスターをコール出来る！

■このカードが攻撃した時、君のドロップゾーンの「火」と「水」と「土」と「風」一枚ずつを君のデッキの下に好きな順番で置いて良い。置いたら、相手にダメージ3！

必殺変身：ゲージ2を払う。

『悪いがこれで幕引きだ。戦う時間すら惜しいのでな』

＝＝＝＝＝

必殺モンスター。

それは、悠斗を通してタスクも知っていた。

しかし、それをまさかジエネシスが使うとは思っていなかつたためしばらく放心してしまう。

『ククク、随分と気味の悪いものを作ったな。ジエネシスよ』

そんな中、エーヴィヒカイトがジエネシスに向けてそう言葉をかけ

る。

悠斗以外には感じるのが不可能なほどの、その瞳に薄い殺意を込めて。

「ええ、これこそが私の傑作の一つ、ゼータシリーズです。まあ、これを作るのは随分と骨が折れましたが」

『大した執念と狂気だ。まあ、狂つているからこそ貴様がここにいるのだろうが』

必殺モンスターを作るには、それこそ何十年という年月が必要となる。

いやそもそも、必殺モンスターは作れるようなものではないのだ。アジ・ダハーカと対等な赤き太陽神でやつと作ることが出来るほど、高次元な存在。

現在各ワールドの深部に位置する必殺モンスターは、ただ一つの例外なく赤き太陽神の欠片を飲み込んだモンスター。

それを人工的に作つたジエネシスは間違いなく狂つており、下手したら臥炎キヨウヤ以上の——

「必殺」「『必殺』」「『必殺』」をライトに

エーヴィヒカイトの思考を中断するように、ジエネシスのライトエリアに必殺モンスターの証が空中に刻まれる。

そこから風のエレメンタルを持つ必殺モンスターが現れた。

＝＝＝＝＝

《風鬼 アウラー》

ワールド：ヒーローワールド

属性：[風] [ダークヒーロー]

サイズ：1

■ “鬼童の策略”：このカードが攻撃した時、君の手札2枚までを捨てて良い。捨てたら、捨てた枚数分カードを引く。“鬼童の策略”は1ターンに一回だけ使える。

『それは、エレメンタルが意志を持たされた存在。されど、その性質は精霊とは違う』

＝＝＝＝＝

『アウラ一』、『ブツシユナイフ・ドラゴン』にアタックです。能力発動、手札2枚を捨て、ツードロー。そして、私で貴方にアタックだ」「くつ……！」

これでタスクのライフは9となつて攻撃は終わる——という常識は、必殺モンスターには通じない。

なにせこれはアタックフェイズではなく、ファイナルフェイズなのだから。

「必殺コール、『水炎鬼 ヒュドピュール』をレフトに」

レフトエリアに再度必殺モンスターの印が刻まれ、そこから一体のモンスターが現れる。

体の右半分が炎、左半分が水で構成されたその必殺モンスター。それは現れると同時に、——ジャックを破壊した。

「なつ……!?」

唐突な出来事に、タスクとジャックの口からそんな声が漏れる。

それは『ゲヴァルト』の能力、『効果で破壊されない』が発動されなかつたのかと困惑したため。

しかし、すぐにそうではないと察する。

『ヒュドピュール』はジャックを破壊したのではなく、ソウルを抜いたのだ。

「効果で破壊されない、という能力を持つモンスターはごまんとあります、ソウルを捨てられないという能力を持つモンスターはさほどいません。意外と盲点ですが、ソウルを起点とするデッキには刺さるものです。貴方のように、ね」

「……ああ、どうやらそのようだ。僕はお前と、あまり相性は良くないらしい」

ジャックは、ソウルを増やしてこそ真価を發揮する。

そのため、ジエネシスとの相性はさして良くないとタスクは判断したのだ。

ちなみに、『ヒュドピュール』の正確な能力は『相手の場のモンスター1枚のソウル1枚をドロップゾーンに置き、そのカードを破壊する』というものなので、『ゲヴァルト』でなければジャックは完全破壊

されていた。

「《ヒュドピユール》、タスクにアタックです。そのままターンエンド」
★ジエネシス ライフ：10／手札：2／ゲージ：4／ライト：《風鬼 アウラー》／レフト：《水炎鬼 ヒュドピユール》／変身：《フォースエレメントマスター ゼータ》

「僕のターンだ。ドロー、チャージアンド……ドロー！」

タスクの手札は4枚と、ドローカードに乏しいドラゴンワールドでは心許ない。

特にタスクのデッキは多く手札とゲージを消耗するタイプのため、早めにケリを付けなければ勝ち目はどんどん小さくなっていく。

それに、

(ジエネシスはまだ、切り札を切つていない)

それは、《ゼータ》に変身したジエネシスの側で浮遊している《ジエムクローン》が切り札だと半端確信してこそその予想。

タスクは《ジエムクローン》がどんなモンスターなのか、どんな能力を有すかを知らない。

(けれど、僕のデッキはあまりにも知られてしまっている。少し検索エンジンを使うだけで筒抜けになつてしまふほどに)

ましてや、今のタスクは《ガルガンチュア・パニッシャー!!》を牙王に譲渡してしまっている。

その状態でジエネシスに勝てるかどうかは怪しい。

だから、

「装備！」

タスクは牙王とのファイトですら使わなかつたアイテムを装備した。

瞬間、光に包まれるタスクの右手を見て、ジエネシスは顔を歪める。まだ切り札を残していたことへの驚きと、それを見れることへの歓喜に。

「さあ、見せてください！龍炎寺タスク、貴方の力の全てを……！」

そして、光はタスクの右手に収束する。

黒光りする握りと柄に、海賊を連想するカツトラスのように歪曲し

た刀身。

タスクはその切っ尖をジエネシスに向け、アイテムの名を宣言する。

「『超竜剣 ジヤックナイフ・グローリア』。僕はこれで、お前を倒す

ジヤックナイフ一族のグローリア。

それはタスクの刃となり、未知なる敵を斬り裂かんと刀身を光らせた。

第22話 魂を一つに！『ドラゴニツク・パニツシヤー!!』

『ジャックナイフ・ドラゴン』。

その本名は、ジャックナイフ・ドラゴン・ファンダード100世。ドラゴンワールドに古くより存在する竜の末裔で、その歴史はドラムバンカー・ドラゴン・ファング・スレイド・テレストリアル一族よりも遙かに長い。

幾百にものぼるドラゴン族でも、一二を争うほどに。

そんなジャックナイフ一族の存在理由は、ドラゴンワールドの秩序を守り、災厄を滅し、調和を保つ事にある。

そのためならば同胞をも殺し、『魔王竜 バツツ』などの殺しきれない存在は封印してきた。

そんな数々の偉業を為し、何度もドラゴンワールドを救ってきた伝説の存在。

彼らがドラゴンワールドの調和を保ち続けられていた理由は、ファンダード一族を象徴する武器にある。

その話をする前にまず、各ワールドには柱と呼ばれる守護者が存在する。

エンシェントワールドの『デュエルズイーガー』、ダンジョンワールドの『マザー・ドラゴン』、レジエンドワールドの『花子さん』、スター・ドラゴンワールドの『バルソレイユ』、マジックワールドの『■■■』。

ジャックも上記の内の一體であり、ジャック含め彼らには一つ、自らの存在を象徴する武器を与えられている。

ファンダード一族に与えられた武器は、ブレイドターミネイト。

万物を断つ刃と銘打たれたそれは、歴代ジャック達の頭部に携えられファンダード一族を支えてきた。

ブレイドターミネイトに選ばれる、装備出来ることは、彼らにとつて最大の誉れ。

そして当代、タスクのバディとなつたジャックは、その力をタスクのために使うと決めた。

ブレイドター・ミネイトの製作者がドラゴンワールドのためだけに使うと縛つた武器を、一個人、それも人間のために使う。

それは明らかな制縛違反であり、製作者は悩んだ。

そして悩んだ末に——その在り方を肯定した。

それもまた良しと、守護者はまた選べば良いと、ブレイドター・ミネイトが行き着く先が見たいがために、製作者は見守る事にした。そしてその瞬間、ブレイドター・ミネイトは変化する。

創られた当初より変わらなかつた在り方を変えられたため、それは何万年ぶりに変貌を遂げた。

タスクを守るために有ろうとする、ただそれだけの武器に。その武器の名は

◆◇◆◇

「——『超竜剣 ジャックナイフ・グローリア』」

『超竜剣 ジャックナイフ・グローリア』

ワールド：ドラゴンワールド

属性：【緑竜】「武器」

打：1／攻：7000

装備コスト：ゲージ2を払い、ライフ1を払う。

■このカードが相手の場のモンスターを破壊した時か相手にダメージを与えた時、君のドロップゾーンのモンスター一枚を君の場のモンスターのソウルに入れれる。

■君の場にジャックナイフと名の付くモンスターがいるなら、このカードと君の場のジャックナイフと名の付くモンスターの能力は無効化されず、ソウルを捨てられない！

能力：二回攻撃

『グローリア——栄光』

====

ジャックの頭部に装備されたブレイドター・ミネイトを模した刃が、

====

タスクの右手に装備される。

煌めかしい装飾は無く、むしろ無骨とさえ呼べるその武器。

しかし、《グローリア》から発される圧は本物である。

それも当然。

なにせ、何万年にも渡つて世界を守つてきた竜が使う武器なのだ。ジエネシスが、そしてジエムクローンが僅かばかり恐怖を覚えるのも、無理はない。

むしろ、僅かで済んでいるのが彼らの異常性を表している。

「タスク！」

「ああ、分かつてるよジャック！『ジャックナイフ・ドラゴン』を『ジャックナイフ・グランテーゼ』に進化！」

「オオオオオオオ！」

＝＝＝＝＝＝

ジャックナイフ・グランテーゼ

ワールド：ドラゴンワールド

サイズ：2

属性：【緑竜】「武装騎竜」

打：2／攻：6000／防：6000

コールコスト：ゲージ1を払い、ライフ1を払う。

■このカードは、このカードのソウルにあるジャックナイフと名の付くモンスターの能力全てを得る。

ソウルガード

『運命の子にして、いずれ神となる少年。彼を守る事は、世界全てを守る事に等しい』

＝＝＝＝＝＝

《ゲヴァルト》の装甲が外れ、新たに黄金の鎧がジャックの周囲に展開された。

それは眩いほどの閃光を発しながら、ジャックに装着されていく。鎧により一回り大きくなつたその緑竜は、赤い紋様が浮かび上がつたブレイドターミネイトをジエネシスに向ける。

「ククク、あれだけ研究され尽くされたのに、まだこれほどの切り札を

有していたとは……流石は龍炎寺タスクと言つたところでしようか」「その割には、随分と余裕そうだな。キャスト、《ドラゴニック・チャージ》『プラス』。さらにキャスト、《ドラゴニック・グリモ》『チャージ』『プラス』によりゲージが+5され、合計ゲージが6となる。

さらに《グリモ》を発動し、タスクの手札は0のためノーコストで3枚ドロー。

「いえいえ、これでも割と焦っていますよ」

「そうは見えないけど、ねつ！」

《グローリア》がジエネシスを切り裂き、1ダメージを与える。

たつたそれだけしかダメージを与えられなかつた事にジエネシスは違和感を覚え、そしてその違和感は正しい。

タスクを守る刃は、相手にダメージを与えてからが本番なのだから。

「能力発動！ドロップゾーンの《ジャックナイフ》アンゼスター』を《グランテーゼ》のソウルへ！」

バディファイトシステムを使用したバディファイトは、相手のカード能力を見ることは出来ない（タコスコープ等の例外はあるが）よつて初見のカードに対しても考察する他なく、ジエネシスにとっては《ジャックナイフ・グローリア》も《ジャックナイフ・グランテーゼ》も初見である。

《グローリア》は二回攻撃を持つている！ハアアアアア!!

「これも受けましょう」

ジエネシスのライフは8となり、《グランテーゼ》に《ジャックナイフ》『イエーガー』というモンスターが入る。

「ジャック！アタックだ！」

「応！ブレイドターミネイトオオオ!!」

「打撃力2、これも受けましょう」

「ジャックの能力発動！手札一枚を捨て、ダメージ2を与える！」

「ふむ……」

《グランテーゼ》の能力と攻撃でライフが4にまで減つたジエネシス

は、それを気にも留めず手に顎を乗せる。

攻撃時にダメージ2。

確かに強力で、かつ防ぐのが難しい能力である事に違はない。
（ですが、噛み合いません。そんなシンプルな能力ではないでしょ
うし、わざわざソウルに入れた意味がない。おや？）

そこで気付く。

『ジャックナイフ』 イエーガー』が『グランテーゼ』のソウルにあり、
さらにその能力が『このカードが攻撃した時、手札一枚を捨てたら相
手にダメージ2を与える』という事に。

「……ああ、ああ、そういう事ですか。ククク、ハハハツ」

「……『ジャックナイフ』 グランテーゼ』は、ソウルにある『ジャッ
クナイフ』の能力全てを得ることが出来る。正真正銘、僕の切り札だ』
『グランテーゼ』は本来一回しか攻撃出来ないが、『アンゼスター』の
能力で二回攻撃を得た。

そしてジェネシスの残りライフは4で、『イエーガー』の能力にター
ン1制限はない。

ジャックが攻撃すれば、それで終わり。

「いけ！ジャック！そして手札一枚を捨て、ジェネシスにダメージ2
！」

タスクの命令に従い、黄金の鎧を纏った緑竜が飛ぶ。

そして黄金の刃がジェネシスに届く瞬間、

「キャスト、『機甲符·i10000 D+』。防御力を+10000しま
す」

「ぐうつ……！」

より強固となつたゼータという外殻が、その刃を弾き返した。
ジエネシスのライフは2。

普通なら仕留め損ねたと誰もが思うだろうが、

「ファイナルフェイズ！キャスト！」

「ほう……」

瞬間、闘技場の天蓋が黒い雲に覆われる。

そして暗雲から現れるのは、一体の巨大な黒竜の腕。

その腕はガルガンチュア・パニッシャーと非常に似通つた、しかし細部が違うその剣に幾重にも巻き付いた鎖を強引に引きちぎり、剣身を露出させる。

「僕たち二人の命を一つに！」

「グオオオオ！」

そしてその剣、ドラゴニック・パニッシャーがジエネシスに向けて振り下ろされ――

「必殺！『ドラゴニック・パニッシャー!!』」

いくつもの闘技場を叩き割り、空間を引き裂いた。

第23話 兄弟の会話

ヴィーと視界を共有できるデバイスを通じて、タスクとジエネシスのファイトが始まつた事を知る。

いざという時はすぐさま相棒学園に転移させるよう言つておいたので、特に問題はないだろう。

むしろ、問題はこちらの方にある。

「特に調整してないイーターのデッキ……はつ、笑えないな……」

ドラゴンズ・ヴァーズインはABCカツプ運営に預けてしまつている。

これは僕だけ特別というわけではなく、本戦出場者全員が出さなければならない。

違反しているかどうか確かめ、試合開始までイカサマを仕込ませないためにすることなので仕方がないこと。そう、納得してしまつていた。

しかし、ああ、平和ボケしそぎたか。

異世界ならいざ知らず、日本なら平和だと。

こんなあつさりと危機が訪れたのに、いつから平和だと錯覚していた。

反省しよう。次からは失敗しない。

「次があると良いけど、なつ」

重く重厚な扉を開け、また新たな闘技場へと足を踏み入れる。

モンスターは……サイズ3が三体。

それぞれ《破壊竜王 ガタストル》、《グランドドラゴン ゼルザール》、《暴竜 ザガラリス》。

いずれも力自慢のモンスターで、魔術反転などの特殊能力を有していない。

「《百鬼魔導 ゴウアウェイ！》

瞬間、凄まじい衝撃音と共に三体のモンスターが地に平伏した。

その隙に、いつの間にか巨大化していた《イーター》がまとめて喰らう。

……我ながら、極悪なものだな。

モンスターとはいえ、人間を超える存在の命をこんなアツサリと奪うというのは価値観が狂いそうだ。

「へえ、随分と良いものを手に入れたようだね、悠斗」

「つ!?

瞬間、体が勝手に反応する。

いつでも魔法を行使出来るよう構え、さらに「百鬼」のモンスターを何体かと、《幻魔忍者 果心居士》をコールしておく。《アジ・ダハーカ》がくれば全て消し飛ぶためさして意味はないだろうが……ただの気休めだ。

そして、それらは僕の予想を超える方法で突破される。

「ぐつ!? 『百鬼魔導 閻違え』！」

——空間が、割れた。

《閻違え》も《イーター》を始めとする「百鬼」のモンスターも、真つ二つに両断される。

もちろんそれを成したものは見る事が出来ないが、《閻違え》と「百鬼」達の断面によつて觀えた。

線だ。

目に見えない透明な直線が、空間を引き裂いてこちらに向かつてきている。

それはとんでもなく早く、見てから対応できるものではない。

そして、

「つあ……!?

右手首が、いつも容易く切斷された。

神経が途切れ、これから一切動くことのない手首が重力に従つて地面に落ちる。

骨が見える。血が見える。肉が見える。

それは紛れもなく、僕の右手だ。

瞬間、断面から血が溢れた。

際限なく漏れ出るそれはあつという間に地面を赤色に濡らし、それでも尚止まる様子はない。

ああ、そういえば聞いた事がある。

交通事故で体の一部が切断され、止血などの応急処置をせずとも生き残る事例があるらしい。

それは、断面がズタズタになっていたからだ。そのおかげで動脈などの太い血管が塞がれ、結果的に失血死しなかつた。

けれど、今の僕はどうか。

空間を割る。

まさしくそうとしか形容できない攻撃をされた手首の断面は、血で隠されていても綺麗だと断言できる。

つまり僕はこのままだと、遠からず失血死で死ぬ。

「何もしなければな……！ 『餓狼、深気功』……！」

ロウガも使っていたデンジャーワールドの魔法カードを使用する。デイザスター・フォースで具現化したその力は、回復。瞬間、僕の体と切り落とされた右手に変化が起こる。

血だ。

前述した二つが、血管のように繋がった。

骨も肉も途切れているというのに、何十何百もの血管がいつも通りといわんばかりに繋がっている。

そして、右手がひとりでに浮き出した。

見慣れたその光景に驚くことはなく、右手が僕に向かって高速で飛んでくる。

すると、くついた。

骨も、肉も、神経もなにもかも。

失われた血を除き、僕の体は数分前と同じ状態にまで戻った。

本当なら増血もしたいが、ピンポイントでそれを為せるカードはないので我慢する。

今はそれより、

『戦神機 サーチホール』。この辺りの人間の反応を探れ

全長2メートルほどの、鯨型の探索機。

それは雄弁に、周囲に存在する僕以外の人間の存在を感じとる。

「そこだ！『イーター』！」

そして、丁度観客席の陰にいた人物に『イーター』が攻撃を叩き込む。

普通の人なら致命傷どころか即死なはずで、

「キヤスト、『黒竜の盾』」

それはつまり、僕の兄にとつては痛くも痒くもないということだ。アツサリと『イーター』の攻撃をいなし、コツコツとわざとらしく音を立てながら観客席を下つて来るのは、紛れもなく僕の兄、臥炎キヨウヤ。

「……随分と、悪趣味な剣だ」

「ふふ、格好いいだろう？『終焉魔剣 アクワルタ・グワルナフ』と言つてね。『アジ・ダハーカ』が生み出したものさ」

「へえ、鬼に金棒つて言うのかな？今の兄さんに敵う存在なんてないんじやないか」

『アジ・ダハーカ』、そして『グワルナフ』。

それは、ゾロアスター教と呼ばれる宗教に出てくる惡の化身と、光輪である。

アヴェスターという聖典によると、アジ・ダハーカは火の神アーダルと光輪、クワルナフを奪い合つたという。

色々端折ると、結局アジ・ダハーカは退くのだが、この世界ではアーダルなんぞいないのでアジ・ダハーカはこの通り健在である。

「いや、そうとも言えない。最近、三つ目の活動が活発になり始めてるからね……つと、これは懶人には関係ないか」「気になるような情報の寸止めはやめろつて昔言わなかつたつけ？ほんとに変わつてないな、兄さん」

ああ、なぜだろう。

目の前にいる人間は、世界を滅ぼそうとしている奴だ。容赦なく人を殺す人間だ。僕を、実の弟の手を一切の躊躇なく切り落とすような人間だ。

そんな兄さんを相手に、僕はどこか懐かしさと嬉しさを覚えていく。

「フフ、じゃあ本題に入ろう。龍炎寺タスクを闘技場に招いたのは、彼の力を更に引き出すためさ」

「……いつから、目を付けてた？」

「彼が、日本で初めての少年バディ。ボリスになつた時からだね。世界で一枚しか存在しないカードを使つていた時点で、彼が選ばれた人間というのは分かつていた」

世界に一枚しかないカード。

身近なもので言うと『ガルガンチュア・パニッシャー』、『アジ・ダハーカ』、『外道竜鬼 イーダー』、ああ、あと『グワルナフ』か。僕と交流のある人物が異常なだけで、世界で一枚しか存在しないカードの希少性は計り知れない。

そしてそれを持つ人間は、選ばれた存在。

龍炎寺タスク、そして兄さんを見る限り、それは間違いない。

「彼はハツキリ言つて異常だ。異常なほどに、選ばれている」

「神様にか？」

「神？ククツ、ハハハッ！まだ知らないのかい？悠斗。彼を選んだのは、神様なんかではないよ」

神様なんかではない？

ああ、まだ。同じ土俵に立つていらないから、言つていることが理解できない。

圧倒的な、必要情報の欠落。

「誰がタスクを選んだのかは、今はどうでもいい。ソフィアはどうだ」

「心配しなくとも、彼女は健気に戦つているよ……ロウガとね」

「……ロウガと？」

「ああ、これが証拠さ」

兄さんが指を鳴らすと、ソフィアとロウガが戦つている映像が大画面で映し出される。

ロウガのライフは8、ソフィアが2と、圧倒的に不利だが。

「座標は？」

「Dの14。行くのかい？」

「もちろん」

それさえ知れれば十分だ。

デバイスを通じてヴィーに連絡を取り、すぐ側に黒いワームホールを作つてもらう。

それに片足を突つ込んだ瞬間、

「なんつ!?

尋常でないほどの衝撃が、全身を貫いた。

地震とは違う……これはそう、火山噴火のようだ。

震源の方向に視線を向けると、ここからでも分かるほどの巨大な刃が幾つもの闘技場を切り裂いていた。

まるで、『ガルガンチュア・パニッシャー!!』のように。

「……『ドラゴニック・パニッシャー』……?」

タスクが叫んでいた技の名を、おうむ返しのように呟く。

「フ、フフツ、フクク、まさか、まさかだ。まさかもう、新たなパニッシャーを手に入れていたというのか? この短期間に?」

兄さんが、笑っていた。

歪な顔で、ただ唇を吊り上げただけのようだ、そんな嗤い。

それに気を取られている間にも、『ドラゴニック・パニッシャー』の影響で闘技場はどんどん崩れていつていて。

一刻も早く、闘技場を出なければ。

未だ口角を上げている兄さんを横目に出しつぱなしにしていた果心居士をカードに戻し、今度こそワームホールに入る。

一瞬にして景色が移り変わり、ロウガとソフィアが視界に入った。

「つ、悠斗様……!?

「だ、誰!? ソフィア知ってるの!?

ソフィアと……バディエリアにいる青い魔術師の手を引き、

「おい待て悠斗!俺とファイトしろ!」

「ンなことしてる暇ない! お前も早く逃げろ! ヴィー、もう一回ホールだ!」

『了解した』

ロウガの発言を半端無視し、目の前に現れたワームホールに躊躇なく入る。

今度は……氣絶して地面に倒れているタスクに、そのバディであるジャックナイフ。

ジエネシスの姿はないので、おそらく逃げたのだろう。あいつがそう簡単に死ぬとは思えない。

「ジャックナイフ！この穴は相棒学園に繋がっている、早く入れ！」

「お、応！」

またも景色が移り変わり、酔ったような気分になつてしまふ。

だが、上から燐々と照りつける太陽を肌で感じ、確信する。

「無事、相棒学園に戻ってきた……ほんとに無事かは、わからぬけど」

ともかく、ソフィアに危害が無くて良かつたと言つたところか。

それに、完全に兄さんと『アジ・ダハーカ』の手の平で踊らされていたわけではない。

なにせ……僕と兄さんたちの土俵を同じに出来る可能性のある情報を得たのだから。

「ははっ……ざまあみろ」

瞬間、貧血により僕は気を失つた。



時は、ほんの僅か遡る。

燃え盛り、崩れゆく数々の闘技場の中、臥煙キヨウヤは思考にふけつっていた。

「……今日は、とても素晴らしい日だつた」

新たにタスクに与えられたパニッシャー、『ドラゴニック・パニッシャー』。

さらに『ジャックナイフ・グローリア』、『ジャックナイフ・グランテーゼ』。

それに加え、弟である悠斗も『イーター』を始め、着々と力をつけて来ている。

「これで、また一步近づいたよ。そとは思わないかい？ アジ・ダハーカ」

『だが、奴らはお前の前に姿を現していない。まだ足りんだ。それ

に』

「それに、なんだい？」

『お前は、臥煙悠斗に一杯食わせられたぞ』

瞬間、キヨウヤの顔から笑みが消える。

そんな馬鹿など、バディの言葉を疑つたため。

悠斗は自らの手の平の上で踊り、そして導かれる存在であり、決して一杯食わせられるような存在ではないという思いが故の、純粹な疑問。

だが、確かに心当たりはある。

「……ああ、あれか」

『幻魔忍者 果心居士』。

それはキヨウヤが悠斗の前に姿を現す前からコールされており、つまりキヨウヤに対し能力を発動していたということだ。

そして『果心居士』の能力は、

「対象者の思考を読む……フフツ、まんまとやられたね。甘く見てたよ」

つまり、悠斗は『果心居士』を通じて一気に情報を得ることが出来るという事だ。

これを一杯食わせられたと言わず、なんと言おう。

『流石僕の弟だ。うん、嬉しいよ』

誰に対してもなくそう呟くキヨウヤの瞳にハイライトはなく、ただドス黒い朱が仄かに煌めいていた。

番外編

前篇 デイザスター会議

龍炎寺タスクが放った必殺技、『ドラゴニック・パニッシュヤー』によつて闘技場が崩壊してから、約1時間後。

デイザスターという組織のトップ、臥煙キヨウヤの命令により緊急会議が開かれることとなつた。

しかし、十ある座席のうち、埋まつているのはわずか三席だけである。

山崎ダビデ、グレムリン、花薔薇エルフ。

不良、デツキビルダー、研究者という、普段なら一堂に会するはずのない面子がキヨウヤの名によつて集められていた。

一人は机の上に足を置いて退屈そうに、一人は腕を組んで目を瞑り、一人は片手を頬に当てながらデータ資料の整理に勤しんでいる。「キヨウヤくうん、早く会議初めてくんねーベ？俺これでも稼ぎで忙しーんだわ」

「フン、どうせカツアゲだろう。下らん」

「ヒヤハハッ！大正解だべ、グレムリン。流石金持は言う事が違うねえー！お礼にこれやんよ」

ダビデはポケットから何枚かのカードを取り出し、グレムリンに向かつて投げつける。

それらは『アクター・ナイト・ザ・フル』など、能力を持たない所謂弱カードだつた。

グレムリンはそれらのカードを一瞥し、

「いらん。俺の作るデツキには必要ない。さつさと捨ててしまえ」「相変わらず容赦ねー。わざわざ俺にくれたカード達が泣いてるべ。あいつらどんな顔すんだろうなあ？」

あいつら、とはダビデが奪つたカードの持ち主の事だ。

時には騙し、時には脅し、時には力尽くで、徹底的に相手の心をすり潰して。

そんな事を何十何百と繰り返し、けれど警察に悟らせないよう用意周到に事を成すのだから余計質が悪い。

「少し待つてくれよ、ダビデ。もうそろそろだからさ」

「——だああああ！重いですしいい！」

キヨウヤがピアノを止めて階下に視線を向けると同時、ディザスター・メンバーにとつてひどく聞き慣れた声が響く。

歪に口角を上げたダビデがそちらの方に振り向くと、ロウガに肩を貸している祠堂孫六がその姿を現した。

「なんで僕がこんな事しなきやならないですし！こんなのは、ダビデとかでろ美がやれば良いんですし！」

「ヒヤハハハ！似合つてんべマゴロクちゃーん！」

「うるつさいですし山崎ダビデ！さつさと手伝うですし！」

「……貴様、少し黙れ。もう一人で歩ける」

「そ、そうですしか？……つひやあつ!?」

悠斗も使っていた魔法、『餓狼深氣功』で傷を治したロウガは、孫六を振り払い自らの席に向かつた。

そこまで運動神経が良くない孫六はその衝撃で倒れ、ロウガに忌々しい視線を送るも、本人は完全無視である。

そして、

「おや、私たちが一番最後でしたか」

「こんな元気なら、迎えに行くまでもなかつただわさ」

黄を基調としたスーツを汚しながらも、ビジネススマイルを浮かべたジエネシスと、ディザスターの正装を着用した朽縄てる美が現れた。

フューチャーフォースの状態で使用された『ドラゴニック・パニッシャー』を直で食らつても、ジエネシスが生きているのには理由がある。

「ジエネシス、ジェムクローンはどうしたんだい？いつも側に連れていただろう？」

『ドラゴニック・パニッシャー』を壊すためにアジ・ダハーカをコピーしたのですが、あいにくジェムクローンは未完成。再生機関にダメー

ジを負い、今はカードの中です」

「フフ、僕のバディをコピーしようだなんて、無茶な事を考えるものだね」

「試してみないとわからないでしよう？まあ、威力は1割も出せませんでしたが。つくづく規格外だ、貴方のバディは」

かつてアジ・ダハーカと同等な存在と呼ばれた太陽神の欠片を取り込ませ、間違なくジエネシスの最高傑作と呼べる必殺モンスター、ジエムクローン。

そんな存在でも、アジ・ダハーカには遠く及ばない。

「うん、全員揃つたね。じゃあ会議を始めようか」

キヨウヤがそう宣言するも、埋まっている席は未だ七つだ。

あと三つは誰も座る気配はなく、しかしそれには誰も言及しない。

誰が座る席か、理解しているから。

「じゃあまずは闘技場の被害からだ。花薔薇」

「はい。あの子達にあてがつたモンスターは全滅よ、それだけなら全体の数%だけど……タスクくんのドラゴニック・パニッシャーでかなり死んだわ」

花薔薇エルフ。

ダークコアデッキケースの生みの親であり、ディザスターの中でもロウガに続いて古参メンバーである。

なお、27歳のジエネシスより上の29歳。

「まだ概算だけど……3割は確実に死んだんじゃないから」

「んなっ!?なんでそんなに死んでるですし!?モンスターはみんな、バラバラの場所にいるはずですし！」

「フン、どうせ悠斗どもを我先にと迎え撃つために群がつてたんだろう。愚かめ」

「ヒヤハハ！そーゆーテメーも、龍炎寺タスクをぶつ倒すために出張つてたんだろう!なあ?荒神ロウガくうん」

「……貴様、少し黙れ」

ロウガがダビデに向けてガンを飛ばすも、それで止まるはずもな

い。

むしろ勢いを増して口を回し始めた。

「図星か？図星だべ？おつと、そんな睨むなよ。意味ねーし、怖くもなんともねーべ」

「良いだろう、望み通り貴様を試金石にしてやる。俺が強くなるためのな」

「あ？ やるか？ ゃんのか？」

ロウガは崩滅槍 甘抉りを、ダビデはバディである死竜 デスゲイズ・ドラゴンをコールして、お互い席から立ち上がる。

室内に冷たい雰囲気が充満し、しかし誰も一人を止める様子はない。

そしてデスゲイズの鎌と甘抉りが衝突する——

「お前たち！ 少し落ち着くだわさ！」

直前、朽縄てる美の静止が入った。

彼女がコールした《ゴルゴン三姉妹 メデューサ》が矢を三方向に放ち、それぞれロウガの右足、デスゲイズの鎌、チヨーカー型のダークコアデッキケースに手を伸ばしているダビデの右手に命中する。瞬間、彼らが痛みを認識する隙すらなく、変化が起きた。

ピキ、パキと、石化したのだ。

全身を石化させる事はなかつたが、各々その動きを止める。

しかし、その瞳には依然として殺意が滾っていた。

「……何やつてんのかなあ、てる美ちゃん。邪魔すんならテメエから殺すべ。つかさつさと石化解除しろ、重工んだよコレ！」

「それはこつちのセリフだわさ。今が会議中なのが見えないの？ キヨウヤ様の邪魔をするお前こそ死ぬだわさ」

睨み合う事一分弱。

飽きたのか何なのか、ダビデは動かせる左手で降伏のポーズを取り、デスゲイズをデッキに戻した。

それを確認して、てる美は石化を解除する。

「申し訳ありませんでした、キヨウヤ様。会議を再開してください」

「……いや」

てる美の提案を、しかしキヨウヤは短く一蹴した。

「『友達』の間でわだかまりは残すべきではないと、僕は思うんだ。だから、思う存分戦つて良いよ」

「あ!?」

「ほう……」

ただし、とさらに言葉を紡ぐ。

「リアルファイトじゃなくて、バディファイトで決着を着けるんだ」



「はア～……めんどくせえ」

「先に喧嘩を売ったのはお前だろう、ダビデ。自業自得だ」

「ハツ、モンスターが人間様に意見してんじやねーベ」

ディザスター本部、ファイティングステージ。

そこでロウガとダビデは、対極の表情で対峙している。

この対戦を、ダビデは望んでいなかつた。

彼は、ロウガが嫌いだ。

自らの中にちやんとした軸と強かさを持ち、ディザスターの中でも上位勢に入るほどの強者。

ダビデが好む弱者とは、かけ離れた存在。

強者とのファイトだけならまだしも、ロウガ相手ではイカサマも使えない。

ダビデが気乗りしないというのも、彼の性格を考えれば当然だろう。

だが、否が応でもファイトは行われる。

「エースの力がお前を碎く！ダークルミナイズ、エース・デフィート！」

「すり潰せ、心を！ダークルミナイズ、ザ・ブラツクドラゴン」

先行は、ロウガ。

スタートフェイズを済ませ、メインフェイズ。

センターに『アーマナイト・ワーウルフ』をコールし、そのままダビデにアタック。

＝＝＝＝＝

『アーマナイト・ワーウルフ』

ワールド：デンジャーワールド

属性：アーマナイト

サイズ：1

打：1／攻：4000／防：1000

■このカードが登場した時、君が『武器』を装備しているなら、ゲージ1を払つてよい。払つたら、君のドロップゾーンのカード1枚を君の場のモンスターかアイテム1枚のソウルに入れる。

|||||||

「ターンエンドだ」

ああ、ロウガは本気だ。

本氣で、ダビデに勝とうとしている。

「ハツ、やつてらんねーベ」

このまま適当にファイトして、適当に負けるのも一つの手だろう。だが、それは出来ない。

なにせ、ダビデは弱者をいたぶるのと同じぐらい、

「俺のターンだべ、ドロー！」

勝つ事が、大好きなのだから。

負かす相手がロウガなら、尚更である。

中篇 対決！荒神ロウガVS山崎ダビデ！

「この戦い、一体どちらが勝つのかしらねえ？」

観客席。

一目で豪華とわかる椅子に腰掛けながら、花薔薇エルフはそう問い合わせた。

同じく腰掛けているディザスター・メンバーに向けたそれに答えたのは、グレムリン。

「……相性だけで言えば、荒神ロウガが有利だ。奴はモンスターに頼らん、自身の力しか信用していない」

「自分の力だけでとか……どれだけ脳筋なんですしづ……」「ロウガがモンスターを召喚するのは、『魔装合体』する時のみだ。必然的に、ダビデが喰らう機会は少なくなる」

ディザスター・メンバー全員のデッキを作成、一人でチューニングしているグレムリンは、この場で誰よりも対戦する二人を識っている。どちらのデッキも最良を尽くした以上、後に残る要素は相性だ。

ロウガの使うデンジヤーワールドは、ただ打撃力を追求して速攻でケリをつけるコンセプト。

対しダビデの使うダークネス・ドラゴンワールドは、対戦相手の力を利用するものが多い。

例えば潜影。

相手センターにいるモンスターを無視し、ファイターに直接ダメージを与えるられる。

攻撃力を捨てていてことから『変身』や『装着』能力の多いヒーローワールドに弱いが、耐久型……特にエンシエントワールドに対しては無類の強さを発揮する。

例えば今ダビデの使つてる靈撃。

相手の場のモンスターを破壊する事でファイターにもダメージを与えることができ、これもまたエンシエントワールドに対しても敵だらう。

グレムリンの言つた喰う、とは靈撃の事である。

どちらも、相手にモンスターがいてこそ真価を發揮するタイプだ。それゆえ、武器をメインとして戦うロウガとは相性が悪いと言わざるえない。

しかし、

「対策など、既に済ませている」

そんな事は百も承知。

不利を埋める……むしろ有利になるカードを、グレムリンはテツキに仕込んである。

あとはそれを、ダビデが使いこなすだけ。

(そんな上手くいくとは思えんが)

いつぞや虎堂ノボルが吐いたように、バディファイトとは究極的に運ゲーだ。

どれだけ運要素を減らそうが、必要になる場面は多々ある。

そんな思考を胸の裡にしまい、グレムリンは視線をファイティングステージに移した。



「俺のターンだべ。ドロー、チャージアンドドロー」

ダビデは自分の手札を見やる。

そこにグレムリンの仕込んだ札はなかつたが、しかし今は無くても問題ない。

なにせ、今ロウガのセンターには獲物モンスターがいるのだ。

「センターに『死竜騎兵 カース』をコール。ライトに『アーマナイトデスガイズ』、レフトに『死竜 デスガイズ・ドラゴン』をバディコールだべ」

「ハハハハ……！ぶつ壊そuzze、ダビデ」

死してなお、死靈術師の手により蘇った竜と竜騎兵。

サイズ1相応のアンデット・ドラゴンと、それに跨つたアンデット・キヤバリイがダビデのセンターに現れる。

ライトにはアーマナイトらしく武装したデスガイズと、レフトには禍々しい鎌腕を持つデスガイズ。

|||||||

『死竜騎兵 カース』

ワールド：ダークネスドラゴンワールド

属性：「死」「黒竜」

サイズ：1

打：0／攻：50000／防：1000

コールコスト：ゲージ1とライフ1を払う。

■“靈撃”：このカードの攻撃で相手のモンスターを破壊した時、相手にダメージ1。

■靈撃で相手にダメージを与えた時、君のライフ+1。

■このカードが攻撃された時、攻撃してきたカードの『貫通』を、そのターン中、無効化する。

『アンデッドは、殺した相手の怨念を喰らう。気を付けよ、生者は奴らの好物だ』

|||||||

『アーマナイトデスガイズ』

ワールド：ダークネスドラゴンワールド／デンジャーワールド

属性：「アーマナイト」「黒竜」

サイズ：1

打：1／攻：60000／防：1000

■“靈撃”相手の場のモンスターが攻撃で破壊された時、君のデッキの上から1枚をゲージに置き、相手にダメージ1！

『平和ボケしている貴様らに思い出させてやる。弱者が辿るべき運命をな！』

|||||||

『死竜 デスガイズ・ドラゴン』

ワールド：ダークネスドラゴンワールド

属性：「黒竜」「死」「深淵」

サイズ：1

打：1／攻：60000／防：1000

|||||||

コールコスト：ゲージ1を払う。

■“靈撃”：相手の場のモンスターが破壊された時、相手にダメージ2！

『命あふれるこの世界。我らの贅に相応しい』

＝＝＝＝＝＝＝

「キャスト、《アブソリュート・アタック》！ 口ウガア、テメエはこのターン中、カウント対抗出来ねえべ！」

「貴様のアタック中、だろう。誇張表現をするな」

「テメエら！ 《ワーヴルフ》にアタックだべ！」

口ウガの言葉を遮るように、ダビデが攻撃命令を下す。

《カース》、《アーマナイトデスゲイズ》、《デスゲイズ・ドラゴン》が《ワーヴルフ》に殺到する。

各部位を噛み碎かれ、カードの破片となつて散つた後。何も残らないはずのそこに、球体の“何か”があつた。

それは水の霧のようで、何かを濃縮したように水色に濁つっていて、それは——《ワーヴルフ》の魂だつた。

瞬間、球体はひとりでに動き出す。

ふよふよと漂い、口ウガに触れると、ダメージ判定だけを残して消え去つた。

☆荒神ロウガ ライフ：10→6

これが、靈撃。

モンスターの守りを無為に、相手の努力を無駄にする能力。実にダビデらしいと、口ウガは内心悪態をつく。

「ヒヤハハハ！ 気分はどうだよ口ウガちやあん！」

「屁でもないな。これで終わりか？ 貴様の攻撃は」「ケツ、ターンエンドだべ」

そう、つまらなそうに吐き捨てターンエンド。

☆山崎ダビデ ライフ：11／ゲージ：2／手札：4／センター：《死竜騎兵 カース》／ライト・《アーマナイトデスゲイズ》／レフト：

《死竜 デスゲイズ・ドラゴン》

「ドロー、チャージアンドドロー」

「……わっかんねえなあ。やっぱわかんねえべ」

『崩滅槍 天抉り』を装備。わからない、とは何だ。俺からしてみれば、弱者をいたぶろうとする貴様の感性もわからんが』

『テメエが強くなりてえ理由だべ。ああ、キヨウヤちゃんの剣になりたいのは知つてんべ。だけどまあ、改めて考えるところやおかしいんだよ』

ロウガはダビデの言葉を聞き流しながら、『闘氣暴走』でライフ3を払いゲージを+6し、『危竜同舟』でドロップゾーンの『アーマナイト・デーモン』A』』を『天抉り』のソウルへ。

====

『危竜同舟』

ワールド：デンジャーワールド／エンシェントワールド

属性：【竜王番長】「闘氣」

使用コスト：ライフ1を払う。

■君のデッキの上から1枚をゲージに置き、君のドロップゾーンのモンスター1枚を、君の場のモンスターかアイテムのソウルに入れる。

『昨日の敵は今日の友つてほど単純じゃあないが、とりあえず休戦』

====

その後、『餓狼深気功』でライフを10にまで回復。

そのブレイブを視界に据え、つまらなそうに首に手を置きながら、ダビデはさらに言葉を紡ぐ。

『強くなる必要なんかねーべ。なんせ『アジ・ダハーカ』は最強のモンスター……ロウガちやんなんて剣にも盾にもなんねー』

アタックフェイズに移行するも、ダビデの口車は止まらない。

ロウガも、異様なほどに口を出さないでいる。

(すぐに反論してくると思ったが……拍子抜けだべ。ま、好都合だ)

「なあ、なんでそこまで強さを願う。どう足搔いても世界最強になんてなれやしねーのに、なんでキヨウヤに追いつこうとしてる? 黙秘権はナシだべ」

『神に近付くために鍛えるのではない。神すらねじ伏せるために、己

を練り上げるのだ』。『烈神呼法』のフレーバーテキストだ』

あ？ とダビデは疑問を、威圧と疑問を7・3に混ぜた息を吐いた。

唐突に知らないカードについて語られたのだから当然だ。

だが、まだ話は続くようでダビデに攻撃する様子はない。

『アジ・ダハーク』を打破し、最強と成る。それが俺の目的だ』

「……ヒヤハツ」

目を伏せ腕を組み、尊大な態度を崩さずにそう言い切ったロウガの言葉を、

(なるほどなあ。そういう事か、つて)
納得するわけねーべ。

そう、ダビデは『嘘』と断定した。

「ヒヤハハハハ！ どうしても言いたくねえってか?! いいぜ、このファ

イト、俺が勝つたら包み隠さず吐け、条件追加だべ！ 荒神ロウガア！」

「フン、良いだろう。俺が勝つたら、二度と追求するなつ！」

『グオルオオオオオオ……！』

天抉りの攻撃で『カース』が破壊され、ダビデのセンターが開く。そのままセンターエリアに降り立つたロウガは、腰を大きく捻つて三叉槍を投擲した。

「チイツ！」

☆ダビデ ライフ：12→10

「もう一度くれてやる。ゲージ1を払い、再攻撃！」

「くらつてやんよ！」

☆ダビデ ライフ：10→8

3回攻撃。

『アーマナイト・デーモン』A』の能力、『このカードが君の『武器』のソウルにあるなら、ゲージ1を払う。払つたら、その『武器』を【スタンド】する』によるものだ。

他の『A』がソウルに入つてないため、ダメージは4で済んだ。

まだ、まだマシだつた。

「ターンエンドだ」

☆荒神ロウガ ライフ：10／ゲージ：7／手札：3／装備：『崩滅

槍

天
抉
り
《》

後篇 決着

ロウガのターンが終わり、ダビデのターン。

コキコキと首を鳴らし、いつものように口角を上げる。

相手を威圧させると同時に、一度思考を整えるためのルーティンだ。（さて、こつからどうするべ。ケルベロスがくれば俺に勝ち目はない。ならこのターンに決着を付けてえどこだが……クソグレムリン、もつとあのカード入れとけや）

「ドロー」

【黒毒竜のブラツドナイフ】。

有用だが、ダビデの欲しいカードではない。

「チャージアンドドロー……ヒヤハツ、イカサマなんてする必要なかつたなあ！ センターにコールだべ！ 【操骨者^{ボーンレイパー} ビリ・キナータ】！」

「いーヒヤツはつヒッヒツ」

現れたのは、まるでハロウインの要素を混ぜ合わせたようなモンスターだった。

かぼちゃの頭からは青の靈気が溢れ、魔女のローブと帽子を身に纏い、骨のみの胴体はまさしくだろう。

そしてこれがグレムリンが仕込んだ対策であり、ダビデの切り札である。

「能力発動！ ロウガ、テメエのセンターにモンスターをコールだべ」

＝＝＝＝＝＝＝＝

【操骨者^{ボーンレイパー} ビリ・キナータ】

ワールド：ダークネスドラゴンワールド

属性：《死》《深淵》

サイズ：0

打：1／攻：0／防：2000

■【起動】相手のセンターにモンスターがないなら、相手のドロップゾーンのカード1枚を選び、このカードをレストする。レストしたら、選んだカードを裏向きにして、「サイズ0／攻撃力6000／防御力6000／打撃力2」のモンスターとして、相手のセンターに出す。

『イーヒッヒッヒッ……あ、間違えた。これ魔女の笑い声だつた』

＝＝＝＝＝＝＝

そう、つまり、『相手の場にモンスターがいないなら作れば良い』
という事だ。

この考えは、かなりロウガに刺さっている。

まず、センターにモンスターを置かれるので武器で攻撃出来ない。
どかそうにもサイズ0のため、サイズオーバーすることが無い。

「まさか貴様……」

ロウガが想像したのは、最悪の戦法。

このまま自身の武器攻撃を封じ、デツキアウトまで待つというもの
だつた。

「おいおい、流石にそれは興醒めだべ。つまんねえだろ。【ブラツドナ
イフ】を装備。テメエら、アタツクだべ！」

「バディに向かつてテメエは口が悪すぎるだろ、ダビデ」

＝＝＝＝＝＝＝

【黒毒竜のブラツドナイフ】

ワールド：ダークネスドラゴンワールド

属性：《武器》《黒竜》

打：0／攻：7000

■【装備コスト】ゲージ1を払う。

■君の場の『黒竜』のモンスター全ての攻撃力+2000!!

■『靈撃』相手の場のモンスターが攻撃で破壊された時、相手にダメージ1!

『黒毒竜の血が染み込んだ短剣。触れただけで激痛に苛まれる』

＝＝＝＝＝＝＝

計4点の靈撃が炸裂し、ロウガのライフが6にまで削れる。

いつぞや悠斗がやつたように、『魔装合体』出来ないギリギリのラ
インだ。

「ターンエンドだべ」

☆山崎ダビデ ライフ：8／ゲージ：2／手札：3／センター：[ボー
ンレイバー ビリ・キナータ]／ライト：[アーマナイト、デスゲイズ]

／レフト：【死竜 デスガイズ・ドラゴン】

「ドロー、チャージアンドドロー。ライトにバディコールだ、【アーマナイト・スター・ケルベロス „A“】！“魔装合体”！」

バディギフトで甘挾りは2回攻撃を得て、打撃力も3に上昇。無駄のないブレイングで、強力無比なロウガの十八番だ。

【キャスト、【裂神呼法】。さらにキャストだ、【斬魔滅葬陣】！』

「チツ、なんでンなもん持つてんだよ」

＝＝＝＝＝＝＝

【裂神呼法】

ワールド：デンジャーワールド

属性：『闘氣』『ドロー』

■【使用コスト】ゲージ1を払い、ライフ1を払う。

■カード1枚を引く。さらに、君が『武器』を装備しているなら、カード1枚を引く。「裂神呼法」は1ターンに1回だけ使える。『神に近づくために鍛えるのではない。神すらねじ伏せるために、己を鍛えるのだ』

＝＝＝＝＝＝＝

【斬魔滅葬陣】

ワールド：デンジャーワールド

属性：『闘氣』『斬魔』『破壊』『地獄』

■君のセンターにモンスターがないなら使える

■【使用コスト】ゲージ1を払い、ライフ1を払う。

■次の2つから1つを選んで使う。

・君の場の『武器』の攻撃力以下の防御力を持つ相手の場のモンスター全てを破壊する！

・相手の場の魔法全てを破壊する！

『これで終わりだ……俺も、貴様らも！』

＝＝＝＝＝＝＝

「ハアアアアア！」

「ぐわー……なーんちつて。キャスト、【黒竜の盾】だべ」

「2回攻撃だ。墳ツッ！」

「容赦ねエなおいつ！」

「まだだ！ゲージ1を払いスタンド、再攻撃！」

「ぐおお……！」

ダビデのライフは3にまで減少。

これで本領発揮ではないのだ。この化け物に勝つた悠斗に内心苦笑する。

「はつはー。やるねえ、荒神ちゃん。相変わらずキメエぐらい強エベ。それがキヨウヤの為だなんて泣かせるねエ」

「ほざけ。貴様が勝てば話すと言つたぞ。ターンエンド」

☆荒神ロウガ ライフ：5／ゲージ：4／手札：3／装備：【崩滅槍 天抉り】

「まあまあ、少しばかり付き合ってくれよ。ドロー」

今ダビデの手札はそれぞれ【ブラック・リチュアル】、【ニアアス トレ】、【ブラックディームーン・ドラゴン】。

ああ、良い。非常に良い。

何が良いって、

「ドロー魔法があんのが最高だべ。キャスト！【ブラック・リチュアル】で【ブラックナイフ】を破壊だべ！」

＝＝＝＝＝

【ブラック・リチュアル】

ワールド：ダークネスドラゴンワールド

属性：《黒竜》

■【使用コスト】君の場の《黒竜》1枚を破壊する。

■君のデッキの上から1枚をゲージに置き、君のライフを+1し、カード2枚を引く。「ブラック・リチュアル」は1ターンに1回だけ使える。

『肉体など器に過ぎぬ。魂が屈しない限り、黒竜は不滅』

＝＝＝＝＝

「ライトに【ブラックディームーン】をコール。んでもって【ニアアスト レ】をキャストだべ」

【ニアアストレ】。

使用者のライフが4以上の時に使え、使用者のライフを3に減らす代わりに4ドローする癖のある魔法。

そして、ダビデはダークコアデッキケースから3枚を引き、

「クック……」

——もう一枚を、自身のポケットより取り出した。

観客室、てる美が声を荒げながら席を立つ。

「ンなつ!? あいつ、やりやがつたださわ!」

「フン、隠す気もないか」

自身のデッキビルドに絶対の自信を持つグレムリンにとつて、『イカサマしないと勝てない』と言われたようなものだ。

怒り……よりも、呆れが先にくる。

「でも、なんで口ウガは何も言わないですし? 反則負けにできるですしよ?」

「イカサマをさせた上で倒す。それでこそ真の勝利と思つてるのかも。美しC美学ねえ」

「フフフ……ハハハハハ」

笑つた。

なんも脈絡もなく、唐突に。

物静かに二人のファイトを見守つていた臥煙キヨウヤが、笑い出した。

その事実に、デイザスター・メンバーは各自目を剥く。

「どうしたのですか? 隨分と嬉しそうですが」

「ああ、なんでもないよ、ジエネシス。少し、ね」

まるで、あの時のことだ。

人知れずそう思つたキヨウヤは、再び視線を移した。

「意外だべ。何も言ってこねえのな」

「言つたところで貴様はファイトを続行するだろう。それに」

「それに?」

「貴様は友ではない。凡百の間違ひを正すなど、時間の無駄だ」

「凡百つて俺のことかよ、荒神ちゃん」

返事はない。

センターボーンで腕組みしながら、その鋭い視線をダビデに向け続けている。

「ヒヤハツ！テメエは今から、その凡百に倒されんだよ！【アーマナイ

ト・デスゲイズ】！ロウガにアタックだべ！」

ロウガのライフは4に減少。

だがダビデはそれ以上攻撃する事なく、ファイナルフェイズに移つ

た。

「これで終わりだべ。キヤスト、【スロウ・ペインフォー】」

「ぐ、がつ、ああ……！はつ、ぐああああ！」

自身の場の『黒竜』一枚を破壊し、相手に4ダメージを与える魔法。ダビデがイカサマで引いたカードの正体だ。

靈撃のそれとは全く異なる、紫の零。

それは【ブラツディームーン】を、ダビデを、ファイティングスター
ジを照らしながら……ロウガに迫つた。
カウンター魔法を使う様子はない。

つまり、

「俺の勝ちだべ。荒神ロウガ」

ロウガのライフは、0に減少した。

「キヤスト、【地獄還り】」

世界はまた一步、カオスへと相成りて

「フンフン♪ フフン♪ フンフフフフーン♪」

レジエンドワールドの一角、地球のそれとは違う色合いの湖に妖精が集う理想郷にて、一匹のシルフが花の冠を編んでいた。

ピンク髪のツインテールに、海や空よりも澄んだ瞳、白のワンピースに透明な羽は、一般的なシルフの姿形だ。

全は個にして、個は全なり、個は孤にあらず。

シルフとはそういうもので、意思と呼べるものはなく、妖精王の手足として生まれた存在。

けれどその個体、「風の精 シルフ」は喜んでいた。

胸の奥で弾けて沁みて、体がぽかぽかとして思わずにはやけてしまうこの感覚。

彼女が妖精ではなく精霊であつた頃に、悠斗に教えてもらつた鼻歌を口ずさみながらその可愛らしい幼顔を破顔させている。

それほど嬉しかったのだ、悠斗に会えたことが。

彼には不思議な魅力がある。

仲間のシルフや妖精、精霊たちと楽しく暮らしていた普遍の日常に侵入してきた、イレギュラー。

ズケズケと清浄の領域に侵入し、強いモンスターはいなかと妖精王に直談判したあの姿に、シルフは不思議と喜んだ。

この人のおかげで、何かが変わるかもしれない。

その予感の通り、悠斗は面白い少年だつた。

邪龍退治に始まり、妖精王試験、神獣探索と、最近はイーター討伐。普通に生きてるだけでは決して味わえない経験を、悠斗は何度も体験させてくれる。

まるで白馬に乗つてプレゼントを配つてくれる王子様だと、シルフは本気で思つていた。

次はいつ来てくれるのだろうと、そう無邪気に思つた時。
「んっ……」

ふと、胸の奥にチクリとした痛みが走つた。

焦燥感、違和感、不快感。

シルフの語彙では言い表せないその感覚に、すぐさま冠を置いて空に飛び立つ。

「みんな～！どうしたの～！」

「シルフ！ヤバいやつが出たらしいの！早く逃げろってオベロン様が言つてる！」

「早く逃げよおよ～！ここにいたら危ないよ～！」

【妖精界の靴職人 レプラコーン】、【春風の運び手 シルフ】達がシルフに危機を知らせる。

妖精の長であるオベロンが戦わなければならぬ相手に、彼らは恐れていた。

故に逃げようとシルフを促したわけだが、それは彼女にとつては逆効果だ。

「あたし！ちよつと見に行つてくるね！」

「えええ!? 話聞いてた～!?」

シルフは変わつた。

元より好奇心が強かつた気性が、悠斗のせいで増長させていた。
（事件だ！ また事件だ！ 何が起きてるのかな！ 楽しみだな～！）

それは誰が見ても愚行であり、けれど彼女は気付かない。
気付く時があるとしたらそれは、

「シルフツ～！逃げつ～！」

残酷な現実が、目の前に横たわつた時だろう。

そしてそれは、今だつた。

【妖精騎士 デイナンシー】が『何か』に纏わりつかれているのを認めた瞬間、シルフの目の前で爆発が起きた。

突然の出来事に理解が追いつかず、何故かさらに痛くなる胸を押さえて顔を青くする。

「嘘……嘘……」

妖精達が住まう楽園の番人、【デイナンシー】。

そんな彼女達が死んだ事が認められず、何度も戯言を呟く。

その行動が、シルフの運命を確定させた。

彼女はすぐさま逃げるべきだつた、デイナンシーが爆死した時点で、なりふり構わず逃げるべきだつたのだ。

けれど、もう遅い。

魔の手は既に、シルフの羽を掴んでいる。

『妖精個体、発見。妖精個体、発見。シルフ、固有名【風の精 シルフ】』
「何……これ……」

視線を上空に向けると、ユグドラシルに重なるように見える機械の塊が空を覆っていた。

四本の腕に、赤、黒、オレンジ、緑と様々な色の胴体、そして無機質なセンサーライ。

幾百の歯車が組み合わさつたようなその歪な姿が、変に囁み合つているせいで気味が悪い。

それだと、シルフは本能的に理解した。

あの機械モンスターの大軍がデイナンシーを殺し、この胸の痛みの正体なのだとシルフは悟つた。

それと同時に、デイナンシーの最後の言葉が想起される。

「逃げ、なきや……」

羽を震わせ、低空飛行でみんなが逃げた方向へと向かう。
瞬間、背筋に熱い感覚が走つたかと思えば、シルフは地面に這いつくばつていた。

顔がより青ざめ、全身が力タカタと震え出す。
わからない。

機械、ミニギアゴッドがセンサーライから熱線を発したことなんてわからない。

その熱線が自身の羽を焼いた事なんてわからない。

もう逃げる事が出来ないなんて、わかりたくなかつた。

「あ……」

そして、シルフの細い胴体がギアゴッドの機腕に掴まれた。

軽々と持ち上げられ、彼女の大きな瞳から涙が溢れ出す。

可愛らしい手で機腕を叩いても、大声で助けを求めて、ギアゴッ

ドがその手を離すことはない。

「あつ、ぐあうう……!?」

モンスターをカードに押し込める、最悪の人工魔法。

悠斗がイーターに対し使用したそれが、シルフにかけられる。

魔力でなんとか抗おうとするも、彼女は実に呆気なく、カードとなつた。

イーターのような化け物でもない限り、カードの外に姿を現す事は出来ない。

つまり今のこの瞬間、シルフは死んだも同然だつた。

『捕獲完了』

そして、その一部始終を見る者が一人……いや、一匹。

「ま、マズイニヤ……これは僕ちんでもどうしようもないニヤ……助けを呼ぶしかないのニヤ！」

この日、レジエンドワールドは甚大な被害を受けた。

理想郷で行われた大量殺戮、さらに多くの行方不明モンスターを出し、極め付けには【妖精王 オベロン】の消失。

また、その地域一帯を任せられた守護者、【トイレの花子さん】も、【チイイツ！キヤスト、【開かずの間】！】

同時、危機的な状況に陥つていた。

発動した魔法障壁に、異形の腕が突き刺さる。

黒く筋肉質な腕に、灰色の毛、鋭い爪、人間のそれより遥かに巨大なサイズ。

どこかイーターににたモンスターが、花子さんを攻め立てる。

「貴様が誰かは知らんが、俺は今腹が立つてしうがねえ。喰らえ！」

「ヤミゲドウ！」

「G R O O O A A A !!」

時間は、シルフが囚われる前に遡る。

欲せよ悪鬼。壊せよ邪竜。世界を喰らうはヤミゲド
ウ

腹が減る。腹が減る。腹が減る。

脳内で響く、バディの欲求。

何かを食わせると訴えるその声に、少年、イカヅチは頭がおかしくなりそうだった。

彼の腹は物理的に満たされている。

なのに際限なく、まるで喰つたものが即座に消化か消滅でもしているように、四六時中食欲に侵されている。

それも当然、バディの名は『大魍魎 ヤミゲドウ』。

世界を喰らう化け物の狂気に、一介の人間が耐えられるはずもない。

むしろ、未だイカヅチに理性と呼べるもののが残っている方がおかしいと言える。

そして、いつからだろうか、日を追うごとにヤミゲドウの狂気に当たられ、イカヅチ自身の正気が蝕まれ始めたのは。

腹が減る。腹が減る。腹が減る。

その欲求がバディのものではなく、自分のものであると気付いたのはいつだろうか。

バディは一心同体とはよく言われる言葉だが、今の彼らほど一心となつている存在もない。

これを異端と呼ぶ者もいる。

しかしそもそも、モンスターとはそういうものなのだ。

元より人間と思考も力もかけ離れた存在を、カードに押し込めてその力を封印しているだけ。

イカヅチとヤミゲドウはバディ契約などという生半可なもので結ばれてはいない。

もつと深く、根底から混ざり合っている。

もはや離れることなどできないし、イカヅチにその気はない。

さながら中島敦の『山月記』のように、イカヅチの内面は既に化け物となつていた。



「あ？」

ふと、一人と一匹しかいない空間で、イカヅチは声を上げた。

威圧的な声質のせいでわかりにくいか、それに含まれるのはシンプルな疑問。

何が起きて いるのかわからない、という感情の吐露。

その理由を明かすにはまず、彼らが立つ場所と状況を説明せねばならない。

端的にいえば、そこは祠であり、遺跡だつた。

世界を滅ぼす厄災が再び目覚めないようにと、レジエンドワールドにモンスターが現れる以前に角王たちが作ったもの。つまるところ、イーターが封印されていた場所だ。

そして、イカヅチとヤミゲドウはイーターが発する邪氣を感じでここまでやつてきた。

ヤミゲドウの完全復活を果たすために、食欲以外に目覚めた唯一の欲。

「ア、ア、ア、ア、ア、ア、ツ!!」

吠えた。

欲望は生きる目的にして、大敵だ。

満たされない欲など害でしかない。

故にイカヅチは怒り、その感情に呼応して四方八方に雷が飛び散る。

ヤミゲドウの哀しみが彼の裡に流れ込む。

—— 獣に墮ちる。

ヤミゲドウの感情の渦に呑まれながら、そんな事を思う。

イカヅチの背中から赤色の翼が生え、丁度祠の中心あたりまで飛び立ち、周囲の全てを破壊していく。

封印のために使つたのであろう札と魔法陣、イーターが眠つていた紫の繭の残骸、そして地面と壁。

視界に入るそれらを雷が碎いていき、祠が崩壊寸前となつた頃。イカヅチの常人離れした感覚が、自身に迫る異物を感じた。

直後、構えたイカヅチの掌に衝撃が走る。

——それによつて、右腕が粉碎した。

「……あ？」

そんな咳きを置き去りに、真横方向に加えられたベクトルに従つて壁に衝突する。

時間にして2秒に満たない間に、死に体となつた少年の形をした異形の肉体。

混乱で一杯のイカヅチは把握できていないが、彼の右腕は悲惨な姿と化していた。

骨は粉碎され、血管は弾け飛び、筋肉は断裂し、神経は異常を吐き出し続いている。

それらをまとめて包んでいる皮膚は……人間の色をしていない。

「ハアアアツ！」

「ヤミゲドオツ！」

追撃を加えようと迫る何者かに対し、イカヅチはバディの名を叫ぶ。

突如、両者の間に一体のモンスターが現れた。

黒い全身に灰色の鎧を纏い、尾より百足を思わせる尻尾が幾重にも伸び、目と鼻が存在しない頭部を追撃者に向けている。

それこそは厄災の権化、それこそは邪神の片割れ、それこそが、《大魍魎》ヤミゲドウ。

「チイイツ！キヤスト、《開かずの間》！」

反射的に発動した防御魔法に、ヤミゲドウの爪が突き刺さつた。

金属同士がぶつかり合つたような甲高い音が響き渡り、バリアにいくつもの穴を作る。

流石に割れはしなかつたが、ヒビが入つておりこれ以上は耐えられないだろう。

「ハツ、こうも早くそちらからやつてくるとはのう！好都合じや！」

故に地面を抉るほどの脚力でその場を離脱し、イカヅチとの会話を

試みる。

対し彼らのアクションは、

「……誰だ、お前」

「私は『トイレの花子さん』。レジエンドワールドの守護者をしておる者じや」

「知らねえな。興味もねえ」

生やした赤い翼で花子さんと同じく宙に浮き、会話に応えた。

その理由は、壊れた右腕を再生する時間を稼ぐためだ。

ヤミゲドウの影響で人間のそれではなくなつたイカヅチの肉体は、エンシエントワールドのモンスターのように再生が可能である。

ただ完全には同化出来ていないと、完治までに10分はかかる。それを遠目に理解した花子さんは静かに背後の壁に近付き、

「フンッ！」

思い切り壁を蹴つてその姿を消した。

それはイカヅチの視覚での話であり、花子さんの視界には自身を見失っているイカヅチの姿がある。

このままいけば邪神の片割れを無傷で斃し、これからのは被害を0に出来る。

そんな考えが花子さんの脳裏を駆けたと同時、

「G R O O O A A A !」

ヤミゲドウの六本の尻尾のうち、四本が叩き潰さんと殺到した。絨毯爆撃のように迫るそれに対し、花子さんは自身のベクトルを無理矢理変更して地面に着地して構えを取る。

そのまま再度地面を蹴つて尻尾に迫り、思いつきり拳を振り抜いた。凄まじい衝撃波が発生すると同時に、尻尾の一本に大穴が開き、花子さんといカヅチの視線が一瞬だけ交差する。

そして、ヤミゲドウは間髪開けず穴口掛けて爪の先端を打ち込んだ。

小さな体が勢い良く吹き飛ばされ、下肢と胴体が地面に埋まる。

「ぐつ、うううううううう……！」

白い服が裂け、ヘソの上あたりに爪が当たつている。

が、それ以上は花子さんが両腕で押さえているため進まない。

彼女はデンジャーワールドのモンスターと対等に殴り合えるだけの膂力を有しているが、それを発揮するのはあくまで少女の身体。力を余す事なく放てるわけではなく、それがここにきて大きな枷となっている。

が、膂力だけが花子さんの武器ではない。

彼女もまた、『製作者』より武器を与えられている。

「G O · · · A」

最初に異変を感じたのは、ヤミゲドウ。

敵に向けて伸ばしている腕の先、爪に発生した違和感。

あらゆる攻撃を食らつた事のあるヤミゲドウでも、過去に覚えのない感覚。

思考を共有しているイカヅチが花子さんに視線を向けると同時に、違和感の正体はそのタネを明かす。

「G Y U U U A A A — — !」

「なっ?」

ヤミゲドウの爪を、捻じ切るという形で。

そのありえない光景に、イカヅチは目を疑つた。

が、それは悪手。

自身を殺し得る脅威から目を背けたのは、そう言わざるを得ない。「フンッ！」

死が、理不尽な力の権化が、容赦なく少年に振り落とされる。

親に虐待された過去が、封印石を壊そうとやつてきた外の連中が、耳元で嫌らしく囁くドクロの姿が、走馬灯のように脳裏を駆ける。

「——羅アアアアツ!!」

がむしゃらに伸ばした左腕が、花子さんに掴まれた。捻れる。

花子さんが掴んだ所を中心に、イカヅチの腕が回転し始めた。

神経も、筋肉も、血管も、悉くを無視して一緒に混ぜて捻られる。

2秒にも満たない間にイカヅチの腕は腕の役割を放棄し、宿主から

離れ地面に落ちた。

だが、それが狙い。

左腕が消失した痛みを無理矢理意識外に追いやり、花子さんの首を掴む。

そして、もう一本の腕も無くなる前にバディに向けて叫んだ。

「俺^ガと喰らえ！ ヤミゲドウ！」

「G Y A A A O O O O O !!」

「ほう……！」

花子さんは内心感心しながら、イカヅチの腕を一瞬で捻じ切りその場から離脱した。

自身のスピードの前にはイカヅチとヤミゲドウも無力。

そう思考した脳に、予想外の声が浴びせられる。

「キヤストオ！ りゆうぼくしづい【竜木死灰】……！」

「ぐつ!?」

瞬間、未だ花子さんの首を掴んでいた手から黒紫の瘴気が溢れた。

それは花子さんの四肢に纏わり付き、身動きを取れなくする。

全身から力が抜けていく感覚に、そのまま地面に落ちた。

その魔法を発したのは、他ならぬイカヅチ。

やつた事は側から見ると呆気ないが、花子さんには信じられなかつた。

両腕を無くした状態で、一介の人間が魔法を使用したのだ。

それも、自身の腕を媒介させて。

魔力が籠つた物やモンスターの一部を触媒に魔法を行使するのは、決して珍しくはない（世界樹といった“場所”自体が仲立ちをすることがある）

だが、多大な集中力を必要とするそれをイカヅチが補助もなくやりきつたのは、花子さんの常識では測れなかつた。

（……マズイの、百鬼魔導とやらは。身動きすら取れんか。これは死んだな、我）

身動きは取れず、話してなんとかなる相手ではない。

待つのは死あるのみだと、花子さんは瞬時に理解した。

(死ぬのはよい。じゃが、知らせねば。此奴らが敵であると、我は無様に敗れたと。伯爵に伝えねば)

身動きは取れないと言つたが、指ぐらいはからうじて動く。

「コールじや、「メンジヨーはかせ」」

「はいはーい。バディファイトを研究して100年、メンジヨーはかせだぜ～……つてマジか」

現れたのは白い髭に黒い髪とグラサンを携え、白衣を身に纏つた若い男、メンジヨーはかせ。

チグハグな印象を受けるその男は、いつものように軽い調子で花子さんに話しかけ、グラサンの奥の目を見開いた。

「はかせ、手短に言うぞ。我は死ぬ。地球に行け、助けを求めよ。此奴らがヤミゲドウとそのバディじや

「りょーかい。いやしかし、別れてもんは呆気ないねえ。20年のラストがこれつて」

メンジヨーはかせは魂だけの存在、現世の存在が触れる事は出来ない。

完全体のヤミゲドウなら喰えたが、それが出来ない今、メンジヨーはかせが最も安全にドーン伯爵に情報を流せると判断した。

そして花子さんはヤミゲドウの腕に掴まれ、

「……後は頼むぞ、悠斗よ」

イーターの所有者の名を呑き、その腹に収まつた。

これがこの日、レジエンドワールドに起きた悲劇、その全てである。

第三章 新たなる舞台、スター・ドラゴンワールド

第24話 積み重なる課題

声が、感触が、映像が、水泡のように浮かんで消える。

僕の知らないそれらが、まるで僕の記憶だと主張するように脳にこびりついて離れない。

未知の海を揺蕩つているようだつた。もしくは、深海に沈んでいるような。

そんな中、一際大きな声が響く。

「ひねりつぶせ！ ギア・ゴッド▽！」

聞いた事がない聲音だった。

厳格 そうな男の声。

そして数秒遅れて、映像が脳裏に映る。

歯車が何十何百と重なり合つた形容し難い異形が、アジ・ダハーカと激突していた。

しかしそれも一瞬だけ。

すぐさま別の映像と音声に切り替わる。

どこかの島に立っていた。

兄さんの記憶では無人島らしいが、眼前には明らかに人が彫つた巨大な石板がある。

『分かたれたバルソレイユの魂、ドラゴンフォースとなりてここに眠らん』と、読めはするが意味不明な単語の羅列。

その内容を吟味する間もなく、次はどこかの執務室。
いや、ここは……

「悠斗、僕はこの世界を壊そうと思つてゐる」

全ての始まりとも言える、あの部屋の記憶だつた。

何故、こんな昔の事を兄さんは思つていたのか、それはわからない。けれどやはり……兄さんにとつても印象深かつたのだろう。

と、今度は映像が切り替わらず、真つ暗な闇に包まれる。

果心居士が読み取れた記憶はここまでかと思考したその時、アジ・

ダハーカと兄さんの声が聞こえた。

『奴らはお前を殺す気でいる。キヨウヤよ、お前はあまりにも不穏分子すぎるのだ』

「フフ、僕もただの一般人に過ぎないよ。ただ種を蒔いているだけさ。彼らに届きうる不穏分子を芽生えさせたための、ね」

直後、意識が引っ張られる感覚と共に、明るい光が網膜を焼いた。

「……ソフィア」

「悠斗様つ」

保健室……か。

失血で倒れてから、ずっと寝こけていたらしい。

体を起こし、ソフィアに視線を向ける。

微かに瞳が揺れている……心配させてしまったのか。

「あー、……取り敢えず、お互ひ無事で良かつたよ。あと、いくつか重要な情報が手に入つたんだ。きっと僕らの助けになる……きっと……」

正直なところ、僕が兄さんを止められるのか、わからない。

僕が学園生活やABCカップにうつつを抜かしている間にも、兄さんは戦力を揃え、仲間を集め、情報を仕入れている。

正直、どう足搔いても止めるのは不可能なのではないだろうか……兄さんの記憶を覗いて、そう思ってしまう。

「いざとなれば、どこまでも——」

「言うな」

ソフィア、それは、『どこまでも逃げましよう』なんて、それだけは言つたらダメだ。

今僕では、その甘い誘惑を断れない。

兄さんの前に立ち塞がると決めたのに、その決意が無駄になつてしまふ。

……ダメだな、本当に参つてしまつて。

「……少し、一人で考えたい」

「ダ—。外で待機してますので、御用件があれば」

そう言つて、ソフィアは部屋から出て行つた。

瞬間、張っていた虚勢がなくなり、無力感が全身を支配する。そのままゆつくり、ゆつくりと意識の海に沈もうとすると、

『おい、マスターよ。今暇か?』

ヴィーからの念話が脳内に響いた。

「客観的にはな。内情はそうでもないけど、何か話か?」

『紹介したい者がいる。保証は出来んが、其方の役に立ちたいと言うのだ』

「名前」

『明かせん』

「……チツ、呼んでくれ」

ヴィーが情報を明かさないのは、楽しんでいるが故だ。

堅物に見えて意外な側面だと驚いた記憶がある。

まあ、その僅かな道楽に付き合つてやろうじゃないか、バデイなのだし。

「ジャンジャジャーン、呼ばれて飛び出て登場。禍津ジンやで」

「私の事は気にしなくていいわよ、ただの付き添いだから」

ヴィーが出したワームホームから現れたのは予想外の客人であったが、想定内ではあつた。

禍津ジンとそのチューナー、真間雁メグミ。

さて、この二人が話したい事とは一体何なのか。

「おお、めっちゃ顔色悪いやん。何や悪い事でもあつたんか? 例えばそう、貧血とかな」

……こいつ、素で言つてるのか? 当たらずとも遠からずなのが恐ろしい。

「……僕の事はいいだろ。君らの話を聞きたい」

「自分、専属のデッキビルダーおらんやろ。そこでや、俺が紹介したる。もちろんタダやで」

「怪しい。裏がありそ。お前にメリットがない。以上を統合して、胡散臭いな」

「カツカ、予想通りボロクソやな。俺ん中では理屈通つとるんやけど」

ジンの過去については、彼の口から聞かせてもらつたことがある。

金や希少価値の高いカードを賭け、バディ・ポリスの目を搔い潜りながら行われる闇ファイト。

ジンはそここの運営の雇われ……つまり、サクラ。

既に闇ファイトからは足を洗つたらしいが、それでも黒い噂は絶えない。

そんな者の中で、どんな整合性を取れば僕にデツキビルダーを紹介するなんて話になる？

意図が読めない。

「もう少ししだけお天道様を見てみたい。そんな所や」

「はあ……？」

わかるようでわからない例えだな、それ。

「……一応、招待を受けよう。で、そのデツキビルダーの名は？」

「自分もよく知つたる人物で、俺たちが思う世界最高のビルダーや」

「だから誰——」

「爆坊。牙王をABCカップ優勝に導いた、影の功績者やな」

「……へえ

◆◆◆◆◆

その時、自分の中に並々ならぬ興味が湧いたのを感じた。

ジンらの来訪を知つていたソフィアを連れ、僕らは牙王の家に向かう。

何故かとジンに問うと、どうやら今牙王の家でABCカップ優勝の祝賀会が行われており、それに爆も出席しているかららしい。

A B C カップ、か。

「なんや悔しいんか？」

「牙王と再戦出来ないのがな。出来れば公式戦で戦いたかった」
「ほーん」

それからは特に会話もなく、牙王の家の前まで来た。

夜7時だが、中からは賑やかしい喧騒が聞こえてくる。

「じゃ、いつもやりますか。闇狐」

「了解した」

「何を……おい」

ジンのバディ、闇狐が手の平に浮かべた炎を消す。

すると、眼前の家の明かりも消えた。

喧騒が悲鳴まじりの声に変わる。

「ほら、早よ中に入るんや。目が慣れたらおもうなくなるで！」

「真間雁。あいついつもあんな感じなのか？」

「違う。けど、未門牙王と出会つて変わつた」

またか。

未門牙王、最近、彼の名をよく聞くようになった。

フューチャーフオースは強い人間に宿る。やはり、彼には適性がある。

「いつそ、全部吐くか……？」

兄さんの計画も、僕がやろうとしている事も、イーターも、何もかもを託して。

ただの傍観者に成り下がるのも悪くないと、思つてしまつた。

「何か言つた？」

「いや、何でもない」

そんな汚い、逃げ腰の妄想を捨てて、ソフィアと共に牙王の家に乗り込んだ。

見知った靴から推測するに、牙王とその親族、そして天野鈴鈴羽がいるのは間違く、他は小学生のものだろう。

と、そうしている間に電気がついた。

「なんだよ脅かすなよ、禍津先輩」

「かつ、遅れとるんやしそーぎ良く来んのもつまらんやろ？
ちよつとしたサプライズや」

「これじやサプライズじゃなくてドッキリだよ……」

おい、ジン。

この後どうすれば良い、この流れの中出ていくなんて嫌だぞ。

「で、こちらが本日の主役。臥煙悠斗君や！」

そんな掛け声と共に、廊下に立つ僕に視線をやるジン。

渢々、重い足を引きずつて牙王達の前に出た。

ふむ、小学生の面子は黒岳テツヤ、パル子、青髪の大人しそうな少年か。

「……あー、どうも。僕が臥煙——」

「悠斗先輩！ なんで本戦に出なかつたんだよ!?」

自己紹介を終える前に牙王に肩を掴まれた。

「想像を絶する腹痛が起きてな。出たくても出れなかつたんだよ」

「話では、貴方が窓から飛び降りる姿が確認されているのですけれど？」

おい、話をややこしくするな天野鈴鈴羽。

「ハツハツハ、まあ終わつた事は良いじやねえか。それよりセンパイはどうしてここに来たんだ？」

テツヤのバディ、アスモダイにそう問われ、皆が僕の発言に耳を傾ける。

ああ、たつた一言で話が進んだ、非常に助かる。

「大盛爆、君に頼みたい事がある」

皆の視線が僕から一人たゞ焼きを貪つてゐる大盛に移つた。

まさか自分に要件があると思わなかつたのか、彼の双眸は見開かれ、頬が引きずつてゐる。

「……え、俺？」

彼の言葉に、僕は軽く頷いた。

第25話 デッキビルド

リビングから場所を移し、未門家格技室。道場

僕と大盛が向かい合い、彼の側にライブラリーである宇木くぐるが座る。

そして大勢の野次馬に囲まれながら、まず僕が口を開いた。

「僕のデッキはドラゴン・ツヴァイだ。これだけは変えられない」
【エーヴィヒカイト】を始め、【イータ】や【ドラム バスター】ブレイク】等、僕のデッキはドラゴン・ツヴァイだからこそ入れる事の出来るカードが多い。

各々のポテンシャルを完全には引き出せない代わりに、重量打線で一気に勝負を決める。

それが大まかなデッキコンセプト。

「じゃあまず、必須なカードから洗い出していくか。サポート頼むぜ、くぐる」

「わかつたわ、爆ちゃん」

大盛がいつも持ち歩いている工具箱が開けられ、ゆうに一万は超えているであろうカード達が顔を出す。

そこから何十枚か取り出して僕の前に並べられると、それらの共通点に気が付いた。

「全部、チャージカードか……？ しかもツヴァイでも使える……」「アンタのデッキはいつか組んでみたいと思ってたからな。準備は出来てる」

「そうか」と言葉を返しつつ、カードに目を落とす。

ゆっくり、ゆっくりと、一枚一枚手に取つて、思考の海に沈む。

「……【魔竜の眷属 ゴライオウ】。このカードは、ベストじやない……な。【黒晶竜 ルシアンブラック】か、【刻印竜 レルブレイン】の方が良い」

【ゴライオウ】は手札から捨てる事でゲージ+2、【ルシアンブラック】は登場時ゲージ+2、【レルブレイン】は登場時ライフ1を払う事でゲージ+3。

こうして比較してみると、【ゴライオウ】を選択するのはナンセンスに思える。

「ああ、その通りだ先輩。【ゴライオウ】は手札から出せるチャージカードだが、【エーヴィヒカイト】の能力候補に上がつちまつたら完全に損でしかない。登場時効果がないしな」

【エーヴィヒカイト】の能力はデッキトップ3枚、その時必要なカードが来てくれるわけではなく、その貴重な枠を【ゴライオウ】で埋めるべきではない。

もつと言うと、大盛の言う通り【ゴライオウ】は手札からしかゲージを貯められない、出す価値がないのだ。

よつて、【ルシアンブラック】か【レルブレイン】か。

【レルブレイン】四積み

ツヴァイはライフの価値が低い、よつて【レルブレイン】一択。が、チャージカードがこれだけというのはあまりに心許ない。何か他に欲しい所……。

「二つ、選択肢があるわ」

「へえ、聞かせてもらつても？」

「今の悠斗先輩のデッキ、ドラゴンズ・ヴァーズイン……だつたかしら？ それのデッキコンセプト。二つ思いついたの」

「二つからは俺が説明する。まず、今までのデッキの延長線上、色んなワールドの色んな強いモンスターを採用しまくる形

「もう一つは？」

「スタードラゴンワールドが持つ特性、【クロスナイズ星合体】。それに特化させる」

それは、その選択肢は、考えた事がなかつたわけではない。
ただ、それは、

「……【イータ】も【ラム】も、採用する余地が残らないな」「ああ、どうしてもスタードラゴンワールドの真似事になつちまう」

僕が積み重ねて来た努力を、少なからず否定する。
抵抗はない。だが、どうしようもなく勇気が出ない。

本当にそれが最適解なのか否か……いや、ダメだな。

デッキ構築なんて頭の中でぐるぐる考えて完結するものじやない、

つまり今僕がすべきなのは。

「真間雁、一旦クロスナイズ軸で組んでみるから、チューニングを頼む」

「ええ、いいわよ。将来ジンが対戦するかもしれない相手のデッキ把握は、しておいて損ないもの」

そう真間雁が頷く横から、元気のいい声で体を乗り出す少年とそのバディが一組。

「いや、悠斗先輩！ そういう事なら俺が相手になるぜ！」

「牙王の言う通りだ！ オイラももう一度戦つてみてえ！」

「おいおいちよい待ちい。そんなら俺も立候補させてもらうで。ABCカツップじや戦えなかつたしなあ」

「あら、それはワタクシも同じですわよ」

「俺も荒神先輩を倒した悠斗先輩に興味あるYO！」

「あ、じゃ、じゃあ僕も……」

ああ、どうしてこう、バディファイターは闘争本能が高いのか。

同じ穴のムジナ達にそう思わずるを得ないが、思えば僕も、欲求不満のようなものが溜まっていたのかもしねりない。

A B Cカツップには出れなかつたし、夜もまだまだ更ける様子はない。

「ああ、良いぜ。思う存分戦おう」

デッキを完成させてからと、そう付け加えて。

僕は大盛が用意してくれたカード群を手に、最適解を模索し始めた。



まず、牙王と戦つてデッキが回らない事を確認する。

「んー……『ネオドラゴン』と『ドラグアームズ』の比率がダメだな。『ネオドラゴン』を増やそう

ジンと戦つて、不安定すぎるデッキトップ参照を考え直す。

「ソウルに入れる『ドラグアームズ』をデッキトップじゃなく、ドロップゾーンから仕入れる。ぐぐる、あるか？」

「ええ、【超剥元竜 EXA・ディメンジョン】と【超高次竜 EX・

【ディメンジョン】がピッタリね

鈴羽と戦つて、採用する『ドラグアームズ』の弱点が露呈する。

「能力が細分化しすぎてて、取捨選択が難い。【大竜装機 ソニツクブラスト】の採用はナシだ。【流星機 バイシャール】と【大竜装機 トリプルバスター】、あと【流星機 ピスカ・ピスカ】に絞ろう」

黒岳テツヤと戦つて、大胆な選択を迫られる。

『ドラグアームズ』は『ネオドラゴン』のソウルにないと能力が発動しない。だからサイズ3は全部『ネオドラゴン』にしよう。幸い、【エーヴィヒカイト】も『ネオドラゴン』だしな

氷竜キリと戦つて、ゲージ管理の難しさに直面する。

「だあああ！ 悠斗先輩が【ゴライオウ】を採用してた理由がわかつた！ ゲージが足りねえ！ 手札からチャージしてえ！ モンスターだと【エーヴィヒカイト】を押し出さなきやならねえ！」

「爆ちゃん！ 【超星骸 スターレムナント】を採用しましよう！ あれなら腐りにくいわ！」

そうして、数々の試行錯誤を経て。

気付けば空が白みがかり、外から冷たい風が吹いてくる時間帯に、僕のデッキは完成した。

全員が本気で取り組んでくれた結果であるが、まだだ。

まだ、最後のチューニングが残っている。

……このデッキで最初に戦い相手は、最初から決まっている。

【ファイトだ……ソフィア】

「ダ一。了解しました」

今までの行為をずっと静観して見守つてくれていた彼女が、立ち上がる。

大丈夫だ、いつもと違つて対策が出来ている。

だが、ソフィアも先の短時間で僕のデッキは理解し尽くした。

勝負を決めるのは判断力と、運だけだ。

最早面倒臭くなつて省略したフラッグ開示と口上を経て、僕らのファイトは始まる。

「では、私のターンから。ドロー」

さあ、今日こそ勝とうじゃないか、相性最悪にして最愛の、ソフィア・サハロフに。

第26話 いざ新世界へ

バディポリス日本支部。

世界最高峰の技術力を有したその施設の一角に、エクスペリメンタル・ステージというものがある。

直訳で試験的な舞台と読むその場所は、バディポリス職員のみが使用可能なファイティングステージだ。

日夜凶悪なファイター、クリミナルファイターを取り締まる職員たちには、当然ファイトの腕も求められる。

いくらバディポリス結界でクリミナルファイターを捕らえたとしても、ファイトで負けては意味がない。

故に創設者が多大な資金と時間を要して作ったこの施設は……連日使用者0がデフォルトとなっている。

理由は単純、時間の無駄で、さして必要がないからだ。

デッキのチューニングがしたいなら適当な休憩場所でやれば良いし、ファイトしたいなら机の上にカードを展開すれば良い。

エクスペリメンタル・ステージでカードを実体化させて攻防を繰り返すのは、完全に時間の無駄なのだ。

が、この日は違った。

一組の男女の声が、だだつ広いステージに本霊している。

「竜剣 ドラゴブレイバー」を装備、さらにゲージ1を払い、「ジャックナイフ・ドラゴン」を「ジャックナイフ『アグレッサー』」に進化！」

「オオオオ！」

紅い宝石のような鎧に身を包んだジャックが、2枚のソウルを伴つてレフトエリアに登場する。

その隣、センターエリアに降り立つのは当然、ジャックのバディである龍炎寺タスク。

「行くよ、アタックフェイズ」

「対抗であります！ゲージ1を払い、「クインク＝ラーダ・高機動フレーム」をコールであります！」

対し、彼らの前に立ちはだかるのは一隻の戦艦。

宙に浮いた白と黄緑を基調とした機体に、一本の巨大な電動レールが装着されている。

ローレンツ力を利用し、強烈な電流を一気に流して膨大な磁界を発生させて物体を加速射出させる装置。

より簡単に言うなら、超巨大なレールガンだ。

「僕が【クインク＝ラーダ】を破壊する！ ジャック、トドメは頼む！」

「オウ、任せろ！」

タスクの握る【竜剣 ドラゴブレイバー】がセンターをこじ開け、ジャックのブレイド・ターミネイトが対戦者、帝都クウのライフ3を削り切ろうとした。

だが戦艦は切り裂かれることなく、完全にブレードを受け止めている。

「キャスト、【本気で来いよ！】であります。その攻撃を無効化し、自分のライフを+1でありますよ」

これでアタックフェイズは終了。

もう攻撃できるモンスターはおらず、タスクにガルガンチュア・パニッシャーがない事をクウは知っていた。

故に初勝利を夢想するのも仕方ない事だろう。

タスク相手にそれをするのは、甘いと言わざるを得ないが。

「ファイナルフェイズ！ キャスト！」

「うええ!? そつ、そんなバカなであります！ ガルガンチュア・

パニッシャーはもうないでありますよ!?」

「僕たちは日々進歩する。これが新たなパニッシャーだ、【ドラゴニックス・パニッシャー】！」

「うわああ～んっ!!」

直後、クウのフラッグが霧散し機械音声がタスクの勝利を告げた。

結界は解かれ、アイテムも、モンスターも、そしてパニッシャーも消える。

残つたのはバディモンスターであるジャックと戦艦……【暦級五番艦 サツキ】だけだ。

「ありがとうございます、良いファイトだつたよ」

「こちらこそあります。タスク先輩とファイトが出来たなんて光栄であります」

帝都クウ。

蒼い瞳に水色の髪を二つの珠で結び、海軍服風のコスチュームに身を包んだバディポリス見習い。

そして小4。つまり10歳だ。

そんな少女が仮にもバディポリスとなつている理由は、バディのサツキにある。

シンプルな兵器だけで見ても破格の制圧力と破壊力、ワームホールの起点となる重力場を個で発生させられる科学力、未だ空想論の域を出ない“感情を持つ機械”の存在、つまりサツキが存在している事そのもの。

モンスターとして見ても、機械として見ても、常軌を逸したモノ。それがサツキなのだ。

「でも、珍しいでありますね。タスク先輩が誰かとファイトするなんて」

「そうかな？ この前牙王君とファイトしたし、そんなに変でもないよ」

嘘だ。

今までのタスクは彼しか所持していないオリジナルカードを多数抱えていたため、情報が漏れるのを恐れて公式ファイトをしてこなかつた。

だが臥煙キヨウヤという明確な敵が現れた今、そんな事を言つてられる様な状況ではない。

(彼に对抗しうるのは弟の臥煙悠斗だけ……それはマズい。僕ももつと貪欲に、誰も追いつけないようなスピードで強くなつてみせる) とはいえ、強いカードを乱雑に纏めるだけでは手札事故は必須。故にこうして帝都クウにファイト相手を申し込んだ、というわけである。

「ふむ、二人だけとはまた珍しい組み合わせだな」

その時、自動ドアが音を立てて開きドーン伯爵が現れた。

その手には杖ではなく、薄い資料が握られている。

タスクとクウは彼の方を向き、表情を真剣なものに切り替える。

伯爵が現れる時即ち、特別な依頼がある時だ。

日本で唯一フューチャーフォースを使える存在、タスクにしか解決できない事件というものは多い。

「今日はどの様な要件ですか？」ドーン伯爵

「ああいや、今回用があるのは君ではない。クウ、君だ

「え、自分ですか？」

「そうだ」

二人がなぜ、という疑問を発するより早く、伯爵がその口角を上げ、「遙か未来の世界に興味はないかね？」

そう語り始めた。

◆◆◆◆◆

新たなデッキが完成した。

みんながいたからこそ出来た大胆なコンセプト変更を経て、それは今、僕のダークコアデッキケースに収められている。

「イーター」を始め、手に入れたモンスターがほぼ無駄になってしまつたのは悲しいの一言では表せられないほど複雑だが、彼の言葉を借りるなら、

「これも僕の運命か」

「急にどうしたの？」

「いや、なんでもない」

目の前に立つ一体のモンスター【スター・ワイザード キヌース・アクシア】にそう答える。

彼は闘技場でソフィアと出会つたらしく、それ以来同行を許しているらしい。

理由はわからない、気まぐれか、はたまた別の理由があるのか。「ふーん。で、今まであえて聞かないでおいたけど、今から何するつもり？」

「未来を読んで当ててみると良い。ああ、ちなみにこの未来を変更す

る予定はないから安心して良いぞ」

「……なんでキヌース一族の秘術を知ってるのかは置いておいて、正気なの？ スタードラゴンワールドに跳ぶなんて」

人間とドラゴンワールドが融合し、技術大国となつた世界、それがスタードラゴンワールド。

僕は今から、その世界に行こうとしている。

「理由は二つ。まず、新たな『ドラグアームズ竜装機』が欲しい。二つ目、ヴィーが成長できる『何か』を探す」

『ドラグアームズ』はスタードラゴンワールドにのみ存在する機械生命体。

そんなモンスターがこの世界に存在するのは、バディ・ポリスとタコ助、そしてヴィーが持つ時空超越技術で未来に飛び、その世界のモンスターを連れてきているためだ。

つまり、新たな『ドラグアームズ』を手に入れるには未来に行くしかない。

ヴィーもスタードラゴンワールドの産物、強化する術はなくはないだろうという読みだ。

「で、ソフィアは？ 私、彼女がいないと戦えないのだけど」

「ソフィアには地球に留まつてもらつていて。イーターの解析と、監視だ。だから君も戻つて良いぞ」

「えー、私の予知、いらぬい？」

「いらない。というか使えないだろう」

1000年後に跳ぶんだぞ、魔力がいくらあつても足りん。

「ま、付いて行くけどね」

「……まあ、問題はない、か」

話が一区切りついた直後、上方から異音が響いた。

ここ、バディ・ポリス本部の屋上よりも、遙か上空から。

見れば、青空や雲を抉り取るように巨大な虚が空いている。

それはおよそ自然界に存在しない怪音を撒き散らしながらみるみるうちに大きくなつていき、見事なワームホールが出来上がつた。

そこから現れるのは、一隻の戦艦。

宙に浮くサイズ5、人工A.Iが搭載された初のモンスターにして人智を超越した存在、【暦級五番艦 サツキ】であった。

「な……な……何なのよ、あれえ……」

「超時空破壊兵器、まあ簡単に言うと、世界の切り札だな」

サツキが完全に姿を現すと、ワームホールは収縮していくもの空に戻る。

僕とアクシアがバディポリス屋上に立っていたのは、このためだ。サツキ本体、そしてソレがワームホールを通過出来るスペースの確保は難しい。が、空なら問題ない。

それに無理して地下や家にワームホールを作れば、空間修復の影響で大惨事は必至だからな。

「お前がっ！ 臥煙悠斗でありますか!!」

そして、サツキの双砲、その上に立つ人物が一人。

白い服の裾と蒼い髪が靡き、水色の瞳の少女が静かにこちらを見下げている。

「ああ！ その通りだが、降りてきてくれないか！」

空に向けてそう叫ぶと、彼女は双砲から飛び降りた。

アクシアが短い悲鳴と共に目を剥くが……心配はいらないだろう。

彼女らほどの信頼関係なら、バディスキルは持っていて当然なのだから。

その予想は的中し、

「ふう……改めて、初めましてなのであります」

「ああ、初めて。帝都クウと、暦級五番艦 サツキ」

僕と同じタイプのバディスキルで降りてきた彼女は、僕の予想以上に予想以下だった。身長が。

いや、小6の平均身長なんぞ覚えてないが、確実に未門牙王らよりも低い。

ちゃんと食べているのだろうか……と、心なし、彼女の視線が懷疑的なものになつていて、気付く。

いくつか心当たりはある……が、こちらから触れる必要もない。

「タスク先輩から聞いたであります。お前、臥煙キヨウヤの弟であり

ますね」

「ああ、そうだな。それが？」

コアーデックキケースの生産を確固たるものにした、まさしく時の人。

それが兄だ。今時、知らぬ人な方が珍しいだろう。

「タスク先輩はキヨウヤが嫌いであります。なら、私も嫌いであります。そして、弟であるお前も嫌いであります」

「そうか、心底どうでも良い」

タスクがキヨウヤを敵対視した事は嬉しいが、帝都に嫌われようが問題はない。いざという時【サツキ】の力を借りられないかもしけないでの、不安要素ではあるが。

「じゃ行こうか。僕も君も、暇じゃないだろ？」

「チツ、なんかお前、嫌な奴でありますな」

「初対面で嫌いと言い切った君に言われたくないなあ」

そんな口論を交わしつつ、僕らは【サツキ】に乗り込んだ。